

# 天童山古墳群発掘調査報告

－附編　近代古墳発掘調査報告－

2006（平成18）年12月

三重県埋蔵文化財センター





天童山 8 号填横穴式石室全景（東から）

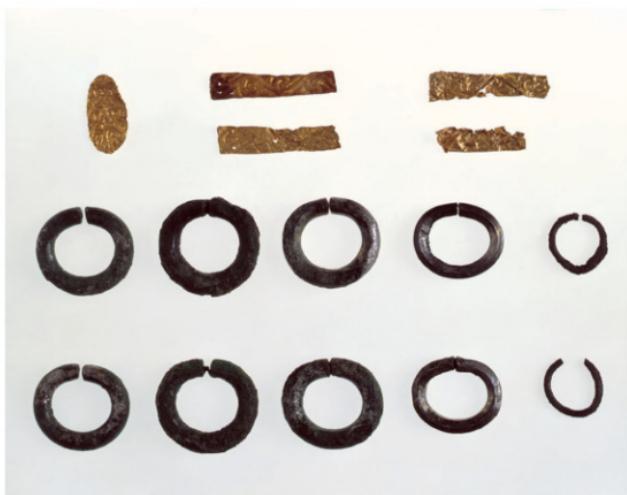


天童山 8 号填玄室内遺物出土状况（南から）





天童山 8 号填竖穴式小石室副葬品



天童山 8 号填横穴式石室出土金製飾品・耳環



## 序

伊賀地域は大和の隣国であり、古来より都から東国への玄関口として重要な位置を占めていたと考えられ、それは古墳時代においても、石山古墳や美旗古墳群、県内最大の前方後円墳で知られる御墓山古墳といった大型の古墳が築造されることからも窺えます。

今回報告する伊賀の天童山古墳群は、上郡地区に所在しますが、当地はその名が示すように、古代には郡衙が存在したのではないかと想定されているところです。また、壬申の乱の際には、大海人皇子の軍勢が当地を北上し、木津川の対岸には天武天皇勅願の財良寺が建立されるなど旧伊賀国的重要地として栄えたところと考えられています。

天童山古墳群は、県道工事に先立って調査が行われ、2基の古墳から横穴式の石室が確認され、石室内から金箔片や耳環・装身具・武器のほか、多くの副葬品が出土しました。また、古墳の築造に際して、土器を用いた数々の祭祀が行われたことが判明し、墳丘における祭祀の痕跡が良好に確認できる貴重な事例となりました。残念ながら、古墳は消滅しましたが、今回の調査により、古墳時代における伊賀中部の様相の一端が明らかになったことで、伊賀の歴史の解明に少しでも寄与できればと思います。

発掘調査にあたっては、地元上郡地区をはじめとする旧上野市（現伊賀市）の方々、上野市（現伊賀市）教育委員会、県土整備部道路整備課・上野（現伊賀）県民局建設部から多大なご協力、ご配慮を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

2006年12月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水康夫



## 例　言

- 1 本書は、三重県伊賀（旧上野）市上郡に所在する天童山古墳群<sup>てんどうやまこふんぐん</sup>の発掘調査報告書であり、古墳の関係から巻末に伊賀市近代古墳（昭和 62 年度調査）の発掘調査報告を併せて収録している。
- 2 調査は下記の体制で実施した。
- 調査主体　三重県教育委員会　　調査担当　三重県埋蔵文化財センター  
　平成 15 年度　　調査研究第 I グループ　主事　船越重伸  
　　主事　小倉整  
　　主事　水本龍治  
　　臨時技術補助員　農田祥三・酒井巳紀子  
　　発掘作業・調査記録受託者　安西工業株式会社（平成 15 年度）
- 3 本書の執筆は農田祥三と船越重伸が、編集は農田祥三が行い、遺物の撮影は農田祥三、田中久生が担当した。なお、文責は目次と文末にも表記した。
- 4 本書が対象とした実調査面積 1,389m<sup>2</sup>である。
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、平成 15 年 5 月 1 日から平成 15 年 10 月 19 日である。
- 6 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた（所属当時）。  
　岩原剛（豊橋市美術博物館）奥田尚（樅原考古学研究所）鈴木一有（浜松市園芸課）  
　竹内英昭（斎宮歴史博物館）八賀晋（三重大学名誉教授）福田典明（上野市教育委員会）  
　笠井賢治（上野市史編纂室）財団法人元興寺文化財研究所 奈良文化財研究所
- 7 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成 15 年度（一）上野島ヶ原線緊急地方道路整備（B 改良）工事業である。
- 8 発掘調査にかかる経費は、三重県県土整備部が負担した。
- 9 本書が扱う発掘調査の資料、並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　例

### (地図類)

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、伊賀市（旧上野市）都市計画図である。
2. 本書で示す方位は、真北を用いた。なお、座標は世界測地系を用いた。これらの地図類、本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第VI系を用いており、平成14年4月から施行されている世界測地系には対応していない。
3. 掘団の方位はすべて座標北で示している。なお真北は座標北の西偏 $0^{\circ}16'$ 、磁北は座標北の西偏 $6^{\circ}40'$ である。

### (遺構類)

1. 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1967年初版)を用いた。
2. 本書での遺構は通番となっている。遺構の性格については、遺構表示略記号を用いて表示した。 SD：溝 SH：竪穴住居 SK：土坑 SZ：落ち込み Pit：柱穴

### (遺物類)

1. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺については、その都度指示している。
2. 遺物実測図は、全体としては通番である。
3. 遺物観察表は以下の要領で記載している。

報告書番号…掘団掲載番号である。

実測番号…実測段階の登録番号である。

器種…遺物の器種を示す。

出土位置…調査時に出土した地点を記した。

遺構…遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量（cm）…遺物の法量を示す。口径は口縁部径、底部は底部径、器高は遺物の高さを示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径である。

調整・技法の特徴…おもな特徴を内面（内：）外面（外：）で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に掲げる。

残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示し、分子の数値のみ記した。6は約半分、全体が残っているものは完存と記した。

# 本文目次

## 天童山古墳群

I	前言	（船越・豊田）	… (1)
II	位置と歴史的環境	（豊田）	… (4)
III	天童山古墳群の概要	（豊田）	… (7)
IV	遺構と遺物	（豊田）	… (11)
1	天童山8号墳		… (11)
a	横穴式石室		
b	出土遺物		
c	竪穴式小石室		
d	出土遺物		
e	7号墳想定地		
2	天童山13号墳		… (37)
a	墳丘		
b	出土遺物		
3	土壙墓		… (45)
4	弥生・古代の遺構		… (45)
a	遺構		
b	遺物		
V	保存処理について	（大川操 山岡奈美恵 川本耕三 植田直見）	… (61)
VI	分析報告		… (66)
1	琥珀玉類の分析	（財）元興寺文化財研究所 植田直見	… (66)
2	耳環・金製刀装具の化学分析	（大川操 山岡奈美恵 川本耕三 植田直見）	… (71)
3	天童山8号墳出土ガラス製玉類の分析	（大川）	… (78)
VII	まとめと検討	（豊田）	… (84)

## 附編 近代古墳発掘調査報告 一伊賀市下神戸所在一

I	前言	（豊田）	… (140)
II	位置と環境	（豊田）	… (142)
III	墳丘	（豊田）	… (143)
IV	遺物	（豊田）	… (149)
V	結語	（豊田）	… (160)

## 挿図一覧

- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 第1図 調査区位置図                      | 第38図 天童山8号墳出土琥珀の赤外吸収スペクトル                    |
| 第2図 天童山古墳群周辺の遺跡                 | 第39図 出土琥珀の赤外吸収スペクトル<br>(上椎ノ木1・大塚C-1・河田B-3号墳) |
| 第3図 天童山古墳群分布図                   | 第40図 標準琥珀の赤外吸収スペクトル                          |
| 第4図 古墳群調査前測量図                   | 第41図 出土琥珀の熱分析                                |
| 第5図 古墳群調査後測量図                   | 第42図 標準琥珀の熱分析                                |
| 第6図 8号墳丘土層断面図                   | 第43図 耳環の構造と環境接面の形態                           |
| 第7図 8号墳横穴式石室平面・立面図              | 第44図 耳環の重量                                   |
| 第8図 8号墳横穴式石室<br>(平面図・石室プラン)     | 第45図 耳環の寸法                                   |
| 第9図 8号墳横穴式石室玄室内遺物出土状況           | 第46図 蛍光X線分析結果(1)                             |
| 第10図 美道部土器出土状況図                 | 第47図 蛍光X線分析結果(2)                             |
| 第11図 金製刀装具実測図                   | 第48図 蛍光X線分析結果(3)                             |
| 第12図 8号墳横穴式石室出土遺物 耳環・玉類         | 第49図 蛍光X線分析結果(4)                             |
| 第13図 8号墳横穴式石室出土遺物 玉類(2)         | 第50図 ガラス小玉螢光定性X線分析結果(1)                      |
| 第14図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器(1)         | 第51図 ガラス小玉螢光定性X線分析結果(2)                      |
| 第15図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器(2)         | 第52図 ガラス小玉螢光定性X線分析結果(3)                      |
| 第16図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器(3)         | 第53図 小石室と1墳丘多石室の類例                           |
| 第17図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器・工具・鉄釘      | 第54図 墳丘構築過程概念図                               |
| 第18図 鉄鏃・両頭金具部分名称                | 第55図 天童山古墳群と伊賀の後期古墳                          |
| 第19図 8号墳横穴式石室出土遺物 土器(1)         | 第56図 古墳周辺地形図                                 |
| 第20図 8号墳横穴式小石室出土遺物 土器(2)        | 第57図 古墳周辺地形図(2)                              |
| 第21図 8号墳堅穴式小石室検出状況              | 第58図 近代古墳位置図                                 |
| 第22図 8号墳堅穴式小石室遺物出土状況図           | 第59図 近代古墳平面実測図                               |
| 第23図 8号墳堅穴式石室出土遺物               | 第60図 墳丘土層・周溝土層断面図                            |
| 第24図 8号墳堅穴式小石室平面・立面図            | 第61図 堪穴式石室平面・立面・断面図                          |
| 第25図 8号墳丘・周溝内土器出土状況             | 第62図 石室内遺物出土状況図                              |
| 第26図 弥生土器出土状況                   | 第63図 周溝トレンチ・木製品・くびれ部土器<br>出土状況               |
| 第27図 8号墳丘・周溝内出土遺物               | 第64図 甲冑出土状況図                                 |
| 第28図 8号墳・7号墳想定地出土遺物             | 第65図 三角板革級衝角付冑実測図(外面)                        |
| 第29図 13号墳丘土層断面図                 | 第66図 三角板革級衝角付冑実測図(内部)                        |
| 第30図 13号墳横穴式石室平面・立面図 プラン        | 第67図 板縫実測図                                   |
| 第31図 13号墳玄室内遺物出土状況              | 第68図 三角板新留短甲実測図(外面)                          |
| 第32図 13号墳横穴式石室出土遺物実測図           | 第69図 三角板新留短甲実測図(内部)                          |
| 第33図 13号墳・S X 2出土遺物実測図          | 第70図 三角板新留短甲実測図(内部)                          |
| 第34図 土壇SK 3・S Z 4堅穴住居SH 5実測図    | 第71図 三角板新留短甲実測図(脇部内部)                        |
| 第35図 土壇墓S X 2遺物出土状況図            | 第72図 短甲展開模式図                                 |
| 第36図 土壇SK 3・S Z 4出土遺物実測図        | 第73図 頭甲・鉄製品武器実測図                             |
| 第37図 井田川茶臼山古墳出土琥珀の赤外吸収<br>スペクトル | 第74図 近代古墳出土遺物実測図                             |

## 表一覽

第1表	天童山古墳群一覧表	第12表	鉄織・工具觀察表
第2表	金製刀器具觀察表	第13表	土器觀察表(1)
第3表	耳環觀察表	第14表	土器觀察表(2)
第4表	玉類觀察表(1)	第15表	土器觀察表(3)
第5表	玉類觀察表(2)	第16表	土器觀察表(4)
第6表	玉類觀察表(3)	第17表	分析試料一覧
第7表	鉄製品觀察表	第18表	耳環の重量と寸法
第8表	鉄織觀察表(1)	第19表	ガラス小玉螢光X線定量分析表
第9表	鉄織觀察表(2)	第20表	伊賀の横穴式石室一覧表
第10表	鉄織・工具類觀察表	第21表	伊賀の横穴式石室一覧表(2)
第11表	刀子・鉄釘觀察表	第22表	古代土器・埴輪觀察表

## 写真図版

卷頭1	上：天童山8号墳横穴式石室全景 下：天童山8号墳玄室内遺物出土状況	図版17	上・下：13号墳石室全景
卷頭2	上：天童山8号墳堅穴式小石室副葬品 下：天童山8号墳横穴式石室出土金製刀器具・耳環	図版18	上・下：13号墳玄室内遺物出土状況
図版1	上：古墳群遠景 下：8号墳調査前風景	図版19	上・下：13号墳玄室内遺物出土状況
図版2	上・下：8号墳丘土層断面	図版20	上：13号墳玄室内遺物出土状況 下：13号墳玄室奥壁鉄織出土状況
図版3	上：8号墳横穴式石室全景 下：8号墳調査後全景	図版21	上・下：土坑墓S X 2全景
図版4	上・下：8号墳玄室内遺物出土状況	図版22	上：弥生土器出土状況 下：SK 3・SZ 4土器出土状況
図版5	上・下：8号墳玄室内遺物出土状況	図版23	上：7号墳想定地 下：丘陵調査後風景
図版6	上・下：8号墳玄室内遺物出土状況	図版24	上・下：工事後の現場状況
図版7	上・下：8号墳玄室内遺物出土状況	図版25	上：金製飾金具 下：耳環
図版8	上・下：8号墳玄室内遺物出土状況	図版26	上：切子玉 下：棗玉・管玉
図版9	上・下：8号墳玄室内遺物出土状況	図版27	鉄鋸・石突・小太刀
図版10	上：8号墳玄室襖床下の土器出土状況 下：8号墳義道部土器出土状況	図版28	ガラス玉・鉄製品（武器）
図版11	上：8号墳盛土内須恵器出土状況 下：8号墳周溝遺物出土状況	図版29	鉄織
図版12	上・下：8号墳盛土内土器出土状況	図版30	鉄織
図版13	上・下：8号墳堅穴式小石室検出状況	図版31	鉄織
図版14	上・下：8号墳堅穴式小石室全景 (天井石除去後)	図版32	鉄織
図版15	上・下：8号墳堅穴式小石室内部遺物出土状況	図版33	上：鉄織 下：両頭金具・鍔
図版16	上・下：8号墳堅穴式小石室遺物出土状況	図版34	上：刀子 下：鉄釘

- 図版37 上：堅穴式小石室出土遺物  
下：鉄鏟
- 図版38 土器・土製品
- 図版39 天童山8号墳周溝・埴丘出土遺物
- 図版40 天童山8号墳周溝・埴丘・7号墳想定地出土遺物
- 図版41 天童山13号墳出土遺物 鉄鏟・土器
- 図版42 天童山13号墳出土遺物
- 図版43 土坑墓S X 2出土土器・土坑S K 3・S Z 4出土土器
- 図版44 上：近代古墳遠景  
下：古墳埴丘残存状況
- 図版45 上：近代古墳調査後全景  
下：後円部全景
- 図版46 上：堅穴式石室出土状況  
下：石室内短甲出土状況
- 図版47 上：石室内短甲出土状況  
下：棺外遺物出土状況
- 図版48 上：周溝木製品出土状況  
下：周溝土層断面図
- 図版49 上：くびれ部土器出土状況  
下：甲冑出土状況（取り上げ後）
- 図版50 上：甲冑出土状況（肩甲除去後）  
下：甲冑出土状況（裏から）
- 図版51 三角板革級衝角付胄
- 図版52 頸甲
- 図版53 上：縦 下：肩甲
- 図版54 三角板新留短甲 前胴・後胴
- 図版55 三角板新留短甲（側面）・覆輪
- 図版56 鉄刀・鉄劍・槍・鉄鋒
- 図版57 須恵器・土師器・円筒埴輪
- 図版58 耳環接面の拡大写真
- 図版59 分析ガラス小玉

# I 前 言

## 1 調査に至る経緯と経過

一般地方道・上野鳥ヶ原線の一部が天童山古墳群および三石代遺跡が所在する上野市上郡地内と下神戸地内を通るかたちで建設されることになった。事業予定地内の内、上郡地内については天童山古墳群および天神遺跡が、下神戸地内については三石代遺跡が周知の埋蔵文化財として登録されていることから、事業開始前に範囲確認調査を実施した。

範囲確認調査の結果、上郡地内については古墳の可能性がある埴丘状の高まりが認められ、下神戸地内については、古代から中世の遺跡が存在することが判明した。そこで、関係機関と協議のうえ、現状保存が困難な部分については、上郡地内は工事立会調査、下神戸地内は本調査を実施するとともに記録保存することとした。

調査は、平成15年5月1日より天童山古墳群から開始したが、埴丘状の高まりの一つから横穴式石室が検出されたことから、改めて関係機関と協議の上、本調査へと移行することとなった。また、周知の天童山古墳群は、14基登録されているが、各々の所在地が不正確なため、上野市教育委員会（現伊賀市教育委員会）の協力を得て、所在地の確認作業を実施した。その結果、今回の事業地内に認められた埴丘状の高まりは、天童山古墳群7号墳と8号墳に該当することが確認された。また、調査の途中で石室が確認された古墳を、新たに天童山13号墳として登録されることとなった。

当初の調査必要面積は、天童山古墳群が680m<sup>2</sup>、三石代遺跡が2,450m<sup>2</sup>である。しかし、天童山古墳群については、現況の地形から未知の古墳が存在する可能性があるとともに、出土遺物から弥生時代後期の遺跡が下層に存在する可能性も考えられることから、確認のトレンチ調査を実施することとなり、調査必要面積は1,000m<sup>2</sup>を超えることとなった。一方、三石代遺跡については、天童山古墳群での思わぬ発見により調査の比重が同古墳群へとシフトしたことから、当初調査予定面積の1／3程度（776m<sup>2</sup>）で15年度は

一旦、調査を終了し、16年度に、残余の部分（1,762m<sup>2</sup>）について、本調査を実施した。

従って、発掘調査報告書については、天童山古墳群と三石代遺跡とは別個に報告を行うことになったため、三石代遺跡については、『三石代遺跡発掘調査報告』を参照されたい。

最終的な調査面積は、天童山古墳群が1,389m<sup>2</sup>、三石代遺跡が15年度776m<sup>2</sup>、16年度は1762m<sup>2</sup>で合計2538m<sup>2</sup>（下層313m<sup>2</sup>含む）となった。  
(船越)

## 2 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

- ・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成15年5月28日付け賀研第192号 教委12-204号

平成15年7月7日

- ・法第58条の2 第1項（県教育長宛）

平成15年5月13日教理第81号

- ・遺失物法による文化財発見・届出通知  
(警察署長宛)

平成16年2月3日付教委第12-9-6号

(県教育長通知)

## 3 調査の記録と方法について

### a 調査委託について

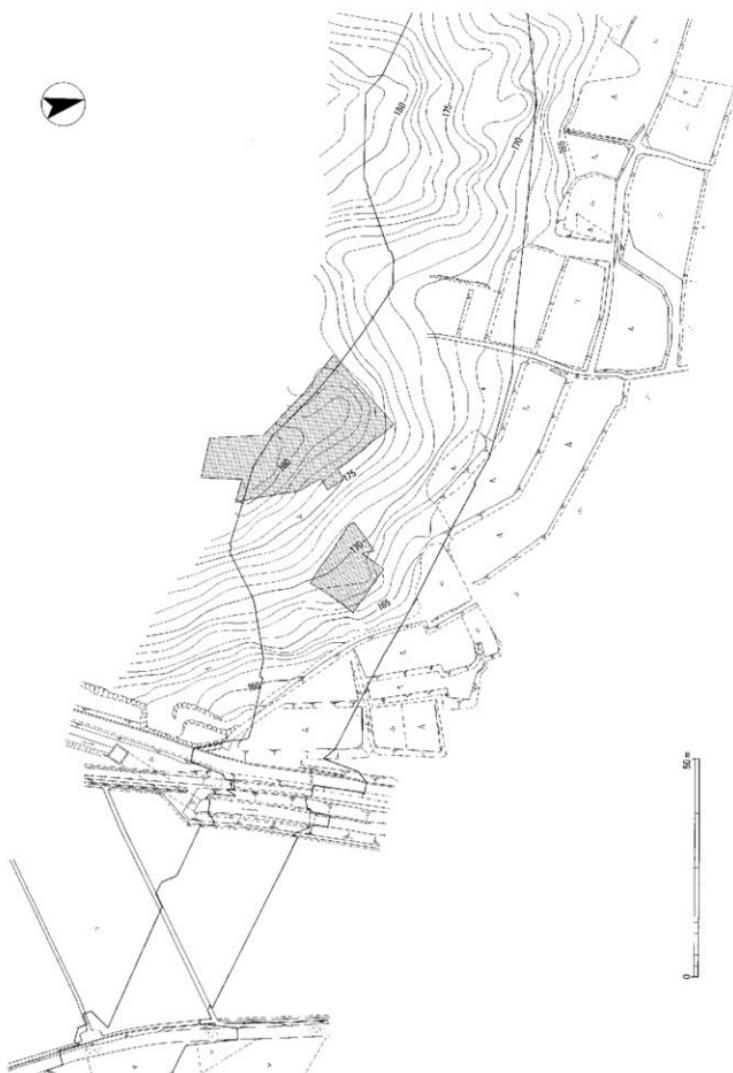
今回の発掘調査にあたっては、当初の立会い調査段階までは当センターが行ったが、古墳であることが判明したため、調査途中より急速、丘陵下の三石代遺跡の調査を委託していた安西工業株式会社に調査を委託し実施した。

### b 掘削の方法について

掘削は表土・無遺物層については重機によって掘削し、遺構・埴丘を人力で掘削した。また、調査の最後に行った丘陵斜面の掘削についても重機掘削による。

### c 遺構図面について

遺構の平面・土層断面の実測図については1／10・



第1図 調査区位置図 (1:1,000)

1／20で手書きによる実測を行っている。また、調査前の古墳の埴丘測量は、1／100縮尺で平板測量を行い、8号墳の堅穴式小石室（第2石室）と13号墳の横穴式石室の平面・立面図はテクノシステムによる3次元測量によって作成し、作成調査後の埴丘測量についても同社が作成した。8号墳の横穴式石室の実測については、基準に沿った任意のディテール実測用基準ポイントを設定し、手書きで作成している。そして、調査後の埴丘測量の際に、各遺構の基準ポイントも測定しており、図上での合成が図れるようにした。

#### 4 整理作業とその方法

##### a 遺物類の整理

鉄製品・装身具・金銅製品に関しては、発掘調査現場から当センターへ出土遺物を搬送し、洗浄・注記・接合作業を実施した。土器類は現場事務所にて洗浄・注記・接合作業を実施した。

発掘調査を実施した平成15年度中に、発掘調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業を行い、未掲載遺物については、袋詰にし、整理箱に収納したあとに、専用収蔵庫へと収納した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつ専用のラベルを付加し、収蔵後の混亂を避けている。

##### b 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、平成16・17年度に報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物は報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものは記録保存の一環で保存しているが、報告書用に作成した版下類やトレース図版については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×9版（ブローニ）・4×5で撮影した。遺物写真的撮影は報告書掲載資料すべてではなく、掲載資料のうちの主だったものとした。

実測図の作成は平成15年に、遺物写真撮影と図版作成、および遺物の収蔵については平成17年度に実施した。

##### c 金属製品の整理

金属製品については、検出時に極力泥土を刷毛等で除去し、記録後取り上げを行った。実測・写真記録のうち保存処理を行い脱塩・樹脂合浸による強化を図ったものを空調可能な収蔵庫において収蔵保管している。

##### d 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで所蔵している。

## II 位置と歴史的環境

### 1 地理的環境

伊賀地域は周囲を山に囲まれた盆地に位置する。この盆地には木津川・服部川・柘植川が流れ、そのうちの木津川は上野盆地の南部を南北に縱断し、最後は淀川に合流する。この水系は旧の伊賀郡域にあたる。天童山古墳群<sup>(1)</sup>の所在する伊賀市上郡は、この木津川が比土・古郡・上神戸の小盆地を流れ、上野盆地の南端に流れ出た西岸の丘陵上に位置している。

### 2 歴史的環境

#### 縄文時代

盆地中央部には縄文時代から生活の痕跡がみられ、猪田に所在する田中遺跡<sup>(3)</sup>では、調査こそ行われていないものの前期に遡る土器・石器などが多く確認され、晩期になると田中遺跡の対岸には森脇遺跡<sup>(4)</sup>が展開する。しかしながらこれ以降、弥生後期に至るまでの遺跡の展開については調査例が少なく不明な点が多い。

#### 弥生時代

弥生後期になると、木津川上流域をはじめとして多くの遺跡が形成されるようになる。三石代遺跡の木津川を挟んだ対岸には、才良遺跡<sup>(8)</sup>が所在し、中学校の改築などに伴う調査で溝から弥生土器が大量に出土<sup>(3)</sup>している。土器は近畿の影響を強く受けているものの、受け口状を呈する近江系とみられるものが出土しており、交流の一端をうかがわせる。

#### 古墳時代

古墳時代前期には、上郡から小丘陵を東にぬけた比自岐小盆地の北側丘陵に、全長120mの前方後円墳である石山古墳<sup>(6)</sup>が築造される<sup>(11)</sup>。後円部の頂上には埴輪列が方形に並べられ、3体の主体部からは、碧玉製胸飾類や石製模造品をはじめとした大量の副葬品が出土している。豊富な副葬品と舗付円筒埴輪の存在は畿内勢力との関連を想起させる。石山古墳の築造後も周辺の丘陵には帆立貝形古墳や小型墳が築造され、首長系譜が継続しているとみられるものの、

古墳時代を通じ連続と首長墳クラスの古墳が築造される美旅古墳群<sup>(7)</sup>と比べるとその勢力は前期以降、衰退するようである。

古墳時代中期の状況については比土の城之越<sup>(6)</sup>、阿保では沢代遺跡<sup>(9)</sup>・桜ヶ森遺跡<sup>(10)</sup>といった祭祀に関連するとみられる貼り石遺構が確認されている。城之越・沢代遺跡では四面庇をもつ大型の掘立柱建物があり首長居館が想定されている。

また、中期末頃には天童山の所在する丘陵の北西側の丘陵裾には谷古墳群<sup>(6)</sup>が展開し、6基の古墳が確認されている。その中の1号墳は、木棺直葬墳で、刀剣・鐵鏃が出土し、後に展開する天童山古墳群の被葬者の系譜につながるかは不明であるが、留意すべき古墳である。

後期に入ると比自岐盆地の平野部には前方後円墳である王塚古墳<sup>(9)</sup>が築造される。全長は45mで、石山古墳の首長系譜を引く人物の墳墓と考えられる。

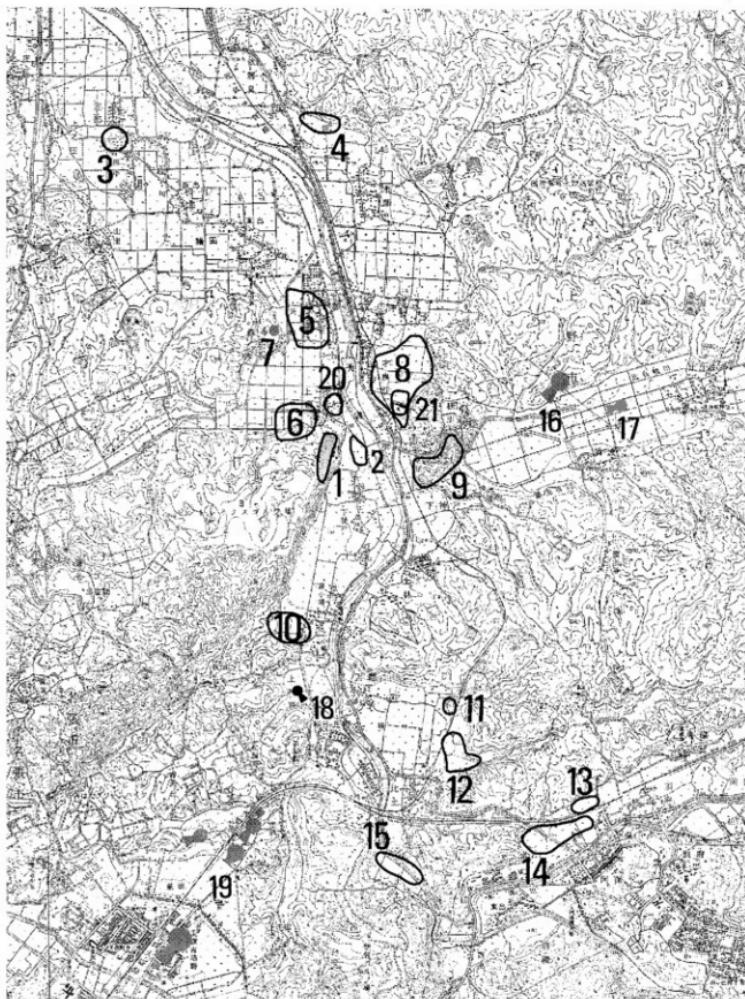
しかしながら、伊賀南部や北部では群集墳が盛んに築造される一方でその中間地帯に位置する当地域では、天童山古墳群・猪田神社古墳群<sup>(7)</sup>が存在する程度で比較的古墳の築造は低調である。

#### 古代

古代の段階のこの地域を考えるうえで欠かせない事項が壬申の乱である。日本書紀によれば、大海人皇子が東進の際に伊賀の駅家を焚いたとの記述があり、その所在については、古郡周辺や下郡といった地域が想定されている。下郡遺跡では延暦銘の木簡が出土しているものの、今のところ地名以外に直接的に郡衙の存在を窺わせる資料はない。しかし、木津川を挟んで右岸には白鳳寺院とされる財良寺跡<sup>(8)</sup>があり、「東大寺要録」に天武天皇御願で建立された寺院で、川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦も採集されている。このことは、この地に有力な在地勢力が存在していたことを窺わせるもので、この勢力については、壬申の乱の際に大海人皇子に協力した勢力である可能性が指摘されている。

#### 中世

中世には、伊賀南部は「黒田の悪党」で著名な黒



第2図 天童山古墳群周辺の遺跡

田莊といった東大寺領莊園が展開した。また、集落跡としては三石代遺跡<sup>(10)</sup>・財良遺跡・高賀遺跡跡<sup>(11)</sup>・浮田遺跡などが確認されている。また、長田川沿いには市場に関する地名が存在し、この周辺では「市部」がそれにあたるとされる。才良にも、小字で市場地名があり、伝承や資料は何も残っていないが、河岸に近い場所であり、近隣にも小字名で沖の市場がある。今後の解明がまたれる。

戦国時代の伊賀は南北朝の動乱を得て台頭してきた「土豪」「国人」と呼ばれた勢力が領主として村落を掌握していたと考えられており、集落の内外に多くの中世城館が確認され、この地域でも、下郡で下代館跡・加納氏館跡<sup>(12)</sup>の堀跡が確認されている。天正6年に対岸の丘陵上には、南伊勢を支配していた北畠氏を攻略し、北畠氏の家臣を継いだ織田信長の次男、北畠信雄により丸山城<sup>(13)</sup>が築城された。中世の伊賀における織豊系城館の最大級の山城で、2度にわたる天正伊賀の亂の際拠点となった。この織田軍の侵攻により伊賀惣一揆の終焉を迎えた。

伊賀地域については、昭和50年代を中心に、圃場整備に伴う調査が行われてきたが、近年大規模な調査は少なく、美旗古墳群や御墓山古墳といった大型の前方後円墳や伊賀国分寺など重要遺跡が多数存在するものの、発掘による調査は行われておらず、大和の隣国という位置にありながらその歴史像については依然不明な点が多い。今後の調査により具体的な歴史が解明されることが期待される。（豊田）

#### 【参考文献】

- (1) 伊賀市『上野市史 考古編』伊賀市（2005年）
- (2) 森川常厚『研究紀要－森脇遺跡－』第12号（三重県埋蔵文化財センター2002年）
- (3) 西森平之『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 1983年
- (4) 京都大学文学部博物館『紫金山古墳と石山古墳』（1993年）
- (5) 齋月正明（編）『石山古墳』第2回埋蔵文化財展示図録（三重県埋蔵文化財センター・京都大学総合博物館2005年）
- (6) 稲積裕昌ほか『城之越遺跡』（三重県埋蔵文化財センター1992年）
- (7) 鈴安『七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群・桜ヶ森遺跡調査報告』（青山町教育委員会・青山町遺跡調査会 1995年）  
境宏・福田典明『沢代遺跡（2次）発掘調査報告』（伊賀市教育委員会 2006年）
- (8) 野原弘司「谷遺跡」『上野市上郡・下郡・下郡南・森寺 地域安全対策農業基盤整備 下郡第二地区関係遺跡発掘調査報告(2)』1986年
- (9) 山田猛「上野市岡波 王塚古墳」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1979年
- (10) 山田邦「伊賀」『新修国分寺の研究 第二巻 磐内と東海道』吉川弘文館1991年
- (11) 西村美幸『三石代遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2006年）
- (12) 竹内美明・稲積裕昌「上野市上神戸 浮田・高賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年
- (13) 舟田守『上野市下郡遺跡発掘調査報告－第7次調査－』（三重県教育委員会 1986年）
- (14) 福永正三「市場の分布」『秘蔵の国 伊賀路の歴史地理』個人書房 1972年

### III 天童山古墳群の概要

#### 1 天童山古墳群について

天童山古墳群については、これまで、昭和30年代に郷土史研究者であった森川桜男氏により分布調査がなされ、これまで14基が登録されていたが、以後の植林などによって変更を受けており、各々の所在地が不正確であった。このため、先述したように、地元上野市（現伊賀市）の教育委員会の協力を得て、所在地の確認作業を実施した。その結果が表1である。現状で確認できるのは13基で、1～3号墳は墳丘が残存するものの、他は削平されるなどして、わずかに高まりが残るものが多く残存状況は良くない。

古墳群は大きく分けて丘陵の尾根状に存在する南支群と、丘陵の斜面部に位置する北支群に分けられる。北支群の6号墳から7号墳想定地の辺りには、石室に使用されたとみられる石材が落ちている箇所もあり、周辺に未確認の古墳がまだ存在している可能性もある。

古墳の築造時期は、いずれも横穴式石室を埋葬施設にもつとみられ、古墳時代後期の群集墳であろう。

#### 2 各古墳の概要

ここでは、各古墳の現状を簡単に触れる。

1号墳は寺の南西に位置する長径25m、高さ4mの円墳である。石取りのため発掘されたとされるが、出土遺物等は不明である。墳丘には大きな盗掘坑があるが、墳丘の頂部から墳丘南側にかけて削平されていることから、埋葬施設は横穴式石室であったことがよくわかる。

2号墳は、寺の西側の丘陵尾根上に位置する。長径20m、高さ2.5mの円墳である。

3号墳は、2号墳の北隣に位置し、長径18m、高さ3.5mの円墳である。1号墳同様、削平されている。

4号墳は南寄りの一群の北端に位置する古墳である。墳丘は削平されており、わずかな高まりが残るのみで、墳丘跡の平坦面に石碑が建てられている。

5号墳は、北側の一群で、北尾根の最高所付近に位置する。墳丘はあまり明確でなく、わずかな高ま

りが残るのみである。

6号墳は、昭和36年の踏査では確認されているものの、詳細な位置は不明で、5号墳の北にみられる高まりをそれとした。

北斜面の尾根上の8号墳の南隣には、7号墳とされていた高まりがあり、当初は古墳と認識されていたが、平成15年の調査の結果、盛土は確認できず、墓壙と考えられた土坑からは、刀子片とわずかな古式土師器片が出土したのみである。周辺には須恵器片や馬具片も出土していたため、古墳ではなく、後に掘削された土坑に混入したものと判断した。

8号墳は北斜面の尾根上に位置する。平成15年の調査の結果、埋葬施設として横穴式石室と竪穴式の小石室を確認した。築造時期は、6世紀後半と考えられる。

10号墳は、寿福寺の南側に舌状に出た尾根上に位置する。墳頂部は削平されており、墳丘内には石仏が建てられている。最初の踏査時には、径15mの円墳と報告されている。

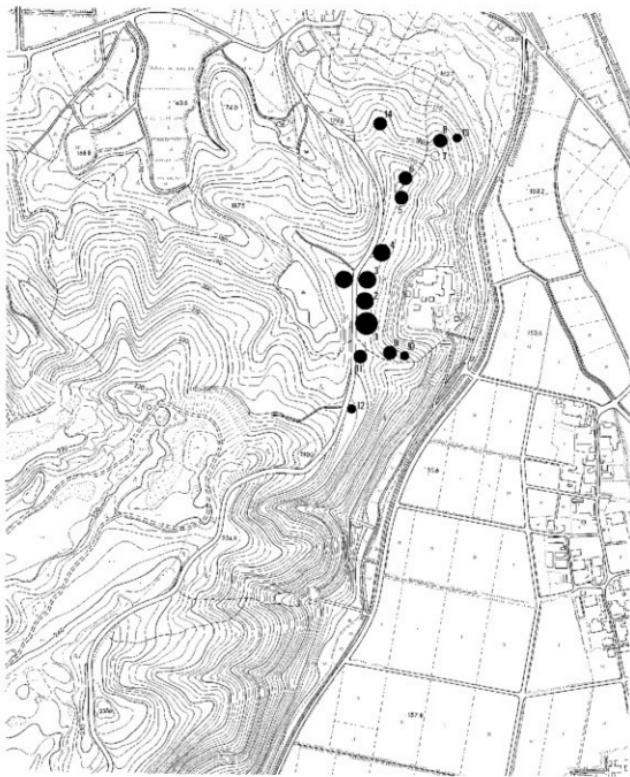
11号墳は、1号墳の南側に位置する。墳形は判然としないが、わずかな高まりがみられる。

12号墳は、古墳群の南端に位置し、円墳であったとされる。昭和26年に横穴式石室が確認されたが消滅した。

13号墳は、8号墳の存在する尾根上に位置する径約13mの円墳で、平成15年の調査により、横穴式石室が確認された。築造時期は6世紀中葉頃。

14号墳は、北側にのびる尾根上に位置する。

15号墳は3号墳の道を挟んで西隣に位置する。径16m、高さ2mの円墳である。



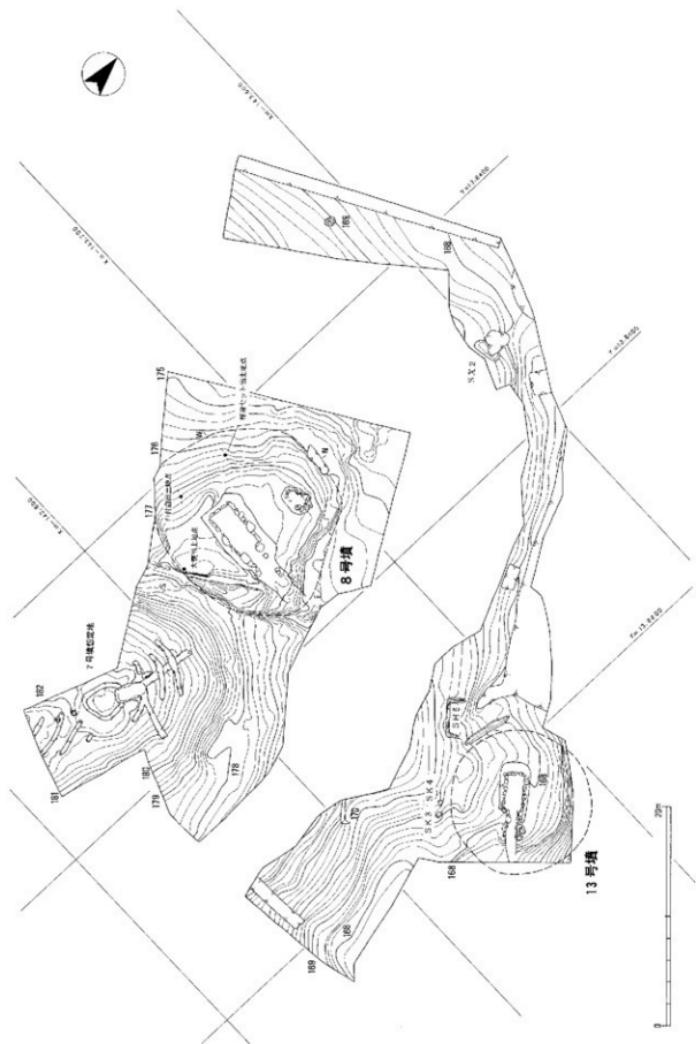
第3図 天童山古墳分布図 (1:5,000)

古墳名	墳形	面積 (m)	備考
1号墳	円	25	石取りの痕跡あり 碓穴式石室であったか
2号墳	円	20	詳細不明
3号墳	円	18	石取り?の痕跡あり 碓穴式石室であったか
4号墳	—	—	埴生層平野わずかに高まりが残る
5号墳	—	—	埴生層平野わずかに高まりが残る
6号墳	—	—	わずかに高まりが残る
7号墳	—	—	調査により古墳ではないことが判明
8号墳	円か	—	穂穴式石室と壁穴式小石室が併存
9号墳	—	—	矢器
10号墳	円	15	埴生層平野わずかに高まりが残る
11号墳	—	—	わずかに高まりが残る
12号墳	円	—	昭和26年に壁穴式石室が確認されたが消滅
13号墳	円	13	穂穴式石室
14号墳	—	—	詳細不明
15号墳	円	16	詳細不明

第1表 天童山古墳群一覧表



第4図 古墳群調査前測量図 (1:400)



第5図 古墳群調査後測量図 (1:400)

## IV 遺構と遺物

### 1 天童山8号墳

天童山8号墳は、丘陵北側の尾根上に位置する。調査前より8号墳周辺には、石室に使用されたと考えられるような石が横たわっていたが、石室が開口しておらず、試掘で石室や遺物が確認できなかつたこともあり、古墳と断定するには至つていなかつた。しかし、古墳の可能性が捨てきれないため、立会い調査としてトレーニングを設定し、断ち割りを行つた。その結果、石室の側壁と考えられる石列を確認したため、検出を進めたところ、天井石と側壁の上部は欠損していたが、方形に巡ることが判明し、横穴式石室のプランを確認した。

#### 墳丘（第6～7図）

墳丘の東半分は黒色土の上に黄色の砂土を幾重にも盛つていて、尾根上にあたる墳丘南側についてはさほど盛土は厚くないが、地山が落ち込んでいる西側については分厚く盛土がなされている。西側については、一時的に盛土をしたのち、再度褐色系の土を盛りなおしていることが断面で確認出来た。墳丘の南西部では、盛土の途中で須恵器の台付壺が2つ、その傍らに破砕された状態で土師器壺が出土している。

また、トレーニング調査の結果、墳丘の南側と北側にそれぞれ石室が存在することが判明したが、北側の堅穴式の小石室（第2石室）については墳丘の構築前に造られたことが土層より確認出来た。しかも、黒色土下からは弥生後期の土器片が出土し、下層遺構の存在が想定されたため最終的に盛土を除去することになった。

横穴式石室の掘り方は幅約4mで、ある程度、墳丘の盛土を施した段階で、地山を掘りこんでおり、そのうえで石材を積み上げていったと考えられる。

墳丘の形状については、慎重に調査を進めたが、墳丘の裾が確認出来たのは、南と西側のみであつたため判然としない。調査当初は、南側の周溝が直線状に伸びている点から、方墳の可能性も考えられたが、溝とコンタの方向が直交しない点、墳丘の裾部

が流出した可能性がある東側ではなく、墳丘が残つていてる西側に関しても全く墳丘の隅が角にならない点から、方墳である可能性は低い。<sup>(1)</sup> 従って、積極的な根拠にはやや乏しいが、墳形については、一辺約18m前後のやや不整形な円墳と考える方が自然であろう。

#### 墳丘構築過程儀礼痕（第25図）

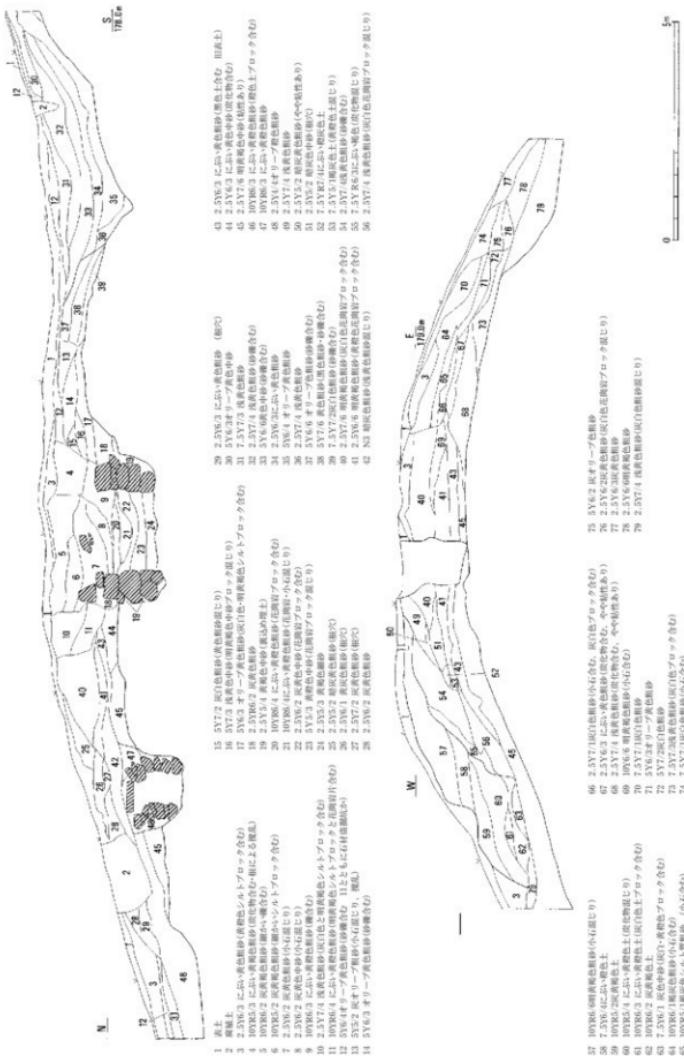
墳丘のところで先述したように、墳丘南西の調査区端で、土層確認のためのトレーニングを入れたところ須恵器の台付壺（410・411）2個体が墳丘に置かれた状態で出土した。また、脇には土師器壺の破片がまとめて出土したが、接合の結果、1個のほぼ完形の壺に復元できた。従って、この壺は破碎されたものと考えられ、台付壺に關しても、410は脚部を欠き、411は口縁部を欠いていることから、いずれの個体も儀礼に使用され、破碎されたものとみて良いだろう。<sup>(2)</sup> 墳丘構築時の儀礼の痕跡が良好な確認例となつた。

また、墳丘西側トレーニングでも、盛土内から杯身が重なって2セッテ置かれているのが確認されている。これも構築過程の儀礼の痕跡と考えられる。

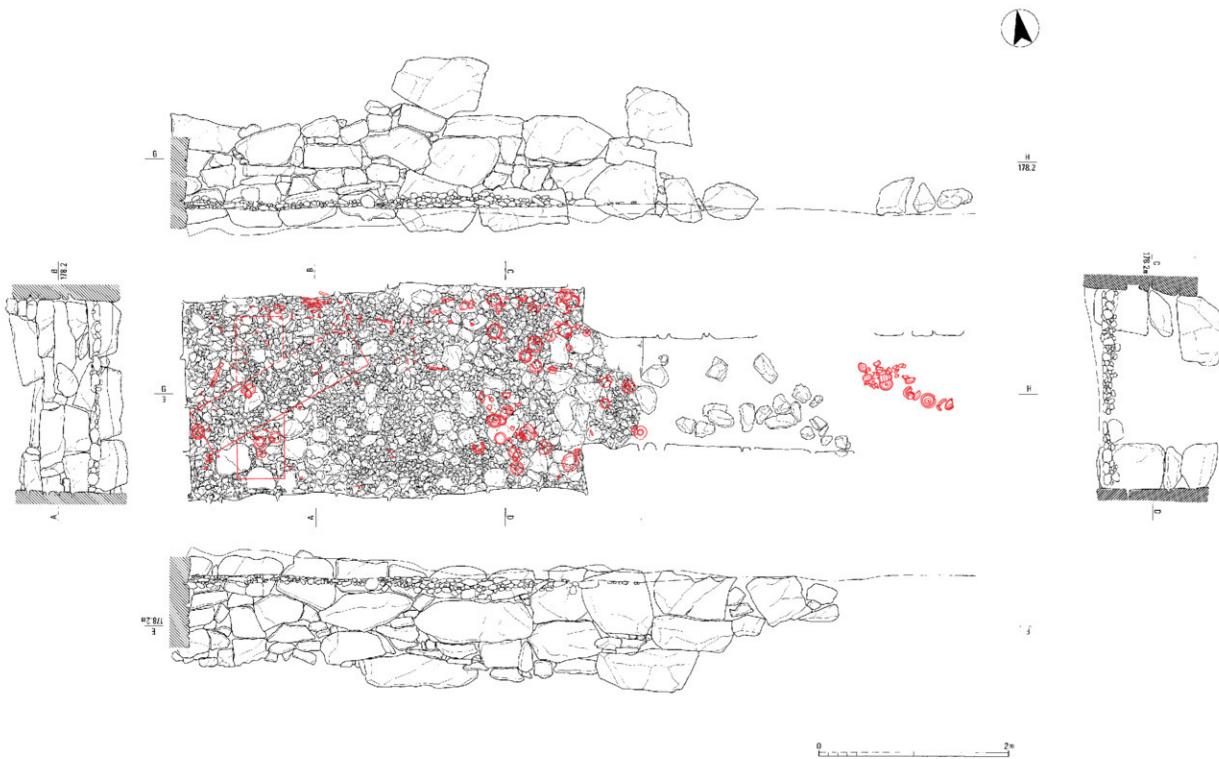
なお、墳丘で、炭化物がまとめて出土したり、何かを焚いたような痕跡は確認できなかつた。

#### 周溝

墳丘の南では地山を掘りこんだ溝を確認した。溝は東西方向に直線的に伸び、墳丘を回らず、尾根を切断するかたちで掘削されており、周溝と呼ぶには相応しくないかもしれないが、古墳に伴う溝と捉えられる。溝の東側は、ややカーブを描くが、雨水の浸食によるものとみられる。溝の底付近からは、須恵器の大壺（421）をはじめ、蓋杯・杯身・ミニチュアの堤瓶（420）などが出土している。大壺は、直立した状態で出土（図11）しており、口縁部は破損して内部に落ち込んでいたがほぼ完形に復元出来た。また、原位置は保つていなかつたが、須恵器の杯身や蓋杯も何個体か出土しており、墳丘で行なわれた儀礼に供獻されたものと考えてよいだろう。

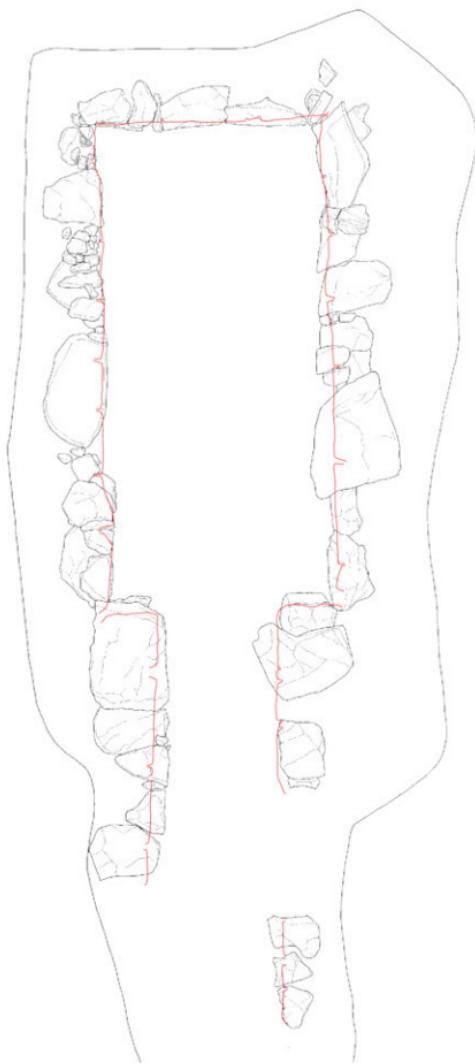


第6図 8号填埋丘土断面図 (1 : 100)



第7図 8号填横穴式石室平面・立面図 (1:40)





第7図 8号墳横穴式石室（平面図・石室プラン）(1:20)

## a 横穴式石室（第1石室）（第7～10図）

墳丘の南側に構築された横穴式石室で、N85°Wの方向である。天井石をはじめ、石室の上部および羨道の一部については後世の石取りによって無くなっていたが、石室のプランを検出中、石取りによって落下した天井石とみられる大きな石材を確認した。それらを除去しながら検出を進めたところ、玄室の壁面の下半部と、羨道の側壁と基底石の一部については残存していることが判明した。

石室は残存長8.3m、玄室幅2.0m、長さ4.4m、羨道の残存長3.9m、羨道幅約1.5mの両袖の横穴式石室である。羨道部は基底石がわずかに残るのみで、全貌は不明であるが、本来はもう少し長かった可能性もある。構築の際には花崗岩の石を順次積み上げているが目地はあまり通っていない。

玄室内は堆積した土砂を取り除いていくと、須恵器の器台の破片などが含まれていたため、当初、玄室内はかなり搅乱を受けているものと予想された。また、埋土の黒色土器壺(370・371)がほぼ完形で出土しており、石室の再利用が行われたものと考えられる。

黄褐色の砂層を掘削していくと、床に敷かれた礫群とともに、鉄鏃をはじめとする鉄製品・耳環・玉類・多くの土器が出土した。

### 玄室

玄室から玄門部にかけての床面には、全面に川原石を敷き詰めていた。断ち割りの結果、地山を掘りこんで掘り方を掘削したのち、平面の凹凸をブロック混じりの砂質土をいれて平らに整えている。その際に左袖部には土師器の小壺(357)が埋納されており、石室構築の際に祭祀が行われた痕跡とみられ興味深い。礫床は、小ぶりな川原石を用いて初葬の段階で全面に敷き詰められており、さらにその上に棺台とみられる大きな角礫がある。これらは追葬時に移動していると考えられるものもある。場所によって明確に使用石材が異なる箇所は特にみられなかつた。

玄門から奥壁よりには角礫を用いた粗石が3個づつ2列に並べられている。また、羨道部にも石列が一列みられる。これらは、礫床を敷いた後に置かれ

ている。なお、玄室が羨道部よりも一段低くなることはなく、レベルは同一である。

### 石室の石材

なお、石室に使用された石材の種類・産地を探るために、奥田尚氏に鑑定をしていただいた。以下、石材の知見については調査指導頂いた奥田氏の所見に基づく。

石種は、片麻状黒雲母花崗岩で、石材は角が鋭く残る方形の石で、丘陵周辺でも採取できることから古墳の近隣で、露出している石の方状節理を利用して剥がして採取されたものとみられる。

堅穴式小石室についても、片麻状黒雲母花崗岩が使用されており、横穴式石室と同様の石材が使用されたとみられる。

### 遺物出土状況（図9）

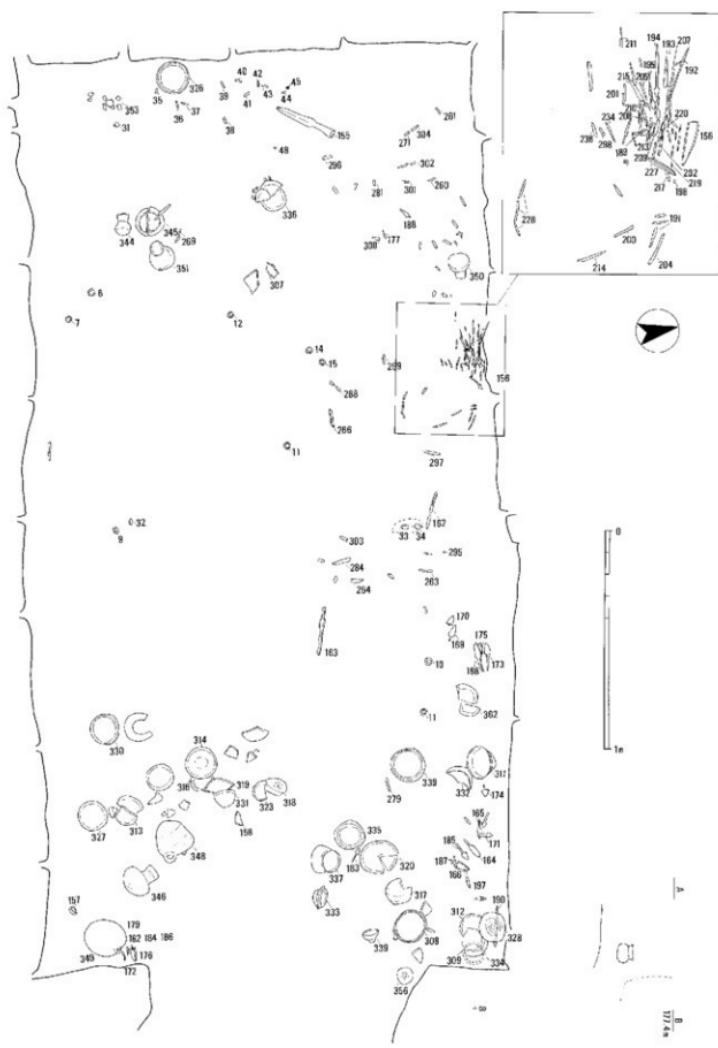
玄室内は度重なる追葬と後世の石取りの際に搅乱を受けているものとみられるため、確實に現位置を保っていると考えられる遺物は少ないが、多くの遺物が残存していた。

奥壁付近では須恵器の杯身(326)の傍らに、管玉(35~44)やガラス玉、琥珀の垂玉などの玉類が出土したほか、鉄鉢(155)が完形で出土している。また、鉄鉢のすぐ南隣には、横転している杯身(336)があり、その傍らには水晶の切子玉が10個(16~30)杯身からこぼれた状態で出土し、杯身の中にも5個残存しており、副葬時には切子玉をこの杯身の中に収められていたとみられる。

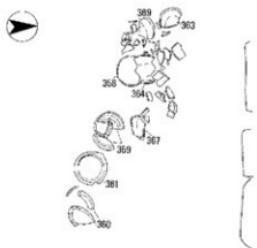
奥壁の左壁寄りには長頸罐を中心とした鉄鏃の破片（第9図拡大部分）が散乱していた。完形のものは少なく、茎のみしか残存しないものもあるため搅乱を受けていると考えられるが、壁面付近では石突(156)も出土している。

左壁の中央部付近にも鉄鏃・鉄釘などの鉄製品が多くみられ、ほぼ中央部からは、琥珀製の垂玉(33・34)やガラス玉（破線箇所）がまとまって出土している。また、周辺からは広根系の鉄鏃(168・173・175)がほぼ完形で出土している。

また、玄室内からは耳環が全部で10個確認されている。これらの耳環は、セット関係にあると考えられるものでさえ出土地点が異なるため、原位置を保っているとは考えにくい。



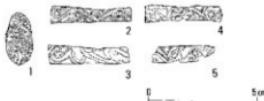
第9図 8号墳横穴式石室玄室内遺物出土状況図 (1:20)



第10図 義道部土器出土状況図 (1:20)

須恵器は玄門付近に集中しており、追雍の際に何度か片付けがなされたとみられる。器種は、杯身・蓋杯をはじめ、長頸壺、提瓶、短頸壺、把手付壺など多様である。

先述したように、玄室内については追雍の際の片づけや、後世の搅乱などにより遺物が原位置を保っているものはまれであった。特に、須恵器や長頸壺は、一箇所に散乱した状態で出土しており、供献されて並べられたような痕跡は確認できなかった。従つて、遺物の出土位置から棺配置の判別は困難であり、基本的には櫛床と棺台との関係で検討するほかない。ここでは可能性が高い棺位置のみ図示したに過ぎず、実際はそれに加えて、もう数体埋葬されている可能性が高い。棺の配置については、奥壁寄りに石室に対して平行で、やや南寄りの方向に2次的に一部櫛を敷き足している箇所があり、ここに1体埋葬されたとみられる。杯身に入っている切子玉はこれに伴うものであろう。また、この棺が置かれる前の段階に、奥壁寄りに主軸に直行する方向で1体埋葬されていることが平坦な面をもつ棺台とみられる石の配置から想定される。この他にも、右側壁寄りに主軸に平行する位置、玄門部付近に主軸に直行する位置で想定されるが、明確な確証は得られなかつた。不確定なものを含めると、少なくとも4体は埋葬されていたものと考える。<sup>(6)</sup>



第11図 金製刀装具実測図 (1:2)

## b 出土遺物

### 石室内出土遺物 (第11図～第20図)

#### 金製刀装具 (1～5)

1～5は薄い金箔片である。1は楕円形で、長径2.45cm、短径1.25cmである。左右対称に唐草文様が彫り込まれている。2～5は長方形で、唐草文が彫り込まれている。これらの金箔片は、刀子・小太刀の柄頭などの装飾に使用されていたものと考えられ、副葬品の中に金銅製の小太刀が存在したこと裏付けるものである。163の小太刀の下から出土しており、これに伴う可能性がある。こういった薄い金箔片の類例としては大阪府南河内郡の寛弘寺75号墳出土のものが挙げられる。<sup>(7)</sup>

#### 耳環 (6～15)

5対10点が出土している。すべて銀環である。6～13は銅芯に銀を巻きつけたものである。12・13は断面が六角形を呈し、銅芯に銀を巻き、さらに鍍金が施してある。なお、耳環については元興寺文化財研究所に分析を依頼しており、同研究所の山岡氏の報告に詳しい。

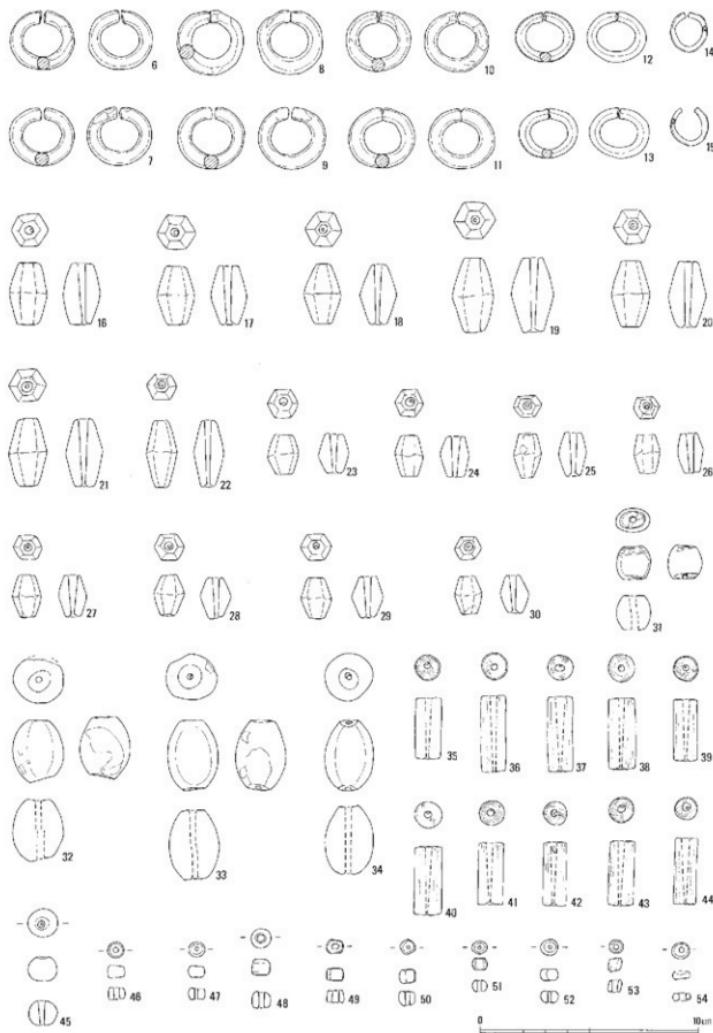
#### 玉類

##### 切子玉 (16～30)

15点出土している。すべて水晶製で、ともに断面は六角形で、2.8～3.0cmのやや大型のものと1.7～2.0cmの小型のものがある。17・21・28には、穿孔部分に赤色顔料が若干付着している。切子玉の表面はいずれもかなり磨耗していて、実際に使用されていたものと考えられる。

##### 糸玉 (31～34)

4点出土している。琥珀製で、31は長さ1.5cmでやや小型である。32～34は長さ2.8～3.2cmほどある。穿孔は両面穿孔である。琥珀についても元興寺文化財研究所の植田氏に分析していただいた。分析報告を



第12図 8号墳横穴式石室出土遺物 耳環・玉類 (1:2)

- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -
□ 55	□ 56	□ 57	□ 58	□ 59	□ 60	□ 61	□ 62	□ 63	□ 64
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -
□ 65	□ 66	□ 67	□ 68	□ 69	□ 70	□ 71	□ 72	□ 73	□ 74
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ 75	□ 76	□ 77	□ 78	□ 79	□ 80	□ 81	□ 82	□ 83	□ 84
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ 85	□ 86	□ 87	□ 88	□ 89	□ 90	□ 91	□ 92	□ 93	□ 94
◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -
□ 95	□ 96	□ 97	□ 98	□ 99	□ 100	□ 101	□ 102	□ 103	□ 104
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ 105	□ 106	□ 107	□ 108	□ 109	□ 110	□ 111	□ 112	□ 113	□ 114
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -	◎
□ 115	□ 116	□ 117	□ 118	□ 119	□ 120	□ 121	□ 122	□ 123	□ 124
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ 125	□ 126	□ 127	□ 128	□ 129	□ 130	□ 131	□ 132	□ 133	□ 134
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎ -
□ 135	□ 136	□ 137	□ 138	□ 139	□ 140	□ 141	□ 142	□ 143	□ 144
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎ -
□ 145	□ 146	□ 147	□ 148	□ 149	□ 150	□ 151	□ 152	□ 153	□ 154

0 1 2 3 4 5cm

第13図 8号墳横穴式石室出土遺物 玉類② (1:2)

参照されたい。

#### 管玉 (35~44)

10点出土している。材質は碧玉製で、濃い緑色を呈する。径は1.2cmで、長さは2.8~3.4cmで、円筒形を呈する。両端の表面にはそれぞれ研磨痕が確認でき、穿孔はすべて片側穿孔である。

#### 丸玉 (45)

1点出土している。45は瑪瑙製で、径0.6cm、厚さ1.1cmのものである。色調は淡黄褐色である。

#### 小玉 (46~154)

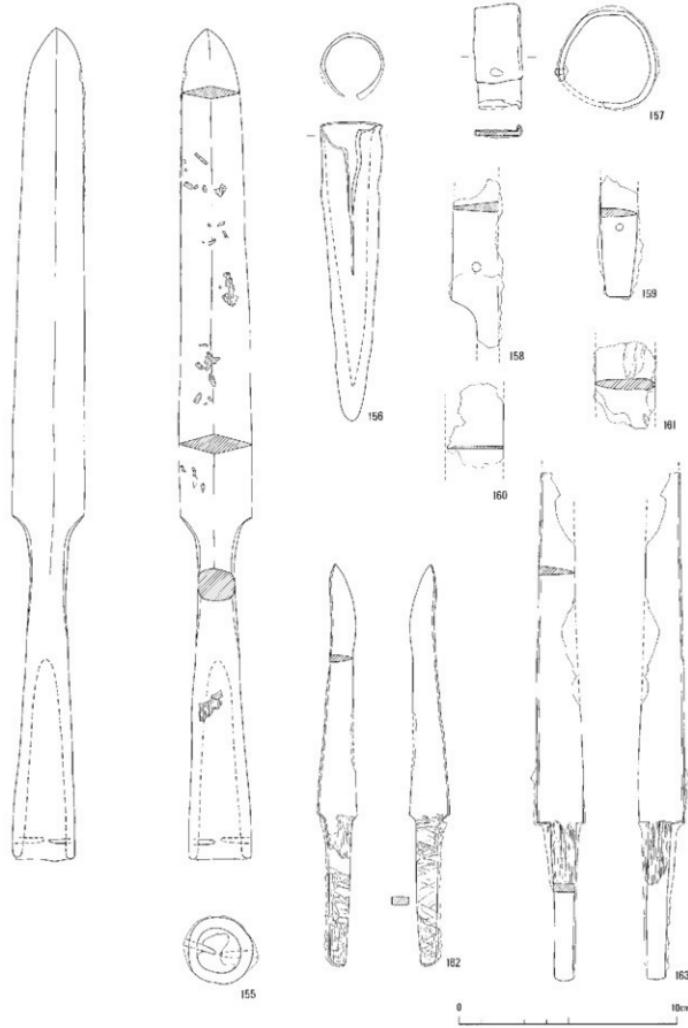
109点出土している。すべてガラス製である。45~

54はやや大きなもので、0.8cm前後のものである。色調は濃紺である。小形のものは水色・青色・緑色のほかに黄色・赤色なども若干含まれ多様である。なお、ガラス玉の詳細に關しては、大川氏の分析報告に詳しいのでそちらを参照されたい。

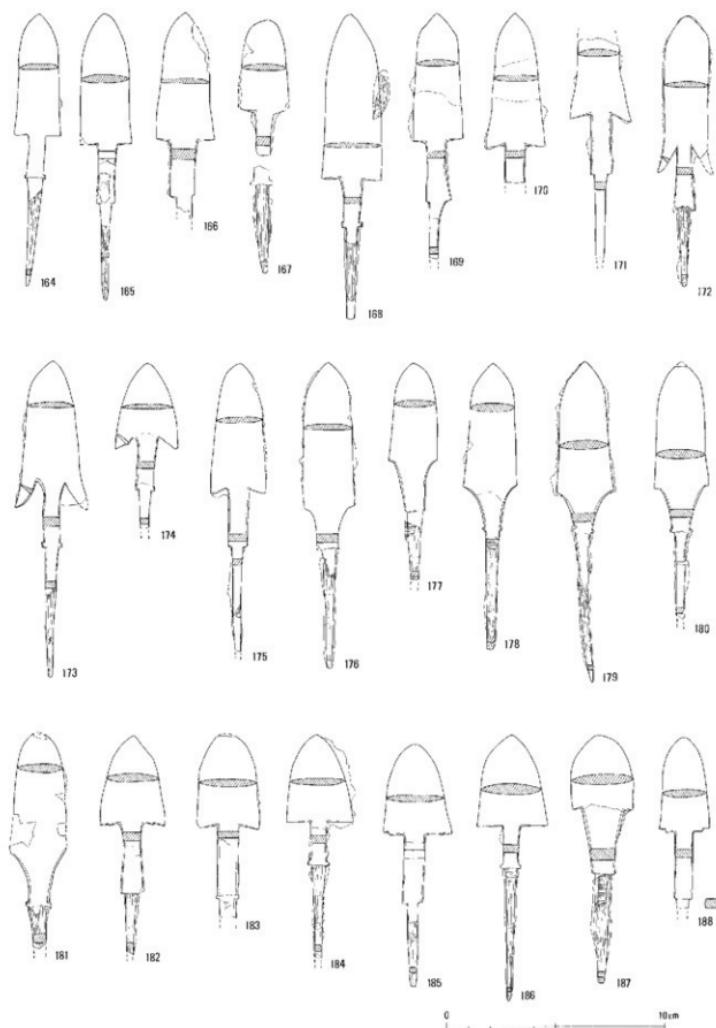
#### 鉄製品 武器

#### 鉄錐 (155)

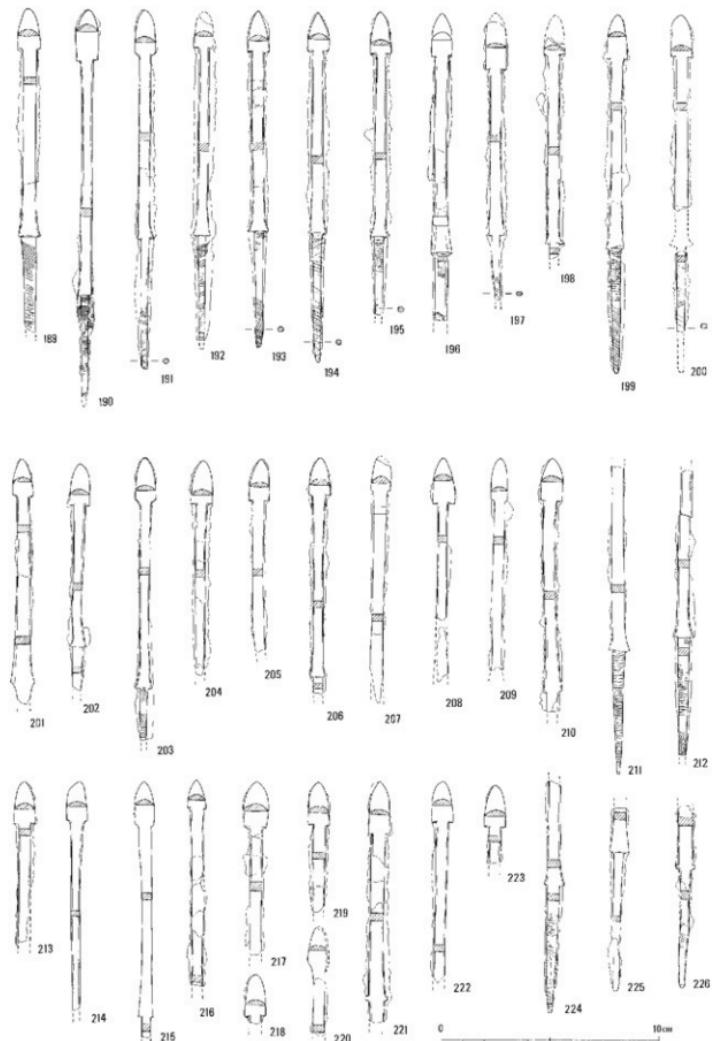
155の1点のみの出土である。袋部の挿入口の一部が欠損しているほかは良好に遺存していた。全長38.4cm、刃部の断面は菱形で木質が若干遺存しており、圓部も比較的明瞭である。袋部の断面は円形を呈し、目



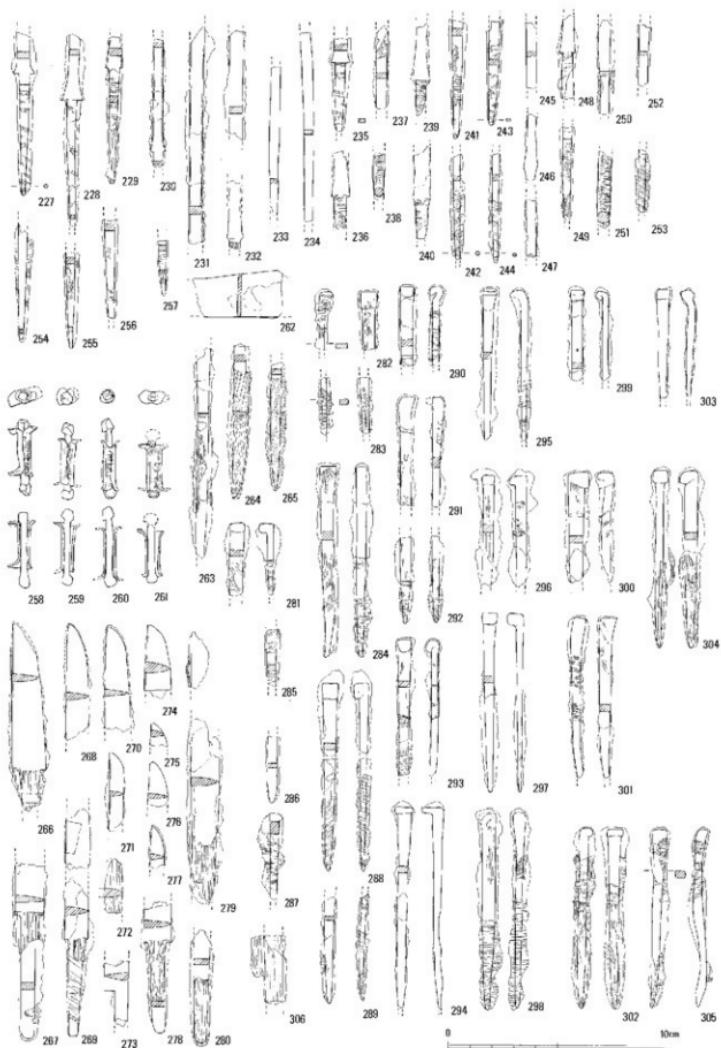
第14図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器(1) (1:2)



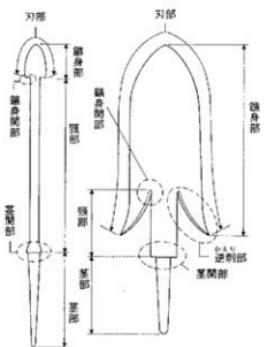
第15図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器[2] (1:2)



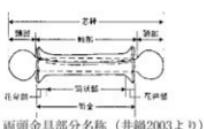
第16図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器(3) (1:2)



第17図 8号墳横穴式石室出土遺物 武器・工具・鉄釘 (1:2)



鉄鎌部分名称



両頭金具部分名称 (井鍋2003より)

第18図 鉄鎌・両頭金具部分名称

釘が残存する。

#### 石突 (156)

石突も1点のみの出土である。全長13.5cmで、幅3cm、断面は円形である。

鞘口金具 (157) 157は鞘口金具である。割れ口から本来は環状をなしていたが、破損したとみられる。目釘穴が遺存する。

#### 鉄刀 (158～161・163)

すべて破片資料である。158は刀の破片で撫闇である。刀子の可能性もある。159は茎の茎尻部の破片である。茎尻は一字文字尻で、目釘穴がある。163は小太刀と考えられるもので残存長は21.1cm、両闇のものである。刃部は14.0cmで、幅2.0cm、茎部は残存長7.1cm、幅1cmで柄口付近に木質が残存している。先述したように、この小太刀の下から金製の刀装具が出土し

ており、これに伴う可能性がある。

#### 鉄鎌 (164～257)

鉄鎌<sup>(9)</sup>は、小片も含めると94点出土しており、広根鎌と長頭鎌に大別される。164～188は広根鎌である。164～171の鎌身部は長三角で茎関部は直角闇(165・171)、棘闇(164・167・168)は台形闇(169)をもつ。172～174は脇抉三角鎌で、茎関部の形態は角闇である。176～181は長三角鎌で、撫闇をもつものである。撫闇には、僅かに2段屈曲するものとそうでないものがある。178～181の茎関部は棘闇である。182～186は三角鎌で、182は逆闇が2段ある。185・188は鎌身部が2段闇を呈する。

189～257は長頭鎌である。破損のため不明瞭な198を除いてはすべて三角鎌で、直角いしは斜闇である。鎌は片丸・両丸造りのものがあり、闇部は角・台形・棘闇がある。頭部は8.5cm前後のものが多い。

#### 両頭金具 (258～261) (部分名称は第18図参照)

両頭金具<sup>(9)</sup>は飾り弓の一部とされるもので4点出土している。半球状の頭部を両端にもち、鉄棒の周りに薄い鉄板を巻いたものである。鉄板は弓本体に挿入した際、両端に切り込みを入れ、折り返され、平面的に花弁状をなすが、本古墳例は2弁タイプのものである。

#### 工具 刀子 (162・266～280)

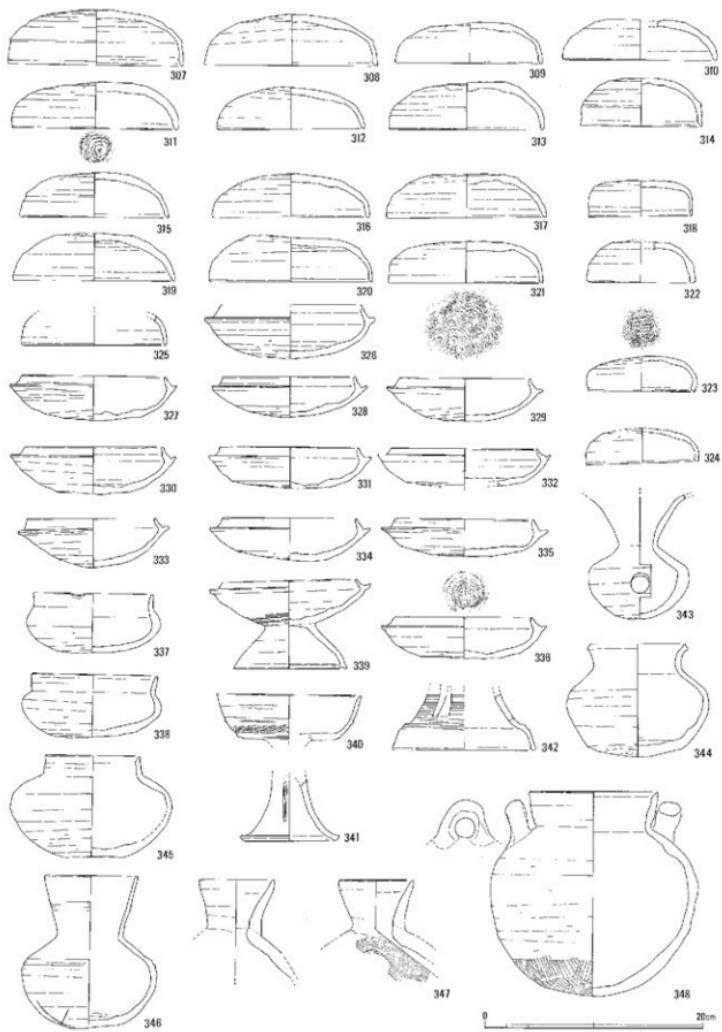
162は完形で、それ以外は破片資料である。162は全長13.5cmで、両闇のものである。茎は6.8cm、幅1.0cmで栗尻である。柄は鹿角製であるが、若干柄口などに残るのみである。また、茎部には樹皮により下地巻きが施されているのが良好に観察でき、木質も若干残る。鞘部に木質は残存していない。266は刃部、茎部とも一部欠損している。残存長8.6cm、幅最大1.6cmで、両闇である。267～280は刃部の破片である。267・269・273・278・280は茎部の破片で、267・269・278は両闇で木質が残る。269には樹皮による下地巻きが残存する。

#### 鎌 (262)

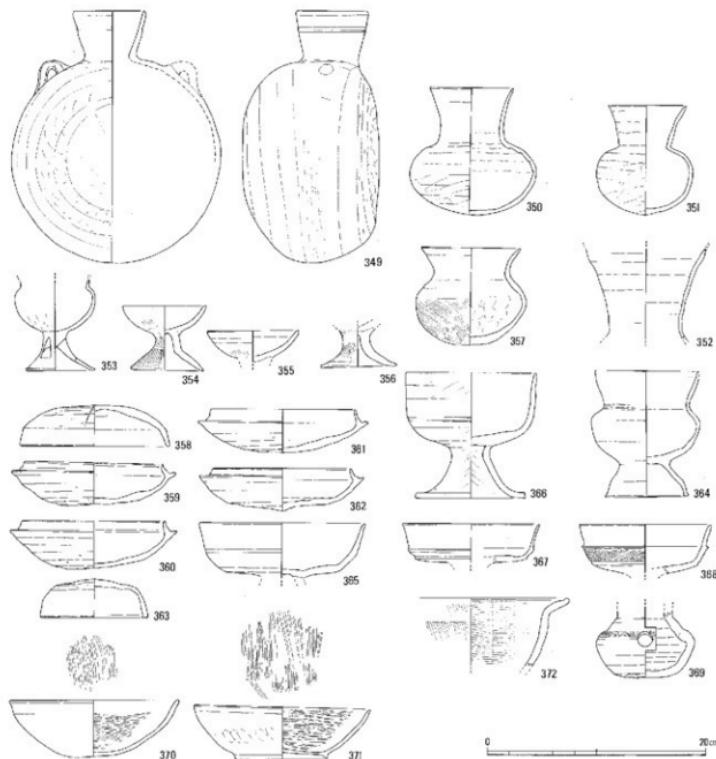
262は破片であるが、薄手であることから鎌の可能性がある。

#### 鎔 (263～265)

263～265は断面形が長方形を呈していることから、鎔である。いずれも木質が残る。



第19図 8号墳横穴式石室出土遺物 土器(1) (1:4)



第20図 8号横穴式石室出土遺物 土器(2) (1:4)

#### 鉄釘 (281~305)

25点出土している。頭部が扁平のものと (284・301)、折り曲げるもの (290・293など)、頭部を直角に折り曲げるタイプ (294) がある。木質は一部残るもの、木目の変換点は明確ではない<sup>100</sup>。

#### 土器 須恵器 (307~349)

蓋杯・杯身・短頸壺・長頸壺・高杯・甌・壠瓶・把手付甌がある。307~325は蓋杯である。口径は14~15cmのものと10~11cmに大別される。天井部と口縁部との境はわずかに接線をもつものともたないものが

ある。口縁部端部は内傾する段をもつものと丸くおさめるものがある。内面には同心円状のタタキ痕が確認できる。318・322~324は台付甌の蓋で、口縁部の端部は平坦な面をもつ。326~336は杯身で、口径は12cm前後である。口縁部の立ち上がりは低い。口縁部端部は内傾する段をもつものと丸くおさめるものがある。336は切子玉が入っていた杯身である。底部内面にはタタキの当具痕がみられる。344・345は短頸壺、346は長頸壺である。339は高杯で、杯身に短い脚部を付加している。340は高杯の杯部で、外面上には列

点文が施される。341は脚部の破片である。342は台付壺の脚裾部である。343は底で、口縁部端部を欠損しているが、口縁部がラッパ状に開く形態を呈する。348は把手付壺である。焼成は良いものの、焼き彫れがある。底部外面にはタタキ痕が残るが、中央部はケズリで整形されている。346は長頸壺で、底部には「×」印のヘラ記号を有する。

347・349は堤瓶で2点出土している。347は口縁部の破片で、349は口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。347は器壁がやや厚手である点で特徴的である。  
**土師器** (350～352・357)

高杯・長頸壺・短頸壺が出土している。353～356はミニチュア土器で、いずれも高杯である。353は脚部に透かし孔が穿孔されている。350～352は長頸壺である。器壁は薄く、底部にはケズリを施す。口縁部が外反するもの(350・352)と比較的直線的に伸び、体

部も球形を呈するもの(351)とがある。「赤焼き須恵器」とも呼ばれる場合もあるが、ここでは土師器として取り扱う。357は寝床下から出土したやや小型の壺である。体部にはハケメを施す。

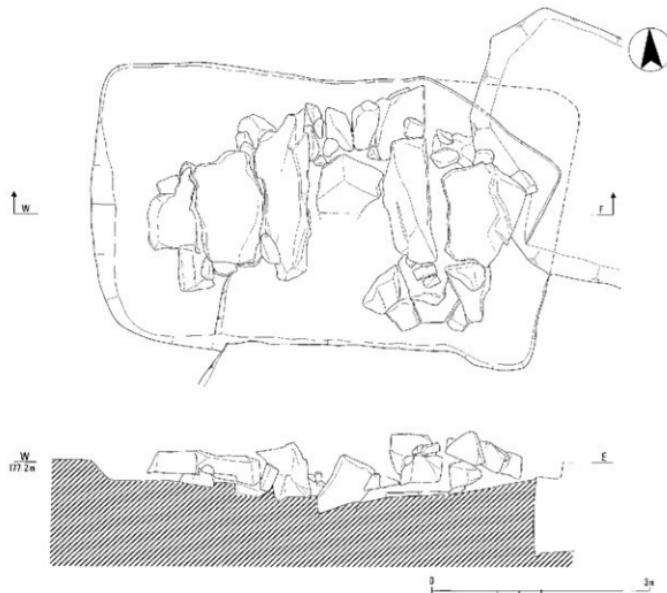
#### **美道部出土土器** (358～369)

須恵器の蓋杯・杯身・高杯・台付壺が出土した。

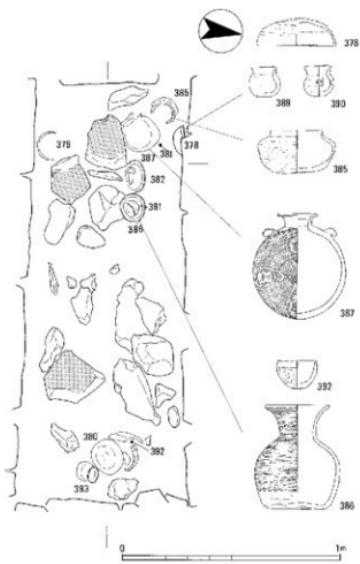
358～363は須恵器の蓋杯・杯身である。363は台付壺の蓋である。365～368は高杯、364は台付壺の小型品、373は小形の台付壺、365～368は高杯、369は底である。

#### **石室内埋土上層出土遺物** (370～372)

370・371は黒色土器である。内面にはヘラミガキが施される。379は内黒で黒色土器A類である。埋土の上層から出土しており、石室の再利用時に伴う土器であろう。9世紀頃のものであろう。



第21図 8号填竪穴式小石室検出状況 (1:60)



第22図 8号填竪式小石室遺物出土状況 (1:20)

### C 堆穴式小石室（第2石室）(第21~22図)

横穴式石室（第1石室）の北側にて確認した。やや崩落した石もあったが、天井石も残存しており、未盗掘の状態であった。墓壙は短軸1.9m、長軸3.3mである。石室の石材の石種は、第1石室同様、片麻岩黒雲母花崗岩である。上層断面より、盛土がなされる前に構築されており、第1石室に先行して構築されている。

天井石を除去し、流入土を除去していくと、南側の側壁の上段が崩落し、北側の側壁も崩れかかっており、石室内にせり出している状態であった。

床面では西側の幅が若干広く70cm、東側は66cmを測る。長さは1.74mである。4側にある石は棺台と考えられる。またスクリーントーンで表示した石（第22図）には赤色顔料が付着していた。赤色顔料の成分は水銀朱である。

床付近から赤色顔料の付着した石とともに多様な土器が出土した。西側からは、須恵器の杯身（382）、蓋杯（378）、徳利壺（386）、大型の広根壺が出土した。鉄鏃はいずれも茎部が欠損している。埋葬される際に打ち欠いたのであろうか。杯身の中にはミニチュアの杓子形土製品（388）が入っており、徳利壺の口縁部には土器師の楕（392）が置かれて出土し、須恵器の蓋杯の中からはミニチュアの小壺（389・390）が2つセットで出土している。一方には体部に穿孔がみられる。

石室内の東側からは須恵器の蓋杯（380）、土器器壺（393）などがまとめて出土している。

#### d 出土遺物

##### 石室内出土遺物（第23図）鉄製品

##### 鉄鏃（373~376）

全部で4点出土しており、すべて広根鏃である。型式はいずれも三角形鏃で、逆刺をもつ。376は棘闘であるが、いずれの個体も茎以下が欠損しており、未盗掘であることから考えれば、意図的に打ち欠いたものと推定される。

##### 土器 須恵器（377~387）

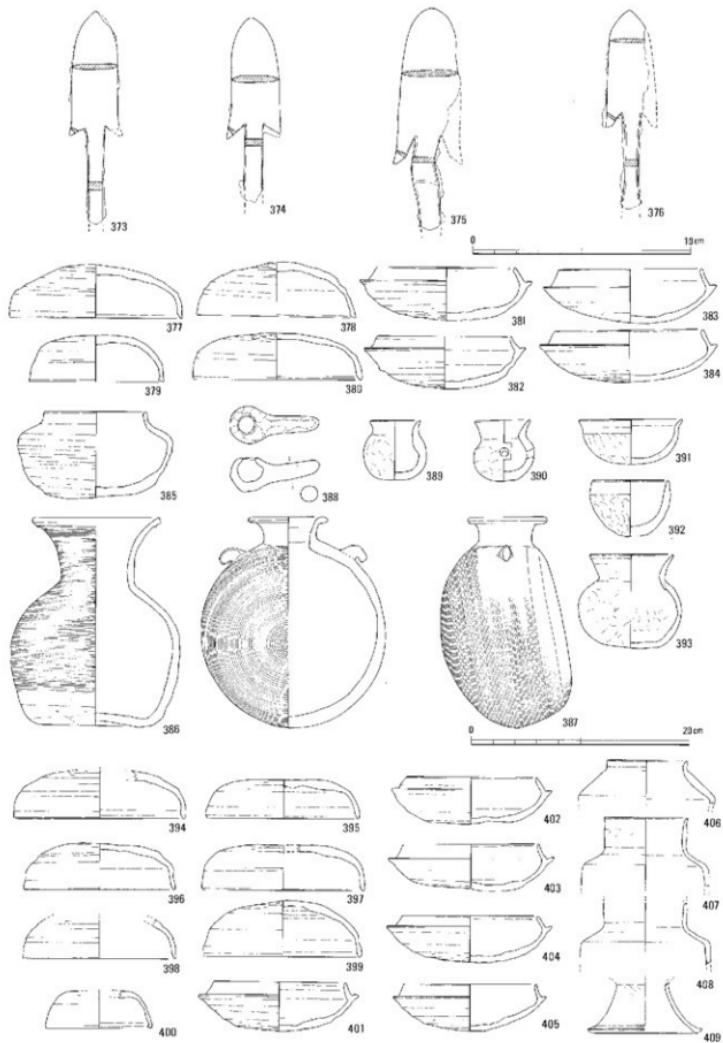
蓋杯・杯身・短頸壺・平底壺・堤瓶がありすべて完形品である。377~380は蓋杯で、口径は15cm前後のものと12~13cmのものがある。天井部と口縁部との境は回線状調整がなされる。口縁部端部は内傾する段をもつ。381~392は杯身で、口径は13cm前後である。立ち上がりは内傾し、口縁部端部は丸くおさめるものがほとんどである。386は平底の徳利壺と呼ばれるもので、外面にはカキメが施され底部にはケズリが施される。387は堤瓶で、外面にはカキメが施され、把手は輪ではなく、突起状に退化しているものである。

##### 土製品（388）

388は杓子形をした土製品である。パイプのような形状を呈しており、丸い部分は中空である。杓子形土製品の県内の類例としては、津市の納所跡<sup>34</sup>・金剛坂遺跡<sup>35</sup>で確認されているが、いずれも弥生時代のものである。

##### 土器師（389~393）

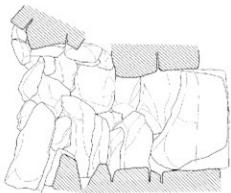
389・390は蓋杯に収められていたミニチュアの小壺である。390の体部には焼成前に小孔が穿孔されてい



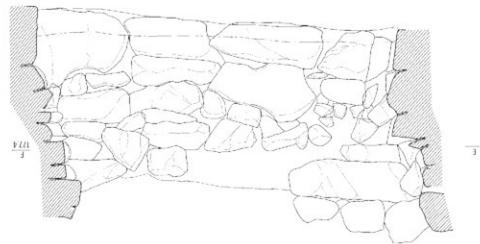
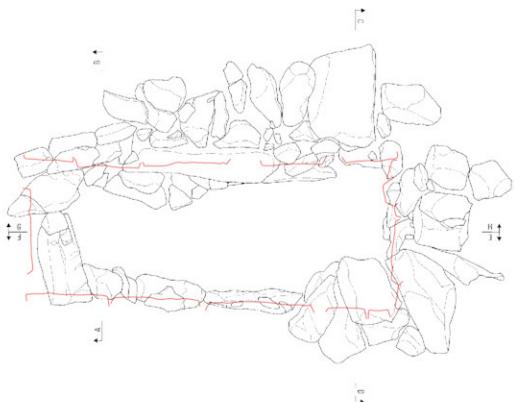
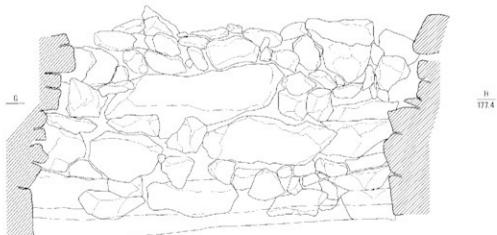
第23図 8号填竖穴式小石室出土遺物 (373~376は1:2, 他は1:4)



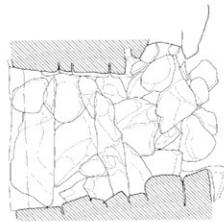
北  
N



A.



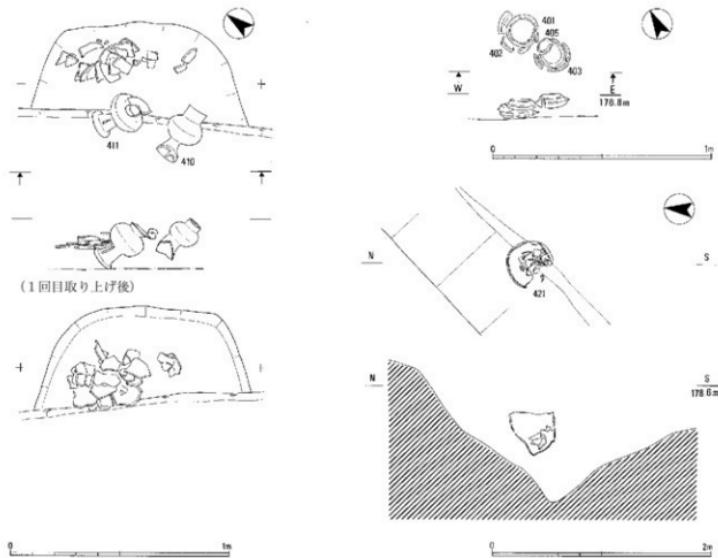
E



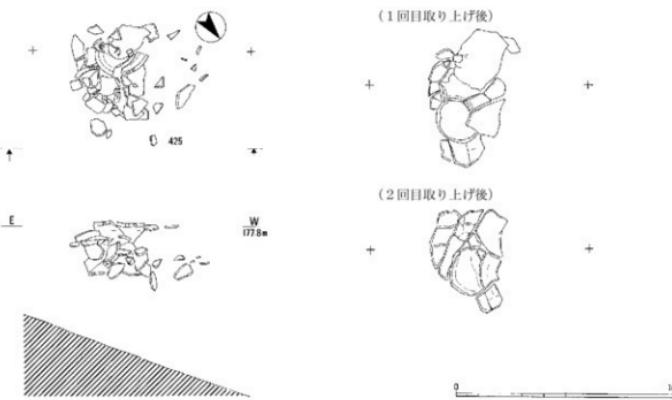
F

第24図 8号填竪穴式小石室平面・立面図 (1:20)

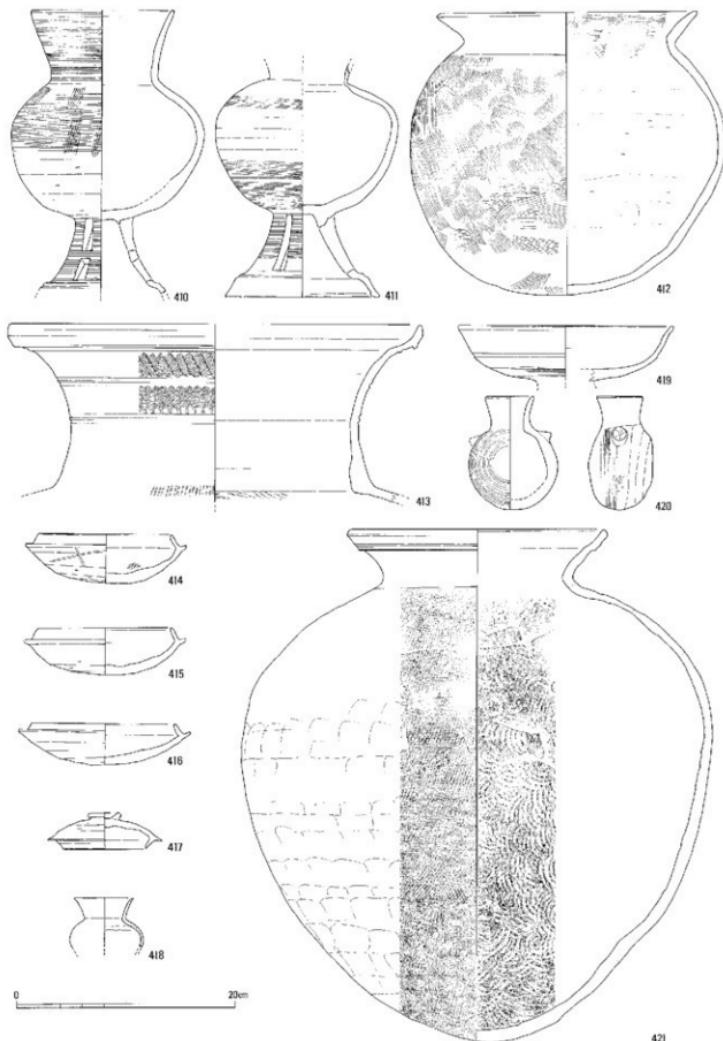




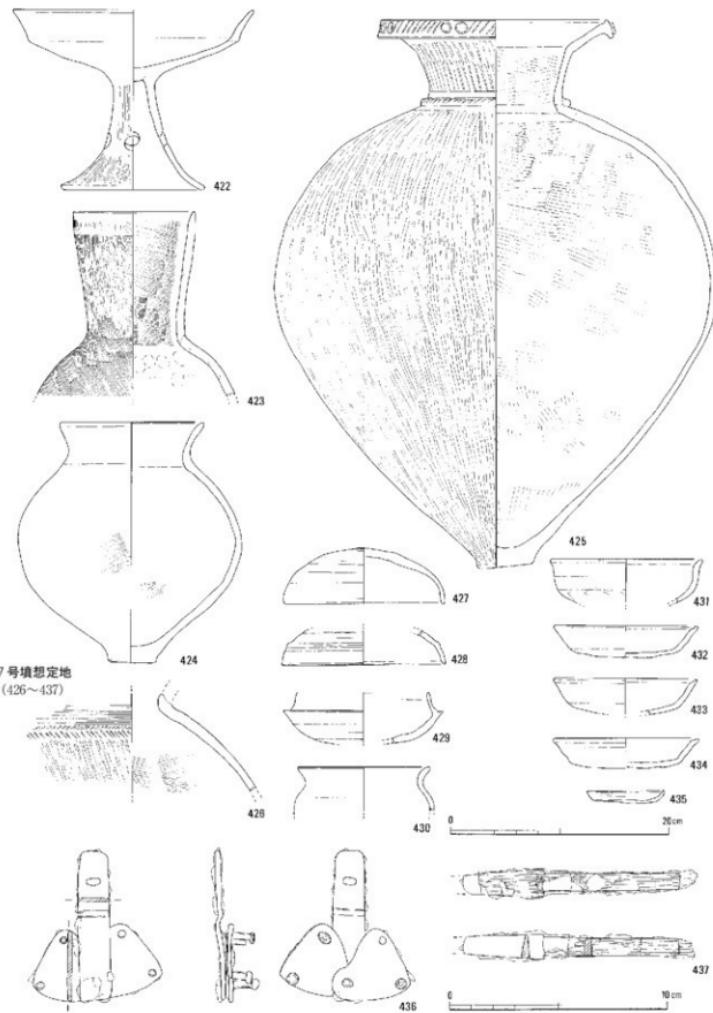
第25図 8号填埋丘・周溝内土器出土状況 (1:20, 1:40)



第26図 稲生土器出土状況 (1:20)



第27図 8号墳墳丘・周溝内出土遺物 (1:4)



第28図 8号墳・7号填想定地出土遺物 (436・437は1:2, 他は1:4)

るが、389は無孔である。399・400は鉢である。391は小形のもので、徳利壺の口縁部にはめ込まれていたものである。393は壺である。

築造時期は、出土した須恵器よりMT85型式段階と考えられ、第1石室より若干先行して構築されたものと捉えられ、土層断面から得られた知見と一致する。

#### 8号墳盛土内遺物（第27図）（394～418）

須恵器の蓋杯、杯身、短頸壺、高杯、台付壺などが出土した。394～400は蓋杯、天井と口縁部をわける縦は殆ど消失している。401～405は杯身である。口径は12cm、内傾する立ち上がりをもち、口縁部端部は丸くおさめる。406～408は長頸壺、409は高杯の脚部である。

410と411は、須恵器の台付壺である。410は脚部の柄が、411は口縁部が打ち欠かれている。410の脚部は方形2段透かしで、体部外面にはカキメのうち下半部に回転ヘラ削りで整形されている。411の脚部は方形の1段透かしである。ともに出土した土師器壺（412）は、出土時は破片であったが、ほぼ完形に接合したことから、台付壺とともに破碎されたものと考えた。外面にはナナメハケメが施されている。

#### 周溝出土遺物（第27図）（413～421）

須恵器の蓋杯、杯身、高杯、堤瓶、壺が出土している。413は大甕の口縁部、420はミニチュアの堤瓶である。把手の部分は退化し、突起状を呈する。414～416は杯身、418はミニチュアの小壺である。421は大甕である。外面にはタタキが施され、内面にはタタキの當て具痕がよく残る。

#### 築造時期について

8号墳の築造時期は、先行する第2石室から出土した須恵器が田辯昭三氏による陶邑編年によるMT85型式段階が中心であり、MT85段階が初葬と考えられる。また、第1石室の須恵器はTK43～TK209型式のものであることからTK43段階が初葬とみられ、埴丘の築造時期もこの段階である。これは、盛土内の土器や他の副葬品と比較しても妥当であると考えられる。

#### 8号墳盛土内混入遺物（第28図）（422～425）

弥生土器の高杯・長頸壺・壺が出土している。422は高杯である。423は長頸壺で下半部を欠く。口縁部

外面には縱方向の、内面には横方向のハケ目が確認できる。425は大形の壺である。底部は平底で、胴部の最大径は体部上半部にある。口縁部はやや外方に伸びたあと、やや屈曲する二重口縁状を呈する。口縁部外面には円形浮文が貼り付けられ、板状工具による刺突文が施される。頸部の屈曲部には突帯が貼り付けられる。外面にはヘラミガキが、内面には断続的な横方向のハケメがなされる。

#### e 7号墳想定地

7号墳は、当初は、古墳であると想定されていた。埴丘と考えられた箇所にトレンチをいたところ、表土直下で地山である岩盤が検出され、埴丘頂部を精査した結果、長軸約4m、短軸約1.9mの長方形の土坑を検出した。

調査区の北側には、等高線180～181mがテラス状を呈する箇所があり、これを北裾とし、南側にに関しては埴丘の裾といえる尾根を切断する堰込みなどはみられなかったが、円弧を描くように落ち込んでいるため、約12mの不整形な円形の埴丘墓である可能性も考えた。しかし、当初は墓壙と考えられる土坑を検出したものの、埋土からは刀子の破片が出土したのみであった。また、土坑の南端には後世の植林の際に掘削されたとみられる小溝が走っており土坑の一部を切っている。埋土中からは、弥生末～古墳初期の土師器片や古墳後期の・須恵器片が出土しているが、いずれも破片のみであった。小溝や墓壙周辺からは杏葉とみられる馬具片や、須恵器の破片が出土しているが、型式にバラツキがあり、一概にこの土坑が土壙墓であった可能性は否定できないが、馬具類がこれに伴う遺物とするにはや躊躇を覚える。以上のことから当初7号墳としていたものは土壙墓が存在した可能性はあるが、充分な根拠が得られなかつたため、古墳ではないとの結論に達した。

#### 包含層出土遺物（427～437）

427～429は須恵器の蓋杯・杯身、430～435は土師器壺・瓶で古代のものが殆どである。436は杏葉の一部、437は刀子片である。436は馬具で、圓丸の三角形の鉄板を縫じ合わせた特異なものである。 （豊田）

## 2 天童山13号墳

### a 墳丘

13号墳は、7・8号墳よりも5mほど下がった尾根上に存在する。調査前は周辺の斜面よりや北側にせり出し、平坦な面がみられたものの、古墳とは認識されておらず、古墳か否かを判断するため、トレントを設定し、斬ち割りを入れたところ、横穴式石室の側壁の石と須恵器の大甕片が出土したため、古墳であることが判明した。

墳丘は丘陵の傾斜面のため、必然的に低い北側部分を中心に旧表土上に盛土して構築されている。

盛土中からは須恵器の蓋杯や杯身が出土していて、墳丘構築過程で何らかの祭祀が須恵器を用いて行われたものと推察される。

土層断面は、石取りの際に擾乱を受けており明確ではないが、石室は、墳丘が完成した後に墓壙が掘削され、構築されたものと考えられる。

墳丘北部の裾部は急斜面になっており、流出したものと考えられ確認出来ていない。また、南部分についても盛土はさほど行われておらず、石取りの際に改変を受けていたこともあり裾部は不明であるが、残存する周溝から判断すると、径13m程度の円墳であったと考えられる。

南側は、地山を掘りこんで周溝を形成しており、弧を描いて掘削されていることから、墳形は円墳である。なお、周溝内からは遺物は出土していない。

また、崖状に落ち込む北側斜面には周溝は巡っていない。

### 石室（第29図～第31図）

石室は、N34°Wの方向である。8号墳第1石室同様、石室の天井石をはじめ、上半部については後世の石取りによって無くなっていたが、玄室の壁面の下半部と、羨道の側壁については残存していた。

石室は玄室幅1.5m、長さ3.1m、全長約6.0mの両袖の横穴式石室で、石室のプランは端正な長方形である。左右両袖の幅が若干異なる、左袖30cm・右袖41cmで、左袖がやや狭い。墓壙は幅2.7m、長さ5.4mである。

玄室のやや奥壁寄りには、角礫が一列に並べられているほか、右袖部分には須恵器（475）を備える空

間を礫を並べることにより形成している。その他にも両側壁寄りに棺台と考えられるような角礫がみられるが、寝床は施されていない。

### 石材

奥田氏によれば、石種は黒雲母花崗岩である。8号墳同様に石材は角が鋭く残る方形の石で、8号墳と岩相が若干異なるが、このような岩相の変化は数十m離れば生じている場合がある。この丘陵に露出する石を剥がして採石したと考えられる。

### 遺物出土状況（第31図）

遺物は玄室の床面を中心に出土し、羨道部からは出土しなかった。土器類は主に左右袖部付近と、奥壁寄りの区画部分に偏って出土しており、鉄製品も同様である。長頭鏡（444）は右壁側、広根鏡（441）は奥壁際から出土している。奥壁寄りの区画された部分の左右両側部からは、脚付壺（476）、堤瓶（478）鉄鏡（437～442）が出土している。この空間内には棺台に使用されたとみられる角礫がある。

棺の配置は奥壁寄りに、平坦面をもつ礫が主軸に直行するかたちで数個並んでおり、棺側部の位置に相当するとみられることから、ここで一棺の埋葬が推定できる。左側の側壁付近には、縦方向に石が数個並んでおり、須恵器の杯身（460）と砾石（482）が出土した。棺台はみられないが、ここに一体埋葬されていたと考えられる。また、右袖側には、杯身のほか長頭鏡が出土しており、もう一具この位置に縦方向に埋葬されていたとみられる。

### 羨道

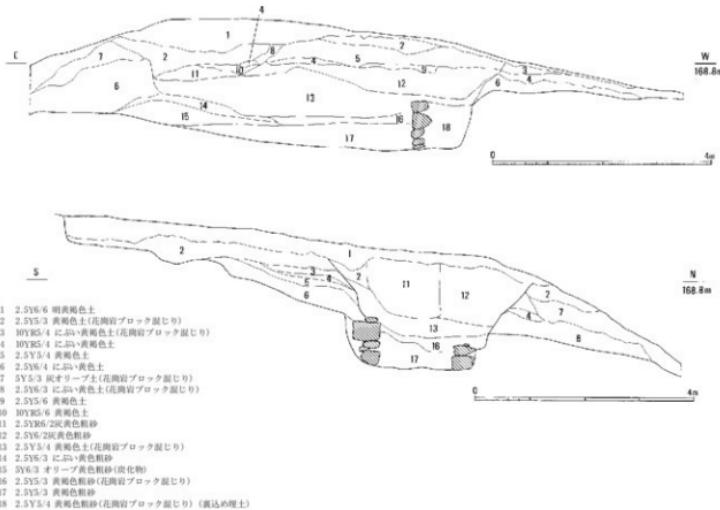
羨道の長さは石材がある部分で長さ2.9m・幅70cmで、側壁は入り口に向かって玄室床より上がっておりやや短い。側壁は比較的の残存していたが、北側の側壁が森林伐開時に重機が通った影響のせいか、上からの圧力で外方に傾いている。

また、羨道部検出の際、開口部の閉塞に使用されたとみられる礫群がまとまって確認されたが、原位置は保っておらず、擾乱を受けていた。

### b 出土遺物

#### 玄室内出土遺物（第32～33図）

鉄製品 鉄鏡（438～444）が出土している。広根鏡（438～442）と長頭鏡（443・444）があり、広根鏡



第29図 13号填埋丘土層断面図 (1:80)

はすべて三角形鐵で、438～441は逆刺をもつ。440は頭部に逆刺をもつ唯一のものである。442は2段闊である。443は纏身部分が不明瞭であるが、頭部の短いタイプのものであろう。長頭鐵(444)は纏身部分が欠損するが、茎部には木質・撫糸が残る。

#### 土器 須恵器 (445～479)

蓋杯・杯身・短頭壺・甌・高杯・台付壺・堤瓶・壺・甌が出土している。445～458は、蓋杯である。口径は14cm前後を測り、天井部と口縁部をわける稜があるものと、ほとんど消失したものがある。口縁端部内面にはわずかに段をもつ。453・454は口縁端部に刻み目をもつ。459～470は杯身で口径は13cm前後である。口縁部端部は丸くおさめるものと端部内面に弱い段をもつものがある。472は甌で、やや長いラッパ状に開く口縁部をもち、外面には波状文を施している。473・474は高杯である。高杯は一段透かしである。475・476は台付壺で、475は口縁部が杯身の形状を呈し、脚部は一段透かしである。476は内凹状の口縁で、外面には横線と列点文

が施される。脚部には列点文のほか、4方向に3段の長方形の透かし孔が穿孔され、裾部も内雙する。477は壺で、外面にはタタキ痕が残り、内面にはタタキの當て具痕も一部残る。478は堤瓶である。体部にはカキメが施されており、ほぼ完形である。479は大甌の口縁部である。

#### 石製品 砥石 (480)

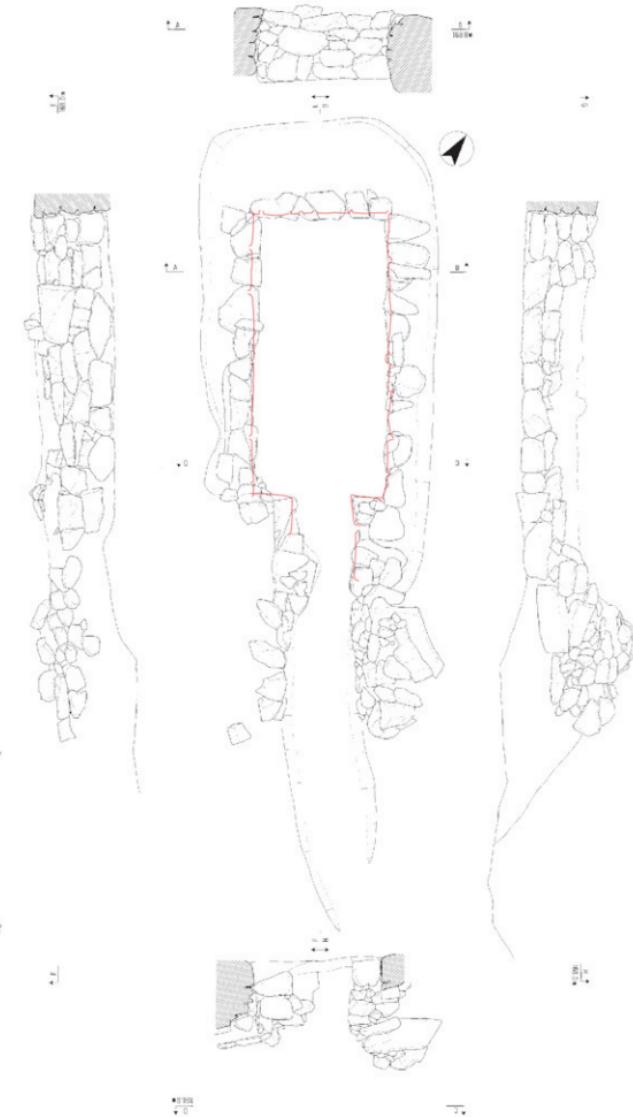
砥石は、長さ14.5cm、巾2.8cmの長方形を呈し、上面は使用の痕跡が確認できる。

#### 土器師 (480・481・483)

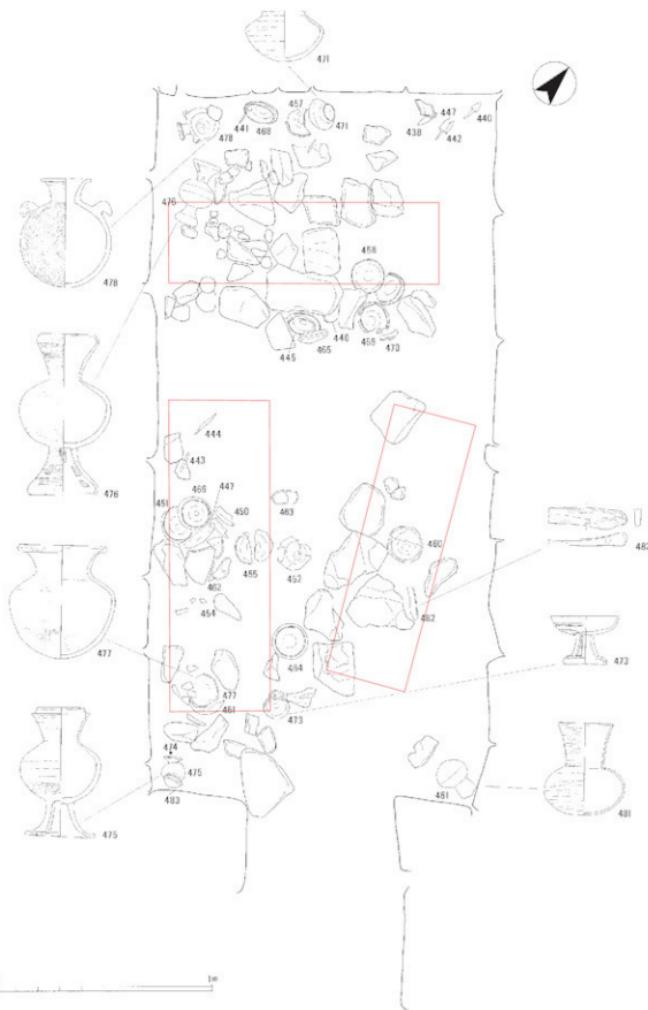
483は楕である。器壁は厚手で、内面には粘土組の積み上げ痕が確認できるなど、やや粗製のものである。480・481は長頭壺である。器壁は薄手で、体部下半の外表面はヘラケズリされている。

#### 填丘トレンチ出土土器 (485～486)

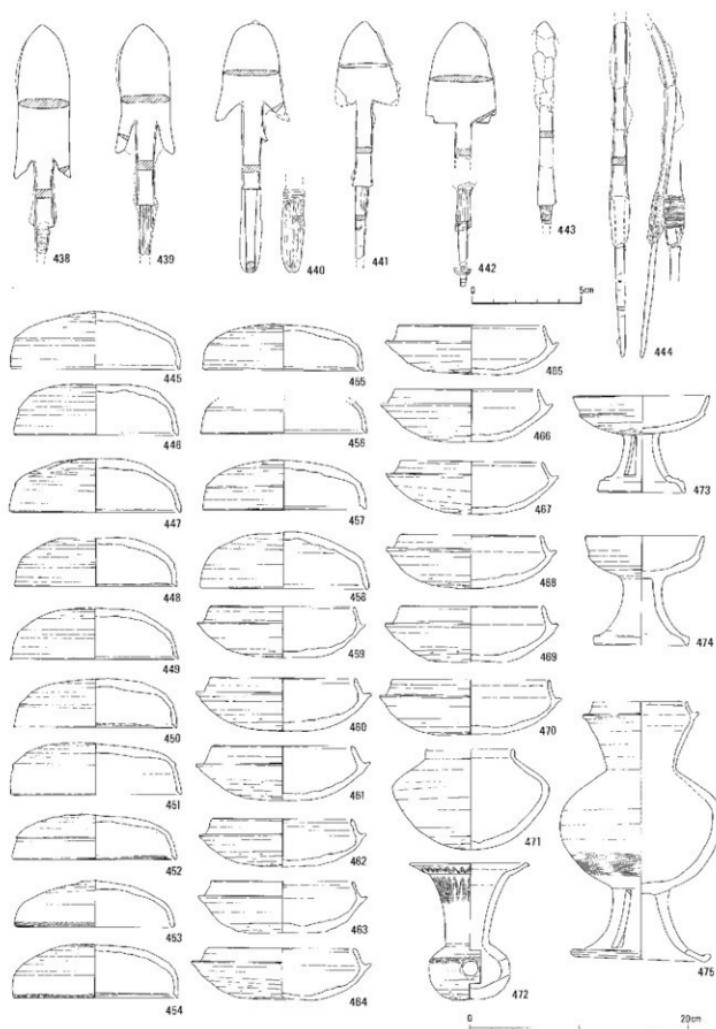
485は須恵器の杯身、486は底平の甌で、口縁部は欠損しているが徳利壺の可能性がある。



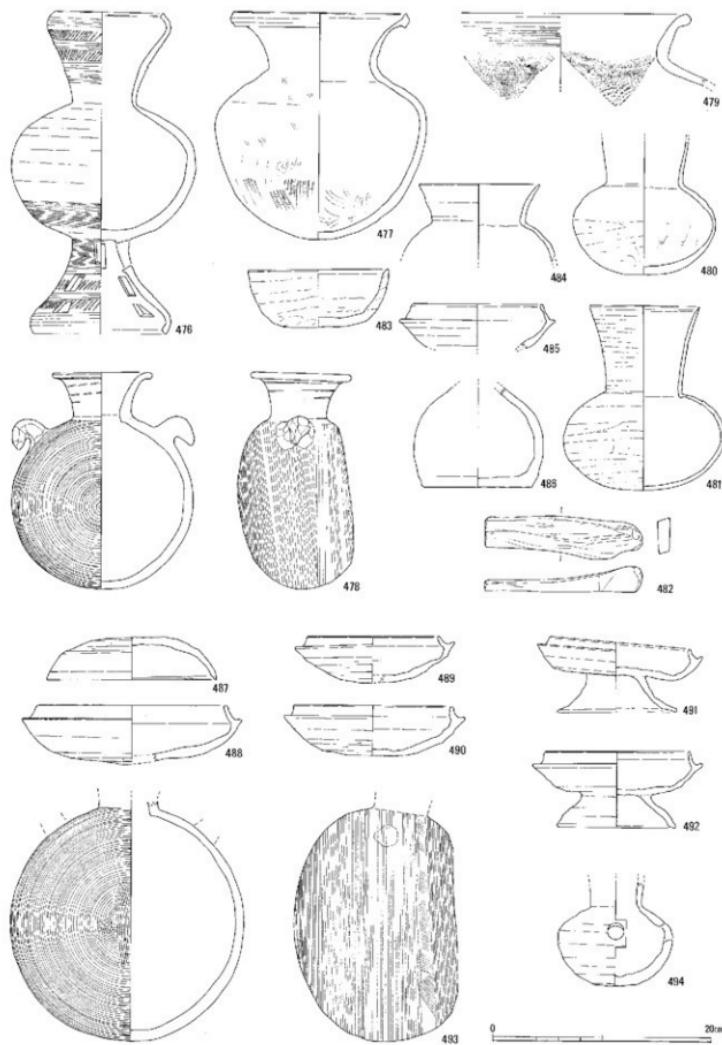
第30図 13号填横穴式石室平面・立面図プラン (1 : 100)



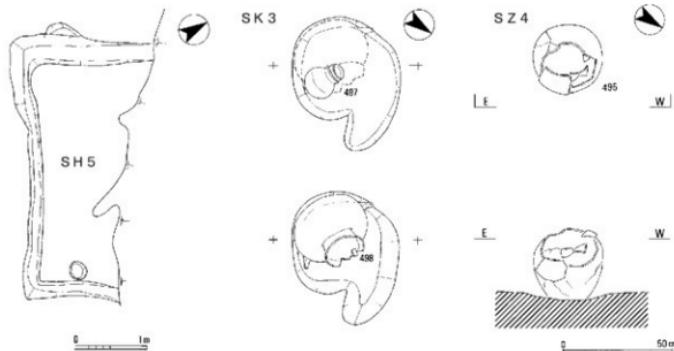
第31图 13号填空室内遗物出土状况图 (1:20)



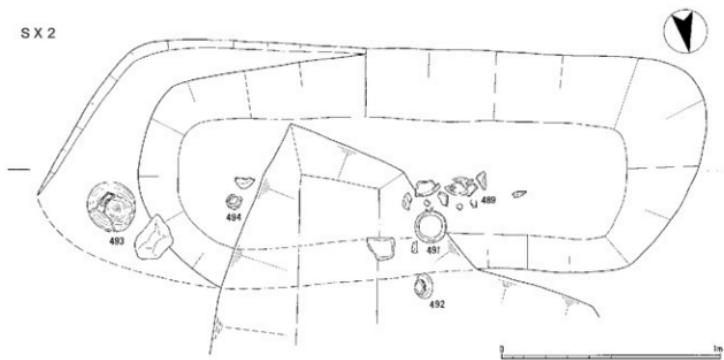
第32図 13号横穴式石室出土遺物実測図 (438~444は1:2, 他は1:4)



第33図 13号墳・SX 2出土遺物実測図 (1:4)



第34図 土壙SK 3・SZ 4、整穴住居SH 5実測図 (1 : 20)

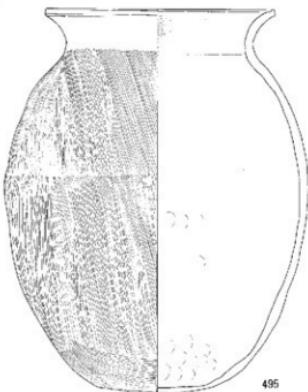


第35図 土壙墓SX 2遺物出土状況 (1 : 20)

### c 古墳の築造時期

築造時期を検討する材料としては、鉄製品と須恵器がある。石室には何度か追葬が行われたと考えられ、須恵器には時期幅が認められる。出土した須恵器はTK10～TK43型式段階の範疇ではあるが、TK85段階のものが主体であり、やや頭部の短い長頸瓶が含まれていることも考慮すれば、古い要素がみられる。従って8号墳よりも若干先行するMT85段階に築造されたと考えられる。

S Z 4 (495)



495

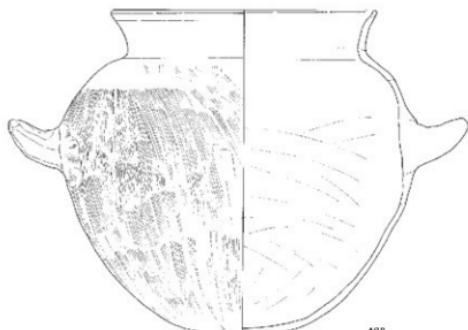
S K 3 (496~498)



496



497



498

0

20cm

第36図 土壙SK 3・SZ 4出土遺物実測図 (1:4)

### 3 土坑墓

#### 土坑墓 S X 2 (第35図)

8号墳の北側に伸びる尾根の延長上のやや斜面が緩くなつたところで土坑墓を確認した。土坑は長さ約3m、幅1.0~1.1mの規模で、東側にはテラスがあり、堤瓶が置かれ、棺内とみられる箇所からは蓋杯・杯身・高杯が出土している。甕はやや南より単独で出土しており、出土レベルが高いことから、棺外もしくは埋葬途中に供献されたものであろう。

#### 土坑墓 S X 2 出土遺物 (第36図) (487~494)

蓋杯・杯身・高杯・堤瓶・高杯がある。487は蓋杯、488~490は杯身である。488は口径が17cmある大きなものである。491・492は高杯である。いずれも胎土が粗いのが特徴である。493は堤瓶、494は甕であるが、堤瓶とともに口縁部を打ち欠いている。

(豊田)

### 4 弥生・古代の遺構

#### a 遺構

今回の調査では古墳の下層遺構として弥生時代の遺構が存在する可能性があったため、慎重に掘り下げを行つたが、明確に遺構は確認できなかつた。しかし、8号墳周辺では良好な後期の土器が出土している。丘陵に集落・墓域といった遺構が存在する可能性は高く、13号墳西には時期不明ながら堅穴住居が確認されている。

#### 土坑 S K 3 (第34図)

13号墳南の斜面に位置する。規模は約50~60cm不整形な土坑である。埋土の上層から、丸底の甕と杯がセットで出土した。杯は、甕の口縁部にはめ込まれていた。また、取り上げ後、さらに土坑の底からは把手付甕が完形に近い状態で出土した。

#### 落ち込み S Z 4 (第35図)

13号墳南のS K 3西側の斜面に位置する。斜面上のやや平坦になった部分に長胴甕が口縁部を下に、逆さまに置かれていた。もともとそのような平坦面であったのかピットが存在したのかは明らかではない。

#### b 遺物

#### 落ち込み S Z 4 出土遺物 (第36図) (495)

495は長胴の甕である。口径は24.3cm、器高は約30cmである。外面には綫方向のハケが施され、底部付近に横方向のハケを施す。

#### 土坑 S K 3 出土遺物 (496~498)

496は丸底の甕である。口径は13.9cmで体部の最大径は15.8cmである。外面はタテ方向のハケが施される。497は土器鉢である。器壁はやや厚く、外面には粘土の積み上げ痕が残るなど粗製のものである。498は把手付甕で完形である。把手部分は胴部を形成後、はめ込んで取り付けられている。外面には綫方向のハケが施され、内面にはナデによって調整される。7世紀前半頃に相当する土器であろう。(豊田)

#### 【註】

- (1) なお、現地説明会資料では、8号墳の墳頂を方墳としたが、今回の報告もって訂正する。
- (2) 上田田代之「古墳構造過程における儀礼一墳丘を中心として」(『古墳文化とその歴史』勉誠出版1995年)
- (3) 地元の住民の話によれば、この周辺にある古墳の石室の石材は後世の石取によって抜き取られたという。
- (4) 通常、柄石は渡道と玄室との間に段差がある場合を示すため、本稿のような段差が認められない場合は、適当ではないのかもしれないが、渡道と玄室を区別していることに相違はないことから、「柄石」という表現を用いている。
- (5) 奥田尚氏の意見に基づく。
- (6) なお、棺配置を探るうえでは森岡秀人「追跡と棺体配置」(『関西大学考古学研究開設参拝周年記念考古学論叢』1999年)を参照している。
- (7) 大阪府教育委員会『甦る寛弘寺古墳群』(1992年)
- (8) 鉄雖然に関しては以下の文献を参考にした。  
松山秀弘『古墳時代の鐵雖然について』(『櫻原考古学研究所論集』第8号・吉川弘文館 1988年)  
岩原剛『鐵雖然』(『三河の後期古墳』19年)  
関義則『古墳時代後期鐵雖然の分類と編年』(『日本古代文化研究』第3号・古墳文化研究会 1993年)  
(9) 井鍋鶴之『静岡県内の飾り弓について』(『研究紀要』第10号(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003年)  
(10) 金田善敬『古墳時代の鉄釘』(『考古資料大観 第7巻』小学館 2003年)  
(11) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店1981年)  
(12) 山田猛氏のご教示による。  
(13) 田中一『古代・中世における主工業生産の発達(4) 工業内』(『日本の考古学』IV 1967年)  
(14) 伊藤久嗣『納所遺跡-遺構と遺物』(三重県教育委員会 1980年)  
(15) 泉雄三『鐵絲遺跡-明和町金剛坂を中心とする方形周溝墓群の調査』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)  
なお、古墳から出土したものでは森将軍塚古墳例がある。



遺物觀察表

番号	実測番号	種別	材質	出土位置	最大径 (長さ)	最大厚	孔径	色調	備考
1	80-01	金製飾金具	金	8号墳玄室	2.45	幅1.25	—	金	唐草文様
2	80-02	金製飾金具	金	8号墳玄室 (鏡163の下)	3.70	幅0.7	—	金	唐草連続文様
3	80-03	金製飾金具	金	8号墳玄室 (鏡163の下)	3.70	幅0.8	—	金	唐草連続文様
4	80-04	金製飾金具	金	8号墳玄室 (鏡163の下)	3.50	幅0.8	—	金	唐草連続文様
5	80-05	金製飾金具	金	8号墳玄室 (鏡163の下)	3.00	幅0.8	—	金	唐草連続文様

第2表 金製刀装具観察表

番号	実測番号	種別	材質	出土位置	最大径 (長さ)	最大厚	孔径	色調	備考
6	57-01	耳環	銅	8号墳玄室	2.90	0.60	—	—	耳環(取上No) 1 銀環(銅芯)
7	57-02	耳環	銅	8号墳玄室	2.90	0.60	—	—	耳環(取上No) 2 銀環(銅芯)
8	57-03	耳環	銅	8号墳玄室	2.90	0.70	—	—	耳環(取上No) 6 銀環(銅芯)
9	57-04	耳環	銅	8号墳玄室	3.00	0.65	—	—	耳環(取上No) 7 銀環(銅芯)
10	57-05	耳環	銅	8号墳玄室	2.90	0.60	—	—	耳環(取上No) 8 銀環(銅芯)
11	57-06	耳環	銅	8号墳玄室	3.00	0.60	—	—	耳環(取上No) 9 銀環(銅芯)
12	57-07	耳環	銅	8号墳玄室	2.70	3.30	—	—	耳環(取上No) 3 銀環(銅芯)
13	57-08	耳環	銅	8号墳玄室	2.70	2.30	—	—	耳環(取上No) 5 銀環(銅芯)
14	57-09	耳環	銅	8号墳玄室	1.70	0.20	—	—	耳環(取上No) 4 銀環(銅芯)
15	57-10	耳環	銅	8号墳玄室	1.80	0.20	—	—	銀環(銅芯)

第3表 耳環観察表

番号	実測番号	種別	材質	出土位置	最大径 (長さ)	最大厚	孔径	色調	備考
16	81-d	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.70	2.80	0.37~0.15	半透明	
17	81-b	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.70	2.70	0.40~0.13	半透明	
18	81-h	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.70	2.77	0.40~0.12	半透明	
19	82-04	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.90	3.40	0.40~0.12	半透明	
20	82-05	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.75	3.05	0.37~0.16	半透明	
21	81-f	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.70	2.10	0.41~0.13	半透明	
22	81-j	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.90	3.06	0.35~0.12	半透明	
23	81-g	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.43	1.80	0.36~0.12	半透明	
24	82-03	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.30	1.80	0.45~0.15	半透明	
25	81-i	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.22	1.98	0.40~0.15	半透明	
26	82-02	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.20	1.85	0.33~0.15	半透明	
27	81-a	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.30	1.90	0.32~0.12	半透明	
28	81-e	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.40	1.90	0.35~0.13	半透明	
29	81-c	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.37	1.85	0.39~0.14	半透明	
30	32-01	切子玉	水晶	8号墳玄室	1.21	1.71	0.30~0.13	半透明	
31	58-01	簾玉	瑪瑙	8号墳玄室	1.50	1.60	0.25	ワインレッド	
32	58-02	簾玉	瑪瑙	8号墳玄室	2.80	2.30	0.25	ワインレッド	
33	58-03	簾玉	瑪瑙	8号墳玄室	3.20	2.30	0.30	ワインレッド	
34	58-04	簾玉	瑪瑙	8号墳玄室	3.20	2.20	0.20	ワインレッド	
35	79-03	管玉	碧玉	8号墳玄室	2.80	1.20	0.25	濃緑	
36	79-04	管玉	碧玉	8号墳玄室	3.40	1.15	0.30	濃緑	
37	79-05	管玉	碧玉	8号墳玄室	3.40	1.10	0.40	濃緑	
38	79-06	管玉	碧玉	8号墳玄室	3.30	1.20	0.30	濃緑	
39	79-07	管玉	碧玉	8号墳玄室	2.80	1.05	0.30	濃緑	
40	79-08	管玉	碧玉	8号墳玄室	3.10	1.20	0.25	濃緑	
41	79-09	管玉	碧玉	8号墳玄室	2.80	1.10	0.30	濃緑	
42	79-10	管玉	碧玉	8号墳玄室	2.90	1.10	0.30	濃緑	
43	79-11	管玉	碧玉	8号墳玄室	2.90	1.20	0.30	濃緑	
44	79-12	管玉	碧玉	8号墳玄室	3.00	1.10	0.40	濃緑	
45	79-01	小玉	ガラス	8号墳玄室	1.30	0.60	0.10	浅黄	

第4表 玉類観察表(1)

報告書No.	登録番号	種別	色調	透明度	製作技法	備考
46	83-1	小玉	コバルト	半透	管切	孔面研磨仕上げ、管材削円形
47	83-2	小玉	コバルト	半透	管切	孔面研磨仕上げ
48	79-6	小玉	コバルト	半透	卷付	
49	84-9	小玉	コバルト	透	管切	孔面研磨仕上げ、管材削円形
50	84-32	小玉	コバルト	半透	管切	孔面研磨仕上げ
51	84-42	小玉	コバルト	半透	管切	孔面研磨仕上げ、管材削円形
52	83-44	小玉	コバルト	半透	管切	孔面研磨仕上げ
53	84-43	小玉	コバルト	半透	管切	孔面研磨仕上げ、管材削円形
54	84-47	小玉	紫紺	透	管切	孔面研磨仕上げ、管材削円形
55	84-1	栗玉	水	透	管切	
56	84-2	栗玉	緑	半透	管切	
57	84-3	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
58	84-4	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
59	84-5	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
60	84-6	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
61	84-7	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
62	84-8	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
63	84-10	栗玉	水	透	管切	
64	84-11	栗玉	緑	透	管切	
65	84-12	栗玉	水	透	管切	
66	84-13	栗玉	水	透	管切	
67	84-14	栗玉	水	透	管切	
68	84-15	栗玉	水	透	管切	
69	84-16	栗玉	水	透	管切	
70	84-17	栗玉	緑	透	管切	
71	84-18	栗玉	緑	半透	管切	
72	84-19	栗玉	緑	半透	管切	
73	84-20	栗玉	緑	半透	管切	
74	84-21	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
75	84-22	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
76	84-23	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
77	84-24	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
78	84-25	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
79	84-26	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
80	84-27	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
81	84-28	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
82	84-29	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
83	84-30	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
84	84-31	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
85	84-33	栗玉	灰緑	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
86	84-84	栗玉	水	半透	管切	碧玉質
87	84-35	栗玉	水	半透	管切	
88	84-36	栗玉	水	半透	管切	
89	84-37	栗玉	水	半透	管切	
90	84-38	栗玉	水	半透	管切	
91	84-39	栗玉	緑	半透	管切	
92	84-40	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
93	84-41	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
94	84-44	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
95	84-45	栗玉	緑	半透	管切	淡黄色の前入り
96	84-46	栗玉	緑	半透	管切	
97	84-53	栗玉	コバルト	透	管切	
98	84-4	栗玉	水	半透	管切	
99	84-5	栗玉	水	半透	管切	
100	84-6	栗玉	水	半透	管切	
101	84-7	栗玉	水	半透	管切	
102	84-8	栗玉	水	半透	管切	
103	84-9	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
104	84-10	栗玉	緑	透	管切	
105	84-11	栗玉	水	透	管切	
106	84-12	栗玉	水	半透	管切	
107	84-13	栗玉	コバルト	透	鋸型	
108	84-14	栗玉	緑	透	管切	
109	84-15	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
110	84-16	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着
111	84-17	栗玉	青	不透*	鋸型	免泡気泡 多 石英砂粒融着

第5表 玉類觀察表(2)

報告書No.	登録番号	種別	色調	透明度	製作技法	備考
112	83-18	栗玉	紺	半透	管切	
113	83-19	栗玉	青	透	管切	
114	83-20	栗玉	青	透	管切	
115	83-21	栗玉	青	透	管切	孔面未調整
116	83-22	栗玉	水	半透	管切	
117	83-23	栗玉	水	透	鍛型	
118	83-24	栗玉	水	半透	管切	
119	83-25	栗玉	水	透	管切	
120	83-26	栗玉	水	透	管切	
121	83-27	栗玉	水	透	管切	
122	83-28	栗玉	緑	半透	管切	
123	83-29	栗玉	緑	半透	管切	
124	83-30	栗玉	緑	半透	鍛型	
125	83-31	栗玉	緑	半透	管切	
126	83-32	栗玉	緑	半透	管切	
127	83-33	栗玉	緑	半透	管切	
128	83-34	栗玉	緑	半透	管切	
129	83-35	栗玉	緑	透	管切	
130	83-36	栗玉	黄	不透	管切	
131	83-37	栗玉	黄	不透	管切	
132	83-38	栗玉	黄	不透*	管切	発泡気泡 多 石英砂粒融着
133	83-39	栗玉	黄	半透	管切	
134	83-40	栗玉	黄	透	管切	
135	83-41	栗玉	黄	透	管切	
136	83-42	栗玉	黄	透	管切	
137	83-43	栗玉	黄	透	管切	
138	83-45	栗玉	緑	半透	管切	
139	83-46	栗玉	緑	半透	管切	
140	83-47	栗玉	緑	半透	管切	
141	83-48	栗玉	緑	半透	管切	
142	83-49	栗玉	緑	半透	管切	
143	83-50	栗玉	水	半透	鍛型	
144	83-51	栗玉	水	透	鍛型	孔 三角形
145	83-52	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
146	83-53	栗玉	水	半透	管切	
147	83-54	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
148	83-55	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
149	83-56	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
150	83-57	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
151	83-58	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
152	83-59	栗玉	青	不透*	鍛型	発泡気泡 多 石英砂粒融着
153	83-60	栗玉	褐	半透	管切	
154	83-61	栗玉	緑	半透	管切	

第6表 玉類觀察表(3)

- \* 管切 次きあるいは引き抜ばしによって作られた原料となる管状カラスから切り離して栗玉を作る。内部する気泡が丸方向と平行となる。切り離し後、孔面を研磨して仕上げるものと、切削面を再熱して溶解して丸く仕上げるものがある。
- \* 鍛型 気泡が存在し、玉表面の半透明感が強調。基本的に厚板で厚の増減があり、天童山古墳においては閉放鍛型のみ、「不透」表記は、ガラス透光度としては「透明」に属するが、発泡気泡により見事な褐色「不透明」に見える個体を指す。ガラス表面の半数割合で内輪に気泡があるものが多い。
- \* 巻付 原材料カラスから、輪を回すか巻き取りながら作る。内部する気泡が孔方向に対して直角に向て、栗玉では巻き始めて巻き終り側が厚く、近く仕上がる。孔位置偏在は、玉厚不均等が特徴。天童山8号墳では、栗玉に巻付は見られず、管玉から再生されたとみられる小玉1点のみ。難観状に巻き取った痕跡を確認できる。

番号	実測番号	器種	出土位置	全長	幅	間など	特記事項
155	51-1	鉄鋸	8号埴玄室No.1	38.4	3.3	断面菱形	木質残存 袋部目釘残存
156	52-1	石突	8号埴玄室No.34	13.5	3		
157	55-1	鉄刀 斧口金具	8号埴玄室No.78	4.6			新が残存
158	54-1	鉄刀	8号埴玄室No.67	7.6	2.5	片開	
159	54-6	鉄刀	8号埴玄室No.79	6.8	2.1	—	一文字尻 目釘孔が残存
160	54-4	鉄刀	8号埴玄室No.8	4	2.5	—	
161	54-3	鉄刀	8号埴玄室No.122	3.9	2.8	—	
162	51-2	刀子	8号埴玄室No.49	13.5	2.1	—	木質残存 樹皮巻き 鞘部鹿角残存
163	51-3	小太刀	8号埴玄室No.60	21.1	2.5	両開	木質残存 付近から金製飾金具出土

第7表 鉄製品觀察表

番号	実測番号	型式	出土位置	全長(cm)	顎身	頭部	茎部	顎身闊	頭部闊	備考
164	63-3	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 170	12.4	6.6	3	5.3	角闊	棘闊	木質遺存
165	64-5	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 181	6	2.7	2.7	4.4	角闊	角闊	木質遺存
166	63-4	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 171	[9.3]	5.8	—	—	角闊	角闊	
167	64-3	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 177	11.5	4.3	—	4	角闊?	棘闊	木質遺存
168	62-5	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 163	13.9	7.5	2.1	4.3	角闊	棘闊	木質遺存
169	62-4	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 162	[11.2]	5.8	2.8	—	角闊	台形闊	
170	62-3	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 165	[7.8]	6.2	—	—	角闊	—	平造
171	63-2	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 169	[10.0]	—	2.8	—	角闊	角闊	
172	65-7	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1126	[12.3]	7.2	3	3.3	逆刺	角闊	木質遺存
173	63-1	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 165	14.4	5.5	2.1	—	逆刺	棘闊	木質遺存
174	64-4	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 180	[7.5]	4	2.4	—	逆刺	角闊	
175	62-6	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 164	[13.1]	6.1	2.5	—	逆刺	角闊	
176	65-5	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 121+117	13.9	6.5	1.8	5.4	斜め	角闊	
177	62-2	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 111	[9.9]	4.4	2.5	—	斜め	角闊	木質遺存
178	64-7	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1118	13	5.5	1.9	5.5	斜め	棘闊	
179	65-6	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1121-d	14.6	6	1.8	6.9	斜め	棘闊	
180	65-1	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1119	[11.5]	5.5	2.1	—	斜め	棘闊	
181	64-6	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1116	[9.8]	5.5	2	—	斜め	棘闊	
182	65-2	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1120	[10.0]	4.1	3.2	—	2段闊	棘闊	
183	64-2	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 175	[8.4]	4.2	2.5	—	角闊	棘闊	
184	65-4	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1121-b	10.2	4.1	1.9	—	斜め	棘闊	
185	63-5	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 172	11	4.1	3.2	3.7	2段闊	角闊	
186	65-3	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 1121-a	12.1	4.2	1.9	6.1	角闊	棘闊	木質遺存
187	64-1	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 174	11.3	3.4	2.9	5	逆刺	角闊	木質遺存
188	62-1	三角歯 (広根歯)	8号埴玄室 19	7.8	4.3	3.1	—	2段逆刺	角闊	
189	71-1	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 1102+34	[14.8]	1.9	8.5	—	角闊	台形	崩皮下地巻き
190	68-4	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 1109	[17.5]	2.3	10.7	—	角闊	角闊	
191	66-4	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 129+24	16.3	2	8.1	5.9	斜め	台形闊	崩皮下地巻き
192	68-1	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 198	[14.8]	1.7	8.5	—	角闊	台形闊	崩皮下地巻き
193	66-7	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 136+86	15.3	1.9	8.1	5.4	角闊	台形闊	崩皮下地巻き
194	67-3	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 192	[10.8]	1.7	8.2	—	角闊	台形闊	崩皮下地巻き
195	67-2	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 187+118	[13.8]	2	8.3	—	角闊	台形闊	崩皮下地巻き
196	72-4	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 123	[14.0]	2	9	—	角闊	台形闊	崩皮下地巻き
197	66-8	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 173	[12.7]	—	7.5	—	角闊	角闊	
198	66-6	三角歯 (長根歯)	8号埴玄室 132	[10.1]	—	8.5	—	角闊	台形闊	

第8表 鉄齒觀察表[1]

199	68-5	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i115+i23	16.3	2	5.7	—	角開	角開	樹皮下地巻き
200	66-5	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i30	[2.0]	6.8	—	—	角開	—	樹皮下地巻き
201	69-5	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i92	[11.1]	1.7	8.4	—	角開	台形開	
202	67-6	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i93	[10.3]	2	6.4	—	角開	台形開	
203	66-1	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i16	[12.8]	2	8.5	—	斜め	台形開	樹皮下地巻き
204	66-3	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i28	[9.8]	2	7.3	—	角開	—	
205	67-8	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i96	[8.8]	2	6.8	—	角開	—	
206	67-5	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i92	[10.8]	1.7	8.2	—	角開	角開	
207	70-9	長頭鱗	8号埴玄室 i99	[8.2]	2	9.6	—	—	台形開	
208	68-2	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i100	[7.3]	2	5.2	—	角開	—	
209	67-4	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i91	[9.6]	1.9	7.6	—	斜め	—	
210	68-3	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i101	[11.5]	2	8.7	—	角開	角開	
211	69-4	長頭鱗	8号埴玄室 i18+i15	[14.0]	—	8.5	5.5	—	台形開	
212	70-8	長頭鱗	8号埴玄室 i99	[13.0]	—	7.6	5.4	—	台形開	
213	71-4	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i105	[7.4]	1.9	5.4	—	角開	—	
214	76-7	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i31	[7.7]	1.9	8.7	—	角開	—	
215	77-7	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i95+i96	11.7	2	8.7	[1.0]	斜め	角開	
216	72-1	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i22+i13	[9.1]	2	[8.2]	—	角開	—	
217	71-6	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i108+20	[8.0]	2.1	[5.8]	—	角開	—	
218	69-7	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i22	[3.5]	1.9	[0.3]	—	角開	—	
219	70-1	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i37	[5.9]	2	[3.8]	—	角開	—	
220	70-2	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i41	[5.0]	2	[4.0]	—	角開	—	
221	67-1	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i68	11	2.4	[0.9]	—	角開	棘開	
222	71-3	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i104	[9.1]	2	[7.1]	—	角開	—	
223	70-7	三角鱗 (長頭鱗)	8号埴玄室 i97	[3.6]	1.9	[1.7]	—	角開	—	
224	69-3	長頭鱗	8号埴玄室 i17	[10.5]	—	[4.7]	5.8	—	台形開	樹皮下地巻き
225	72-5	長頭鱗	8号埴玄室 i125	[8.3]	—	[2.0]	6.3	—	角開	
226	72-3	長頭鱗	8号埴玄室 i68+③	8.3	—	2.4	5.3	—	角開	
227	76-3	長頭鱗	8号埴玄室 i23	[7.4]	—	[2.0]	5.4	—	棘開	
228	77-4	長頭鱗	8号埴玄室 i43	[8.7]	—	[3.0]	[4.7]	—	台形開	
229	70-5	長頭鱗	8号埴玄室 i90	[6.7]	—	[5.2]	[1.5]	—	角開	樹皮下地巻き
230	70-6	長頭鱗	8号埴玄室 i94	[5.6]	—	[5.2]	[0.7]	—	台形開?	樹皮下地巻き
231	69-1	長頭鱗	8号埴玄室 奥壁⑤	[3.5]	—	—	—	—	—	樹皮下地巻き
232	71-9	長頭鱗	8号埴玄室 i112	[5.0] [3.1]	—	—	—	—	—	樹皮下地巻き
233	76-1	長頭鱗	8号埴玄室 i105+i23	[6.8]	—	[6.8]	—	—	台形開	
234	76-5	長頭鱗	8号埴玄室 i26	[8.6]	—	[8.6]	—	—	—	

第9表 鉄獣觀察表(2)

235	77-7	長頭鑼	8号埴玄室 185 106	[4.2]	—	[3.2]	[1.0]	—	台形闊	
236	71-5	長頭鑼	8号埴玄室 106	[3.5]		[2.0]	[1.5]		台形闊	
237	72-7a	長頭鑼	8号埴玄室 26-2	[4.2]	—	[3.8]	—	—	—	
238	70-4	長頭鑼	8号埴玄室 189	[2.2]	—	—	[2.2]	—	—	樹皮下地巻き
239	72-7b	長頭鑼	8号埴玄室 26-1	[4.2]		[2.7]	[1.5]		台形闊	
240	72-8	長頭鑼	8号埴玄室 31	[4.2]	—	[2.5]	[1.7]	—	—	樹皮下地巻き
241	72-3	長頭鑼	8号埴玄室 1115+123	[5.4]	—	—	[5.4]	—	—	樹皮下地巻き
242	76-6	長頭鑼	8号埴玄室 127	[4.8]	—	—	[4.8]	—	—	
243	76-10	長頭鑼	8号埴玄室 135	[4.8]	—	—	[4.8]	—	—	樹皮下地巻き
244	77-2	長頭鑼	8号埴玄室 140	[4.7]	—	—	[4.7]	—	—	樹皮下地巻き
245	77-1	長頭鑼	8号埴玄室 138	[3.0]	—	[3.0]	—	—	—	
246	72-2	長頭鑼	8号埴玄室 1114	[3.0]	—	[3.0]	—	—	—	
247	78-9	長頭鑼	8号埴玄室 25-7	[6.8]	—	[6.8]	—	—	—	
248	76-9	長頭鑼	8号埴玄室 153附	[3.9]	—	[1.7]	[2.0]	—	角闊	
249	71-1	長頭鑼	8号埴玄室 121+134	[4.2]	—	—	[4.2]	—	—	
250	76-8	長頭鑼	8号埴玄室 133	[4.3]	—	[4.3]	—	—	樹皮下地巻き	
251	69-1	長頭鑼	8号埴玄室 6	[3.5]	—	—	[3.5]	—	—	樹皮下地巻き
252	77-10	長頭鑼	8号埴玄室 22	[2.8]	—	[2.8]	—	—	—	
253	78-5	長頭鑼	8号埴玄室 25-3	[3.0]	—	—	[3.0]	—	—	樹皮下地巻き
254	78-6	長頭鑼	8号埴玄室 25-4	[5.4]	—	—	[5.4]	—	—	樹皮下地巻き
255	78-7	長頭鑼	8号埴玄室 25-5	[4.4]	—	—	[4.4]	—	—	
256	22-6	長頭鑼	8号埴玄室 20-3	[4.5]	—	—	[4.5]	—	—	樹皮下地巻き
257	72-7	長頭鑼	8号埴玄室 20-2	[2.5]	—	—	[2.5]	—	—	樹皮下地巻き
258	78-11	両頭金具	8号埴玄室 25-9	[3.4]	筒径0.6	筒長2.1	頭部Φ0.4	—	—	笠部2弁
259	78-12	両頭金具	8号埴玄室 25-10	[3.5]	筒径0.7	筒長2.2	頭部Φ0.5	—	—	笠部2弁
260	73-8	両頭金具	8号埴玄室 19	[3.7]	筒径0.6	筒長2.3	頭部Φ0.5	—	—	笠部2弁
261	73-01	両頭金具	8号埴玄室 12	[2.7]	筒径0.7	筒長2.2	頭部Φ0.5	—	—	笠部2弁
262	53-6	鍾	8号埴玄室 7-2	[4.2]	—	—	—	—	—	刃身破片
263	77-5	鍾	8号埴玄室 150+51	[9.1]	—	—	—	—	—	木質遺存
264	54-8	鍾	8号埴玄室 16	[7.0]	—	—	—	—	—	
265	73-11	鍾	8号埴玄室 11	[5.7]	—	—	—	—	—	
266	53-3	刀子	8号埴玄室 146	[8.6]	—	—	[1.8]	—	—	
267	53-1	刀子	8号埴玄室 147	[8.1]	—	[5.8]	—	—	—	木質も残る目釘なし。
268	53-4	刀子	8号埴玄室 145	[5.3]	[5.3]	—	—	—	—	刃先のみ
269	53-5	刀子	8号埴玄室 113	[7.3]	—	—	[4.4]	—	—	笠部樹皮下地巻き・ 木質残存
270	53-7	刀子	8号埴玄室 13	[4.9]	[4.9]	—	—	—	—	

第10表 鉄鑼・工具類觀察表

271	78-1	刀子	8号埴玄室 168	[3.6]	[3.6]	-	-		木質遺存
272	54-5	刀子	8号埴玄室 15	[2.6]	-	-	-		木質遺存
273	54-2	刀子	8号埴玄室 12	[3.1]	-	-	[1.5]		
274	78-13	刀子	8号埴玄室 27-4	[3.0]	[3.0]	-	-		木質遺存
275	78-3	刀子	8号埴玄室 ③-4	[3.0]	-	-	-		
276	78-2	刀子	8号埴玄室 ③-3	[2.1]	[2.1]	-	-		
277	53-8	刀子	8号埴玄室 16	[2.0]	-	-	-		刀子切先
278	53-2	刀子	8号埴玄室 176	[6.0]	-	-	[4.4]		木質遺存
279	54-7	刀子	8号埴玄室 166	[8.5]	-	-	-		鉛平織り痕？木質遺存
280	78-4	刀子	8号埴玄室 25-1	[5.3]	-	-	[5.3]		
281	73-6	鉄釘	8号埴玄室 47	[3.3]	-	-	-	-	木質遺存
282	74-9	鉄釘	8号埴玄室 158	[2.8]	-	-	-	-	木質遺存
283	74-8	鉄釘	8号埴玄室 156	[2.6]	-	-	[2.6]	-	-
284	73-2	鉄釘	8号埴玄室 15	[8.2]	-	-	-	-	木質遺存
285	75-9	鉄釘	8号埴玄室 24-3	[2.6]	-	-	-	-	木質遺存
286	73-10	鉄釘	8号埴玄室 111	[5.1]	-	-	-	-	木質遺存
287	73-4	鉄釘	8号埴玄室 150+51	[4.9]	-	-	-	-	木質遺存
288	74-3	鉄釘	8号埴玄室 144	[8.9]	-	-	-	-	木質遺存
289	76-4	鉄釘	8号埴玄室	[4.9]	-	-	-	-	木質遺存
290	74-6	鉄釘	8号埴玄室 154	[3.7]	-	-	-	-	木質遺存
291	73-9	鉄釘	8号埴玄室 110	[5.1]	-	-	-	-	木質遺存
292	73-5	鉄釘	8号埴玄室 46	[3.9]	-	-	-	-	木質遺存
293	75-2	鉄釘	8号埴玄室 83	[6.3]	-	-	-	-	木質遺存
294	75-8	鉄釘	8号埴玄室 1124-①	[9.2]	-	-	-	-	
295	74-5	鉄釘	8号埴玄室 153	[7.0]	-	-	-	-	木質遺存
296	73-3	鉄釘	8号埴玄室 14	[5.3]	-	-	-	-	
297	74-4	鉄釘	8号埴玄室 148	[8.3]	-	-	-	-	木質遺存
298	75-4	鉄釘	8号埴玄室 1107	[9.0]	-	-	-	-	木質遺存
299	74-1	鉄釘	8号埴玄室 120	[4.3]	-	-	-	-	木質遺存
300	73-10	鉄釘	8号埴玄室 111	[5.1]	-	-	-	-	
301	75-3	鉄釘	8号埴玄室 184	[7.5]	-	-	-	-	木質遺存
302	73-7	鉄釘	8号埴玄室 48	8.3	-	-	-	-	木質遺存
303	74-7	鉄釘	8号埴玄室 155	[5.1]	-	-	-	-	
304	73-2	鉄釘	8号埴玄室 33	8.2	-	-	-	-	
305	75-5	鉄釘	8号埴玄室 1124-②	8.2	-	-	-	-	木質遺存
306	75-10	鉄釘	8号埴玄室 24-5	[3.1]	-	-	-	-	木質遺存

第11表 刀子・鉄釘觀察表

373	59-1	三角鑼	8号埴小石室Na.16	9.6	5.7	4	—	逆刺	棘闘	
374	59-2	三角鑼	8号埴小石室Na.17	8.5	5.7	3.4	—	逆刺	棘闘	
375	59-3	三角鑼	8号埴小石室18-a	10.1	7	4.2	—	逆刺	棘闘	
376	59-4	三角鑼	8号埴小石室18-b	9.1	5.3	4.4	—	逆刺	棘闘	
436	56-1	杏葉?	7号埴想定地	6.9	幅5.9	軸幅1.5	—	—	—	
437	56-2	刀子	7号埴想定地土坑墓?	10.6	幅1.3	—	[6.2]	—	角闘	鞘・柄部に木質残存
438	60-1	三角鑼	13号埴玄室S3	10.5	7.2	4.3	1.3	逆刺	角闘	
439	60-2	三角鑼	13号埴玄室S4	10.6	6.1	3.7	2.3	逆刺	角闘	
440	60-4	三角鑼	13号埴玄室S6	11.5	4.7	1.9	—	逆刺	角闘	
441	61-1	三角鑼	13号埴玄室S1	10.8	3.9	3.9	3.3	逆刺	角闘	
442	60-3	三角鑼	13号埴玄室S5	6.3	4.7	1.9	—	2段	—	
443	61-3	長頭鑼	13号埴玄室S8	9.2	—	[4.4]	0.9	—	角闘	
444	61-4	長頭鑼	13号埴玄室S7	15.5	—	8.2	7.3	—	台形	

〔凡例〕 [ ] は残存長を表す。  
出土位置のナンバーは取り上げ番号である。

第12表 鉄櫛・工具観察表









# V 保存処理について

三重県埋蔵文化財センター 大川 操

(財)元興寺文化財研究所 山岡奈美恵 植田 直見

## 1 はじめに

金属製品および有機質製品は長期間、土中に埋没していたり、常時一定水分が吸湿される環境下に置かれていたために錆化し、非常に脆くなっている。土中から取上げ後、そのまま大気中に放置しておくと錆化による変形・変質を起して、また乾燥によって形状崩壊してしまう恐れがあるので、将来にわたり錆化をより遅延させ、脆弱化した金属・有機質の強化措置が必要である。

天童山古墳群から出土した金属製品・有機質製品は、遺物取上げ後、1次洗浄と仮接合までの段階を県埋蔵文化財センターで、また以後の工程を(財)元興寺文化財研究所に委託して保存処理を実施した。

本章では、(財)元興寺文化財研究所とともに、保存処理の工程についての報告を行うこととする。

## 2 処理工程

### (1) 遺物の取り上げ

8号墳横穴式石室における鉄製品検出の報告を受け、取上げまでに記録作業等でかなりの期間を要することが予想されたため、特に有機質付着の遺物を中心に検出面の錆化防止としてアクリル樹脂(10%キシレン溶液)の塗布を行った。また有機質製品である琥珀製東玉においては、検出後の急速な乾燥によって簡便面での剥離・破損を防ぐ目的で、検出面の洗浄とアクリル樹脂(10%キシレン溶液)の塗布を行った。取上げに際しては、可能な限り土を除去した状態で鉄製品・各種材質の玉類ごとに番号を付して取り上げ、センター内において残りの土の除去作業を行った。

### (2) 脱水処理・仮接合

鉄製品表面の土や錆着した砂粒、また錆瘤をニッパー、メス、小型グラインダーを使用して除去した。この時点でX線透過撮影による形状確認を行ってい

ないため、鉢の目釘周辺や、鐵の逆刺・開部分は形状を損なう危険のある錆瘤がみられる場合、クリーニングを地金手前でやめ、養生をした。土を取り除いた後はエタノールで2回以上洗浄し、接合できるものについては仮接合を行った。折損による破片はシアノアクリレート系接着剤<sup>1</sup>で仮接合を行い、錆瘤等の除去中に剥離折損したものについては、アクリル樹脂(20%キシレン溶液)により接着復原・強化を行い、実測・写真等の記録作業の利便化を図った。また、脱水処理時に木質・樹皮状有機質の認められた製品については、有機質部分の洗浄を1回に留め、乾燥後にアクリル樹脂<sup>2</sup>(10%キシレン溶液)を塗布し、記録作業から処理委託までの間に、乾燥による破損のないよう養生を行った。これらの処置の後、保存処理委託のため遺物を搬出したが、この引渡し時に各々の製品について行った上記の養生処理を個別に確認し、また有機質の現状確認を行い、「打合書」として特記事項を委託・受託双方で交わしたうえで保存処理および分析を委託した。(大川)

保存処理報告書No.106 15点

保存処理報告書No.107 172点

### (3) 保存処理

#### a 鉄製品

##### ① 保存処理前調査

処理前の状態を写真で記録し、あわせてX線写真を撮影して状態の把握を行った。なお、撮影は以下の条件で実施した。

装置	X線透過試験装置 (フィリップス社) MG225
フィルム	Fuji X-ray film Ix100
増感紙	LF0.03
焦点フィルム間距離	100cm

## ② 前処置

木質部分について、処理中の欠損を防ぐためアクリル樹脂<sup>2</sup>（6%酢酸エチル溶液）を数回塗布して内部に浸透させた後、13%溶液を数回塗布して強化した。

## ③ 第1次クリーニング

表面に付着する土や錆などをニッパー、メス、エアブラシ<sup>3</sup>、小型グラインダー<sup>4</sup>等を用いて除去した。

特に脆弱な箇所や有機質の付着している箇所等についてはこの時点で無理にとらず、樹脂含浸を行って強化した後、再度クリーニングを行うこととした。

## ④ 保護材の取り付け（養生）

ポリエチレン製のネット<sup>5</sup>とステンレス製の薄板を取り付けて養生をした。

## ⑤ 洗浄

有機溶剤（アルコール・キシレン・酢酸エチルの混合液）に浸漬して表面に付着する不純物や油分を除去した。

## ⑥ 脱塩処理

鉄錆・鐵錠等の鉄製品についてはセスキカーボネイト法による脱塩を行った。この方法は、弱アルカリ性であるセスキカーボネイト（炭酸ナトリウムと炭酸水素ナトリウムの混合物）0.5%水溶液中に遺物を浸漬し、錆の原因となる塩化物イオンを除去する方法である。1週間に1回の割合で溶液中の塩素濃度を測定し、新しい溶液に交換した。処理には鉄錆155や石突156は約3ヶ月、その他は約4ヶ月を要した。

## ⑦ 樹脂含浸

遺物強化と防錆のために、フッ素系アクリル樹脂<sup>6</sup>（20%ナフサ液）による減圧含浸を1回実施した。

## ⑧ 第2次クリーニング

第1次クリーニングで除去出来ていなかった錆等の除去を行った。

## ⑨ 樹脂含浸

前述の方法を2回実施した。

## ⑩ 樹脂塗布

外気との接触を少なくして防錆効果を強めるために、含浸時の2倍に薄めた樹脂を2回塗布した。

## ⑪ 接合・復原

シアノアクリレート系接着剤<sup>7</sup>、エポキシ系接着剤<sup>8</sup>を用いて接合した。また、空隙部分や欠損部にエポキシ系樹脂<sup>8,9</sup>による補填を行った。

## ⑫ 樹脂塗布

外気との接触を少なくして防錆効果を強めるために、含浸時の2倍に薄めた樹脂を1回塗布した。

## ⑬ 彩色

復原部には水溶性アクリル絵具<sup>10</sup>を用い、遺物本体と違和感のない程度に補彩を施した。

## ⑭ 処理後調査

上記の工程が終了した後、一定期間遺物の経過観察を行い、異常が認められなかつたので写真撮影による処理後の記録を行つた。

## b 鋼製品

### ① 保存処理前調査

処理前の状態を写真で記録し、あわせてX線写真を撮影して状態の把握を行つた。なお、撮影は以下の条件で実施した。

装置	X線透過試験装置 (フィリップス社) MG225
フィルム	Fuji X-ray film Ix100
増感紙	LF0.03
焦点フィルム間距離	100cm

## ② 第1次クリーニング

表面に付着する土や緑青錆を、メスや竹串、筆、電磁棒等をもちいて除去した。鍍金面上の緑青錆は顕微鏡を使って表面に傷をつけないよう慎重に除去した。ただし、脆弱な箇所については無理に取らず、樹脂含浸を行つて強化させた後、再度クリーニングを行うこととした。

## ③ BTA（ベンゾトリアゾール）処理

BTA処理を行つた。これは、BTAによって銅錆を安定化させることにより錆の進行を抑える方法である。BTA 3%エタノール溶液に浸漬し、減圧含浸を行つた。

## ④ 樹脂含浸

遺物強化と防錆のために、フッ素系アクリル樹脂<sup>6</sup>（20%ナフサ液）による減圧含浸を3回実施した。

## ⑤ 第2次クリーニング

第1次クリーニングで除去しきれなかつた錆等の除去を行つた。

#### ⑥ 樹脂塗布

外気との接触を少なくして防錆効果を強めるために、含浸時の2倍に薄めた樹脂を2回塗布した。

#### ⑦ 接合・復原

シアノアクリレート系接着剤<sup>7</sup>、エポキシ系接着剤<sup>8</sup>を用いて接合した。また、空隙部分や欠損部にはエポキシ系樹脂<sup>8·9</sup>による補填を行った。

#### ⑧ 樹脂塗布

外気との接触を少なくして防錆効果を強めるために、含浸時の2倍に薄めた樹脂を2回塗布した。

#### ⑨ 彩色

復元部には水溶性アクリル絵具<sup>10</sup>を用い、遺物本体と違和感のない程度に補彩を施した。

#### ⑩ 処理後調査

上記の工程が終了した後、一定期間遺物の経過観察を行い、異常が認められなかつたので写真撮影による処理後の記録を行つた。  
(山岡)

#### c 金製刀装具

##### 〈洗浄・クリーニング〉

取上げ時には、帯状・倒卵形いずれの製品も団子状にまとまつて出土したが、2は刀子163の刀身下からやや折れ曲がりながらも比較的原形に近い帯状で出土した。厚みが極めて薄く、わずかな力で容易に折れ曲がつてしまつたため、エタノールでの洗浄には困難を極めた。帯状製品には連続する唐草状の浮彫り模様が確認できたが、下地となる軸体を失つていて、表面についた泥土を筆で擦り落とす洗浄ができなかつた。模様の形状を損なわぬよう面相筆で撫でるだけの洗浄しかできなかつたため、多少泥土を残すこととなつた。この洗浄時に、模様の発見とともに、製品の端に目釘孔状の小孔が見られるものがあること、また裏面と思われる模様の凹み部分で、帯状製品の長軸方向に対して斜行方向に、下地となつた木製品の木目と思われる筋が確認できた。また、倒卵形の1については、極めて著しく丸まつておらず、伸展に困難を極めた。製品を原形に伸ばす際に浮彫り模様を潰してしまつた部分もあり、筆を伸ばしては模様を復原するため凹んだ模様を裏面から押し戻す作業を一模様ごとに繰り返し、原形復原を行つた。このため、この倒卵形刀装具についても木地の木目痕跡がみられたものの、これを残すこと

ができた箇所は極めて少なくなった。帯状・倒卵形いずれの製品についてもかなりの金を含有することが予想されたため、洗浄以上の保存処理は行っていない。この5点の金製刀装具については各1点ずつ蛍光X線分析を行つておらず、その結果は、後述の分析結果報告書を参照されたい。  
(大川)

自然科学分析報告書No96

#### d 有機質製品（琥珀製環玉）

##### 〈取上げ〉

計4点出土した琥珀製環玉は、検出から取上げまでにかなりの時間、石室内に留め置かれることが予想された。この間、雨水による吸湿と乾燥を繰り返すこと、検出時に負つた傷や節理面から剥離欠損する可能性があつたため、鉄製品同様、検出面にアクリル樹脂<sup>2</sup>（10%キシレン溶液）を塗布し、破損防止の養生を行つた。

##### 〈1次洗浄〉

取上げ後、接地面に付着した土の除去・洗浄を行つた。洗浄には精製水を使用し、洗浄の後乾燥も比較的時間をかけて乾燥をさせた。また、検出時の養生で樹脂を塗布した結果、接地面からの吸湿により、検出面が多少白化したが、この部分をキシレンにより再洗浄した。その結果、節理面に多少白化部分を残すもののほぼ復原できた。

琥珀製品については、これまで保存処理を行つた実績がなく、過去20~10年前のいずれの出土例においても常温保管で破損をきたしている。このため、今回出土の4点についても現状維持が困難であることが予想されたため、保存処理としてアクリル樹脂合浸による強化処理を委託して実施した。また、過去の出土例の破損原因の一つとして、琥珀の産地に起因する要素がないかを確認するため、今回出土の天童山古墳例と県埋文センターで保管する過去に出土した琥珀製品計10例についてフーリエ変換型赤外分光分析と、内3例については熱分析（熱重量測定・示差熱分析）も行い、産地同定のデータ収集を試みた。これについては、後述の分析結果報告書を参照されたい。  
(大川)

自然科学分析報告書No75 琥珀玉類の科学分析

#### 〈保存処理〉

琥珀は松柏科の植物から流れ出た樹脂が化石化したものである。出土琥珀は長い年月、地中に埋もれていたためその間に徐々に劣化が進んでいると考えられる。そのため発掘された後、劣化状態によっては崩壊する可能性もある。また、琥珀は、産地によって性質が異なる場合があるため、事前の詳しい調査が必要である。

処理はアクリル樹脂<sup>2</sup>含浸による強化を行った後、破片を接着し復原した。

##### ① 保存処理前調査

処理前の写真撮影、続いて赤外分光分析による琥珀かどうかの確認および産地同定を行った。さらに通常の処理方法で使用するキシレンに対する溶解性を調べた。

また、全4点のうち3点には取り上げ時に強化のために樹脂（アクリル樹脂）が塗布された形跡があり、表面の一部に白い膜状の付着物が見られた。

##### ② クリーニング

今回の琥珀は比較的劣化が進行していなかったため、樹脂含浸後に綿棒にイオン交換水を含ませ、表面の土壌成分を除去した。表面の白い付着物は綿棒にキシレンを合ませたもので除去したが、完全には取り除くことはできなかった。

##### ③ 樹脂含浸

表面の一部が欠損し、樹脂に含浸するとその部分から崩壊する恐れがあったため、アクリル樹脂<sup>2</sup>（15%キシレン溶液）をスポイドで滴下し内部に染み込ませた。キシレンを蒸発させ樹脂を固化させた後、再度同様の操作を行った。

##### ④ 接着・復原

外れかけた部分や破片をアクリル樹脂<sup>2</sup>（約50%キシレン溶液）で接着した。

##### ⑤ 処理後調査

処理後の写真撮影を行った。

#### 〈保管について〉

アクリル樹脂を含浸しているため、温湿度の変化に対しては比較的影響を受けにくい。しかし、急激な温度や湿度の変化は遺物や樹脂を劣化させる原因となる。また、琥珀は紫外線によって劣化することがわかっている。そのため、できるだけ光の当たら

ない環境変化の少ない場所で保管することが望ましい。

（植田）

保存処理報告書No.107

### 3 おわりに

以上のような工程で保存処理が行なわれ、鉄製品においては出土時とは比較にならないほど、形状が本来の姿に近づき理解し易くなると同時に、保管・展示に耐え得る強度を備えて現状を維持することが可能となった。また琥珀製品についても、保存処理を行なうことにより安定した状態となった。しかし、今度は外気入換による収蔵庫保管ではなく温湿度管理された環境変化の少ない場所で収蔵・保管する必要がある。将来的な経年変化による劣化を予測して保存処理（強化処理）を施し、展示・公開に耐え得る資料化を図ることが不可欠である。

しかし、保存処理を行なえば結晶化や変形、崩壊を完全に防ぐ止められるという訳ではなく、その速度を緩やかにする措置であるのだということを忘れてはならない。処理後の取扱いが悪ければ剥離・結晶化等の進行は促進されてしまうため、遺物に悪影響を及ぼす急激な温度の変化や湿度の上昇がないよう、定期的な保管環境のチェックと遺物の観察を行い、展示・保管環境には充分な注意を払う必要がある。

（山岡・大川）

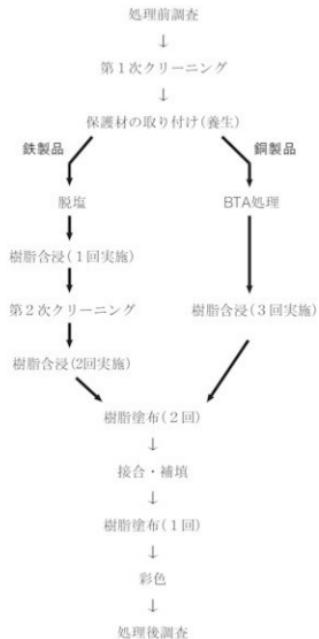
#### 『註』

- 1 セメダインC セメダイン社
- 2 バラロイドDB-72 Room&Hass社
- 3 パワープラスト50N 岡本油研
- 4 ミニター ミニター社
- 5 ダイオネット ダイオ化成
- 6 Vフロン液マイルドクリヤ 脳大日本塗料
- 7 セメダイン3000RS セメダイン社
- 8 セメダインハイスター セメダイン社
- 9 アラルダイタXN-6504 チバ・スペシャルティケミカルズ㈱
- 10 アクリラ ホルベイン社

#### 《参考文献》

- 増澤文武・石川恵美『園子塚九号墳出土遺物保存処理報告書』  
1994年 袋井市教育委員会・(財)元興寺文化財研究所  
尾崎誠「岸和田市風吹山古墳出土金属製品の保存処理」『創立30周年記念誌 1967~1997』 1997年 (財)元興寺文化財研究所  
馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊『文化財科学の事典』2003年

#### 保存処理工程



# VI 分析報告

## 1 虹珀玉類の科学分析

(財) 元興寺文化財研究所 植田 直見

### (1) 分析試料

第17表に三重県下の古墳から出土した琥珀玉の出土古墳名・形状・出土時期などを示した。なお、分

第17表 分析試料一覧

試料番号	出土古墳	主体部	玉の種類	時期	FT-IR	熱分析
1	上椎ノ木1号墳		勾玉	4世紀末	○	
2	井田川茶臼山古墳	2号石棺	切子玉	5c後半～6c前	○	
3	井田川茶臼山古墳	2号石棺	切子玉	5c後半～6c前	○	
4	井田川茶臼山古墳	2号石棺	切子玉	5c後半～6c前	○	○
5	大塚C-1号墳	第1主体	切子玉	6c前	○	○
6	河田古墳群B-3号墳	1主体	棗玉	6c前半～7c初	○	
7	天童山古墳8号墳	横穴式石室	棗玉	6c後～7c初	○	○
8	天童山古墳8号墳	横穴式石室	棗玉	6c後～7c初	○	
9	天童山古墳8号墳	横穴式石室	棗玉	6c後～7c初	○	
10	天童山古墳8号墳	横穴式石室	棗玉	6c後～7c初	○	

### (2) 分析目的

古墳から出土した勾玉および棗玉が、琥珀であるかどうかの確認と、産地同定を行う。

### (3) 使用機器および原理

測定はフーリエ変換型赤外分光光度計(FT-IR)(日本電子㈱製 JIR-6000)と熱分析装置(DTA・TGA)(㈱島津製作所製 DTG-60)を使用した。FT-IRによる分析では、試料に赤外線を照射することにより得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定することができる。また、DTA・TGAは試料に熱を加え、得られる質量変化から蒸発・気化温度、また酸化・熱分解などの化学変化を知ることができる熱重量測定(TGA)と、

試料の融解などの状態の変化や化学反応の温度を知ることができる示差熱分析(DTA)があり、これらから試料の熱に対する挙動を調べることができる。熱分析は今回新たに導入した分析方法でFT-IRによる分析結果と併用することによりさらに精度の高い分析が行なえる。

### (4) 分析方法および条件

FT-IR分析は試料を臭化カリウム(KBr)と混合、圧縮し錠剤を作製して行うKBr錠剤法により測定を行った。測定条件は分解能  $2\text{ cm}^{-1}$ 、検出器としてTGSを用いた。

DTA・TGA分析は試料を粉状に粉碎したものを作成し、金セルに入れ、毎分100mLで空気を流しながら毎分20°C

で昇温させ、その時の重量変化と熱量変化を測定した。

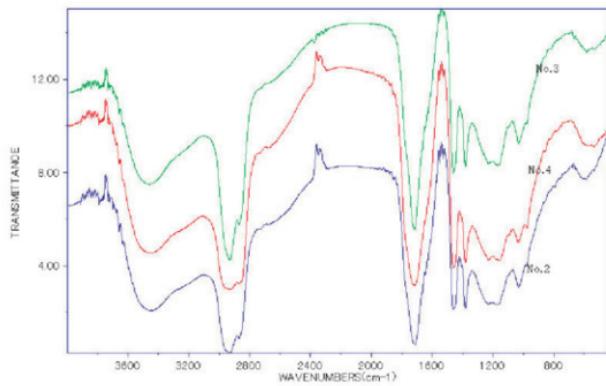
#### (5) 結果および考察

FT-IR分析において、劣化していない部分の赤外吸収スペクトルが得られればその産地同定は可能である。しかし、劣化が激しいと、全体的に吸収はブロードになり特徴的な吸収が消失し、新たに異なった位置にピークが表れることがある。分析は堅くてより健全な部分を選んでFT-IRによる測定を行った。その結果、10点とも $3500\text{~}2800$ 、 $1710$ 、 $1500\text{~}800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収から琥珀であることが確認できた(図37、38、39)。次に、 $1800\text{~}800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収位置および強度より、産地の判明している標準となる琥珀から得られたスペクトルと比較し、産地同定を試みた(図40)。なお、No.5 大塚C-1号墳出土琥珀のスペクトルは他の試料と幾分異なる吸収位置・強度を示した。これは試料に土壤成分が混入していたが細片であり全てを取り除くことができなかつたため、1100、800、600、500cm $^{-1}$ 付近に土壤成分に由来する吸収が現れた。以上より今回分析した試料は、 $1300\text{~}800\text{cm}^{-1}$ の吸収位置および強度が久慈市産およびいわき市産の琥珀と類似することがわかった。一方、鏡子産の琥珀とは $1000\text{~}1200\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収位置および強度が異なる結果が得られた(図40)。さらに、今回導入した熱分析の結果では、分析した3点のDTA曲線はほぼ同じ位置・強度のピークであることがわかった。

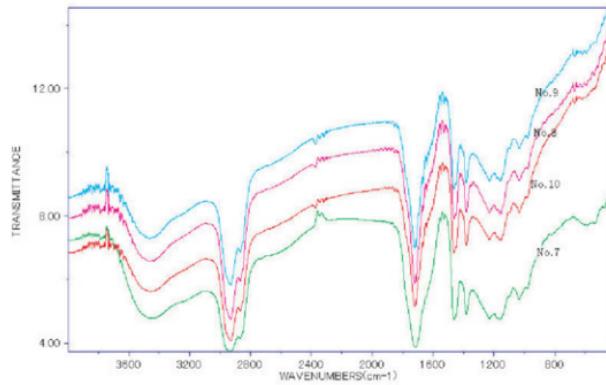
そのため、これらは同一産地であり、標準琥珀の熱分析結果と比較すると久慈およびいわき産琥珀と比較的近い挙動を示すことがわかった(図42)。

今回分析した琥珀の産出地はいずれも久慈市およびいわき市産の可能性が高いと推測できた。しかし、久慈市産およびいわき市産琥珀はFT-IRおよび熱分析とも非常によく似た結果であるため、分析結果のみではどちらであるかは断定できなかった。以上より、現時点ではこの琥珀は久慈市産およびいわき市産に近似していることがわかった。しかし、出土琥珀は劣化状態が様々でそれによってFT-IR分析では吸収位置や強度が変化する。また、熱分析でもDTA曲線に変化が認められる。そのため、劣化が進行したものは産地同定が不可能になる場合がある。さらに、少量産地など標準試料については全てのデータを収集しておらず断定はできなかった。

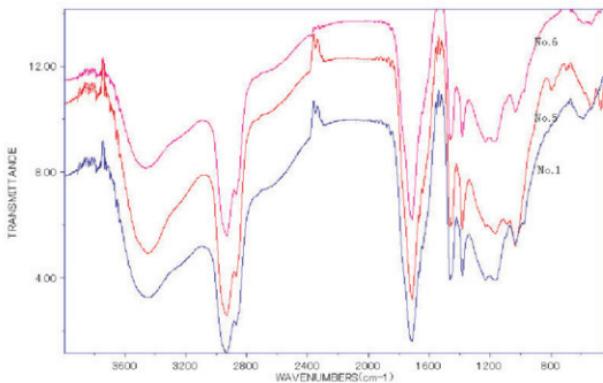
琥珀の産地は国内でも、少量産出地も含めると10ヶ所以上もある。また国外でも各地で産出する。そのなかで、主産地の標準琥珀のFT-IR分析はすでに報告されている。さらに、新たに熱分析を実施し、両者の分析結果を検討することでより精度の高い産地同定が可能になるとえた。今後は、少量産地の分析も順次実施し、より多くの標準となる分析値を収集するとともに、複数の分析法を併用することで様々な状態の琥珀の産地同定が可能になると考える。



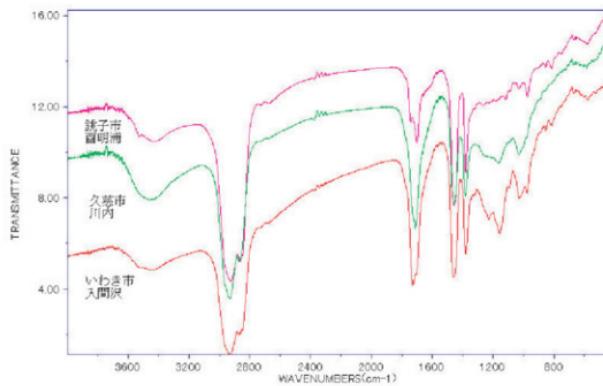
第37図 井田川茶臼山古墳出土琥珀の赤外吸収スペクトル



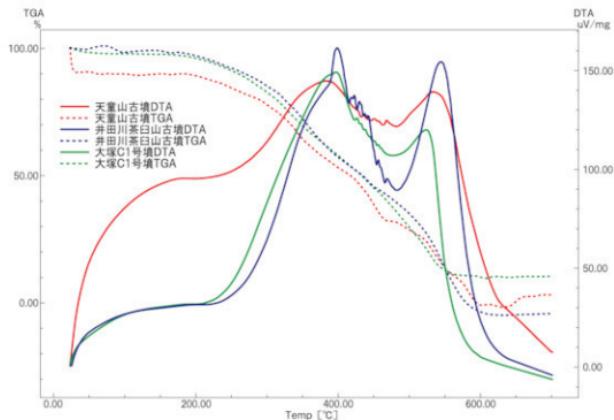
第38図 天童山古墳8号墳出土琥珀の赤外吸収スペクトル



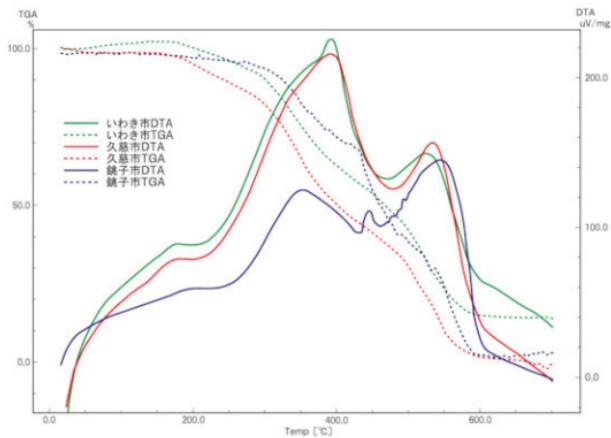
第39図 出土琥珀の赤外吸収スペクトル（上椎ノ木1号墳、大塚C-1号墳、河田古墳群B-3号墳）



第40図 標準琥珀の赤外吸収スペクトル



第41図 出土琥珀の熱分析



第42図 標準琥珀の熱分析

## 2 耳環・金製刀装具の科学分析

財元興寺文化財研究所 川本 耕三

同

山岡奈美恵

### (1) 分析試料

天童山8号墳横穴式石室出土の耳環6~15と金製刀装具1~5について自然科学的手法による分析を行った。

### (2) 使用機器・分析方法および条件

分析・測定方法と使用した機器等は以下のとおりである。

#### 寸法測定・重量測定（耳環のみ）

電子天秤：PB4002-S メトラー社製

#### 顕微鏡観察（耳環のみ）

実体顕微鏡：Leica社製MZ16

デジタルカメラ：Victor社製GC-X3 にて撮影

#### 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）

SEA5230：セイコーワンスツルメンツ㈱製

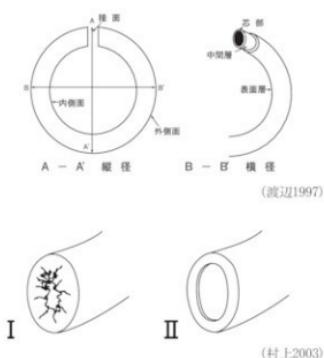
試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより、元素を同定する。以下の条件で分析した。

- ・励起用X線管：Mo（モリブデン）

- ・管電圧：50kV

- ・コリメータ：0.1mm φ

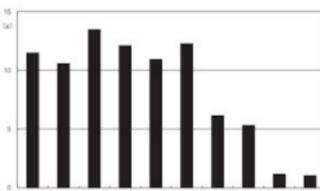
- ・測定時間：300秒



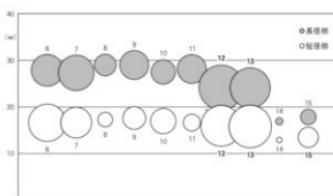
第43図 耳環の構造と耳環接面の形態

第18表 耳環の重量と寸法

報告No.	重量 [g]	長径外寸 [cm]	長径内寸 [cm]	短径外寸 [cm]	短径内寸 [cm]
6	11.46	29.31	26.44	18.24	14.88
7	10.56	28.97	25.74	18.04	15.30
8	13.45	30.08	28.08	17.99	16.66
9	12.12	30.37	27.73	18.70	16.65
10	10.95	28.72	26.52	18.20	15.89
11	12.29	29.51	26.87	17.44	15.91
12	6.14	26.28	22.26	17.87	14.25
13	5.32	25.98	22.39	17.85	14.06
14	1.12	17.32	16.61	13.21	12.71
15	0.99	18.59	17.17	14.55	12.67



第44図 耳環の重量



第45図 耳環の寸法

### (3) 耳環の結果と考察

- a 寸法・重量 寸法、重量測定結果を表1および図1・2に示す。10個の耳環は見た目の形状より、3グループに分類が可能であるが、測定結果をみるとさらに細かく5グループに分類することができる。その組み合わせは、6と11、7と10、8と9、12と13、14と15である。
- b 顕微鏡観察 接面の顕微鏡写真を写真図版58に示す。その形状から4タイプに分類することができる。なお、8は接面が鍍着しているため観察を行えなかった。
- 6, 7, 10, 11 側面の端部を、ひだを作りながら芯部に沿わせてたたみ込んで仕上げられている。古墳時代の耳環製作に最も一般的に使用されていた技法である。
- 8, 9 接面が鍍着していたり側面が剥離していたりと残存状態が良好ではなかったため、充分な観察を行えておらず、接面の仕上げ方を確認できなかつた。
- 12, 13 前述のように「ひだ」を作らずに、側面端部は折り曲げただけの仕上がりである。接面の地しきか覆われておらず中央部分（緑青鉛の部分）が大きく開いている。接面の仕上げ方の技法として、側面端部を折り曲げた後、その上に薄い板を蓋のように被せる技法があり、12と13の接面中央部に本来、蓋のような薄い銀板が被せられていた可能性が考えられる。
- 14, 15 切断しただけの状態で、側面と芯部との差がないことから單一材（無垢）であると考えられる。
- c 萤光X線分析 分析ポイント（A, B地点）と分析結果を第46～48図に示す。含有元素とそのスペクトルのピークの特徴から次の5グループに分類することができる。
- 6, 11 銅（Cu）と銀（Ag）を検出したことから、銅芯に銀を巻いて作られていると考えられる。
- 7, 10 銅（Cu）、銀（Ag）の他、微量の金（Au）や水銀（Hg）などが検出されている。銅芯に銀を巻いて作られていると考えられるが、金が銀上層の鍍金であるか銀中の不純物であるかは不明である。
- 8, 9 銅（Cu）、銀（Ag）の他、鉄（Fe）、ヒ素（As）等が検出されている。銅芯に銀を巻いて作られて

ると考えられるが、遺物の劣化が著しく判然としない。鉄やヒ素は鉛や土中の成分であると考えられる。

12, 13 表面からは銀（Ag）と金（Au）が、その下層からは銀、銅（Cu）、臭素（Br）等が検出されている。金が多く存在することから、銅芯に銀を巻き、さらに鍍金または貼金を施していることが考えられる。また、体積に対して比較的軽量なので、内部に空洞を持つ可能性がある。

14, 15 主成分である銀（Ag）の他に微量の臭素（Br）、水銀（Hg）を検出した。臭素は銀が劣化して生成した臭化銀に由来するものだと考えられる。水銀の由来は不明である。

d まとめ 接面の顕微鏡観察では4グループに分類されたが、寸法・重量測定および螢光X線分析において、同様の組み合わせで5つのグループに分類されたこと、その組み合わせは顕微鏡観察結果と共通であることから、天童山8号墳出土の耳環10点は以下のようなセット関係で構成されていると考えられる。

6・11 断面が円形で銅芯銀板貼のもの。

7・10 断面が円形で銅芯銀板貼のもの。螢光X線分析において6・11よりも金（Au）の含有率が高いことから、表面に鍍金が施されていた可能性が考えられる。

8・9 断面が円形で銅芯銀板貼と推定されるもの。表層の劣化が激しくわずかしか残存していない。

12・13 断面が六角形で銅芯銀板貼のもの。寸法のわりに重量が軽いことから、中空である可能性が考えられる。

14・15 断面が円形で銀製無垢のもの。最も細身で小型の耳環である。

#### (4) 金製刀釘具の結果と考察

螢光X線分析結果を第48・49図に示す。5点とも金（Au）が主成分で、微量の銀（Ag）と銅（Cu）を含む。金・銀・銅の含有比率はいずれも似ている。鉄（Fe）のピーク値に多少のばらつきが見られるが、これは土中の成分や他の遺物の鉄鉛の影響を受けているものと思われる。

#### 【参考文献】

渡辺智恵美「耳環小考」『創立30周年記念誌1967～1997年』1997年（財）元興寺文化財研究所



報告No. 6



報告No. 7



報告No. 10



報告No. 11



報告No. 12



報告No. 13



報告No. 14



報告No. 15



報告No. 9

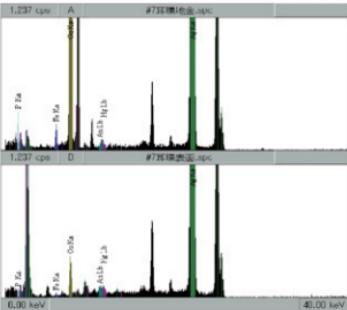
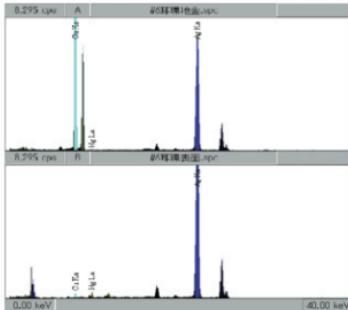
図版58 耳環接面の拡大写真



耳環 6



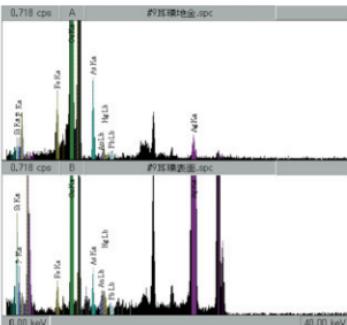
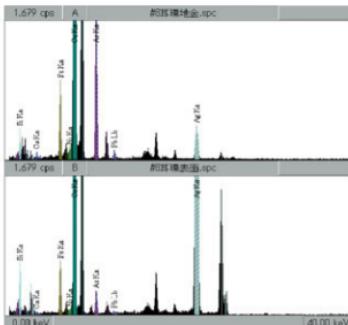
耳環 7



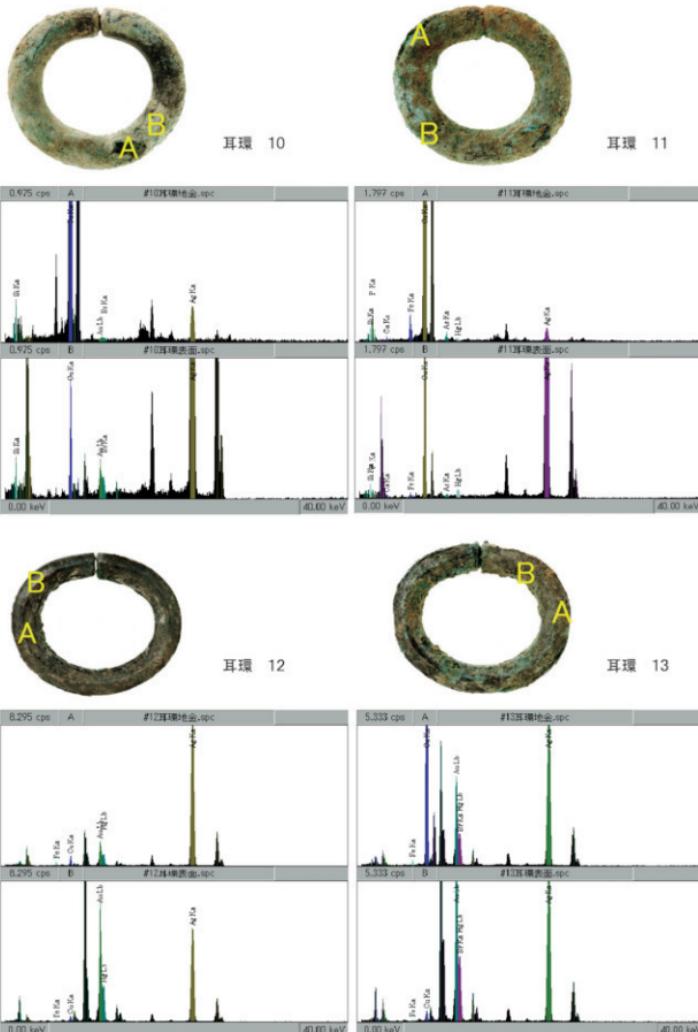
耳環 8



耳環 9



第46図 蛍光X線分析結果(1)



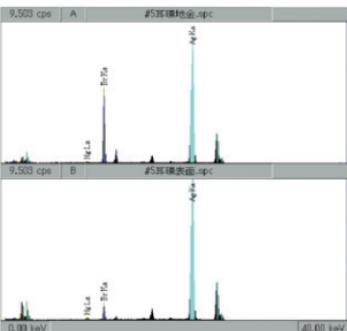
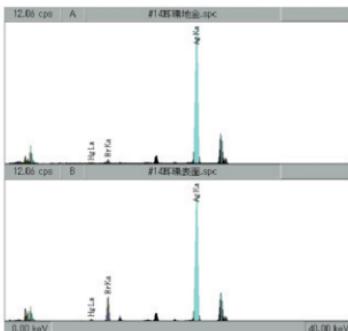
第47図 蛍光X線分析結果(2)



耳環 14



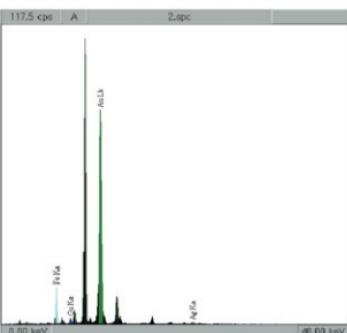
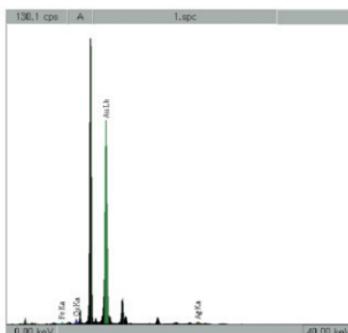
耳環 15



金製刀裝具 1



金製刀裝具 2



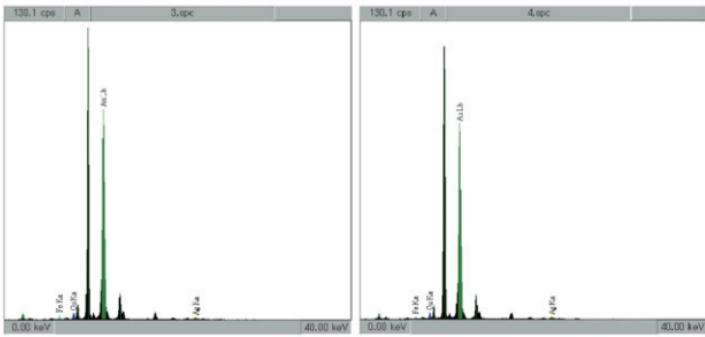
第48図 蛍光X線分析結果(3)



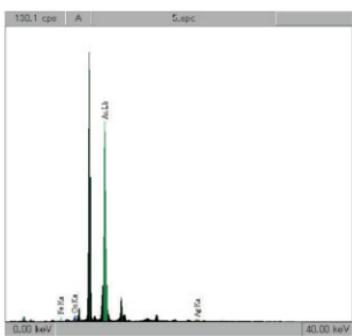
金製刀装具 3



金製刀装具 4



金製刀装具 5



第49図 蛍光X線分析結果(4)

### 3 天童山8号墳出土ガラス製玉類の分析

三重県埋蔵文化財センター 大川 操

#### (1) はじめに

天童山8号墳横穴式石室からは、水晶製切子玉、碧玉製管玉、瑪瑙（玉髓）製丸玉、琥珀製東玉、ガラス製小玉、栗玉と、各種材質・形状の異なる玉類が出土した。この中で、ガラス製玉類は、色調ではコバルト・紺・青・水・緑・黄・褐の7色、透明度では透明・半透明・不透明の3種に分けられる。この色調ならびに透明度に加え、製造技法としては管切・鋲型・巻付の3技法が観察できる。

ここでは、天童山8号墳から出土した各種・各色の玉類を、ガラス種別ならびに発色成分を特定することを目的として蛍光X線分析を試み、その結果をデータに基づき報告する。

#### (2) 分析方法・使用機器・分析条件

肉眼および实体顯微鏡観察で分類できる色調と透明度から分類される個体20点について、蛍光X線分析による定性分析（含有元素）・定量分析（元素含有量・簡易計測）を、すべて非破壊により実施した。減圧下で個体表面へX線を照射し、このとき試料から放出される、蛍光X線を検出して酸化物の含有データを得た。

分析に使用した機器ならびに条件は下記による。

使用機器 エネルギー分散型蛍光X線分析装置

EDAX EAGLE II -XXL (NR)

EDAX INC. 製

分析条件 X線管球：Cr（クロム）

・管電圧：20kV

・照射領域：100 μm

・測定時間：200秒

#### (3) 分析結果

コバルト半透明／巻付48 安定剤として添加された酸化カルシウムの値が突出する。融剤として酸化カリウムを用い、発色には酸化鉄・酸化マンガンが関与しているものと考えられる。

コバルト半透明／管切49 融剤の酸化カリウム値が突出する一例である。発色には48同様、酸化マンガン・酸化鉄が影響を与えていると思われる。

紫紺半透明／管切54 酸化カリウム値が突出する。

酸化マンガン・酸化鉄が主として着色に関与したものであろう。

紫紺不透明／鋲型107 酸化カリウムが融剤とされる。酸化マンガン・酸化鉄が主となるが、酸化チタンの関与、微量の酸化銅も発色に関与していようか。

紺半透明／管切112 酸化カリウム値が突出する。発色には酸化マンガン・酸化鉄が主となり、少量の酸化チタンまた微量の酸化銅が関与する。ごく微量ではあるが、酸化鉛も検出される。

青透明／管切114 酸化カリウムと酸化カルシウム値がほぼ同比率で含まれる。発色には酸化マンガン・酸化鉄が主となり、少量の酸化チタン・酸化銅が関与していようか。

青透明／鋲型111 酸化カリウムと酸化カルシウム値がほぼ同比率で含まれる。酸化マンガン・酸化鉄が主となるが、次いで酸化チタン値が高く検出された。

青不透明／鋲型81 酸化カルシウム値が酸化カリウムを上回る。酸化鉄が主として発色に起因するが、酸化マンガン・酸化チタンがこれに続き、また微量の酸化銅も関与していようか。

水色透明／管切55 酸化カルシウム値が酸化カリウムを上回る。酸化鉄・酸化チタンが主として発色に寄与しており、微量の酸化マンガン・酸化銅が同比率で検出される。

水色透明／管切65 酸化カリウム値が突出する。発色は酸化銅が主体となり、微量の酸化鉄・酸化マンガン・酸化チタンが影響しているものと考えられる。

水色半透明／管切66 酸化カルシウム値が酸化カリウムを上回る。酸化鉄・酸化銅・酸化チタンが主として発色に寄与し、微量の酸化マンガン・酸化鉛が含まれる。

水色半透明／管切98 酸化カリウムが突出するが次いで酸化カルシウム値も高い。発色は酸化銅・酸化マンガン・酸化鉄が主となり、酸化鉛が微量に含まれる。

水色半透明／管切118 酸化カリウムと酸化カルシウム

ム値がほぼ同比率で含まれる。酸化鉄に次いで酸化マンガン、少量の酸化チタン・酸化銅が着色に関与する。

**緑半透明／管切95** 酸化カルシウム値が突出する。酸化カリウムを融剤とし、酸化鉄が発色の主因となり酸化銅、酸化チタン・酸化マンガンが影響を与える。また発色要因金属よりも高い値の酸化鉛が検出されたことが注目できる。

**緑半透明／管切56** 酸化カリウム値が突出する。鉄が主となるが、酸化チタンがこれに続き、酸化マンガン・酸化銅が少量みられる。

**緑透明／管切70** 酸化カルシウム値が突出する。発色には酸化鉄が主として関与し、酸化チタン・酸化マンガン・酸化銅が少量認められる。

**緑半透明／管切125** 酸化カルシウム値が酸化カリウムを上回る。発色要因としては、酸化鉄が主として働き、酸化銅・酸化チタンが少量検出される。また、酸化鉛が発色に関与する金属とほぼ同率で検出されることも、注目できよう。

**黄不透明／管切130** 酸化カルシウム値が酸化カリウムを上回る。酸化鉄が主因、酸化マンガン、酸化チタンが次いで発色に関与しているようか。酸化鉛が10%を超えて含まれることが特徴である。

**黄透明／管切137** 酸化カルシウム値が突出する。酸化鉄が大きい値を占め、酸化マンガン・酸化チタンが少量、酸化銅がごく微量にみられる。酸化鉛も微量に含まれる。

**褐不透明／管切131** 酸化カルシウム値が酸化カリウムを上回る。酸化銅を主因とする銅赤ガラスにあたるものとみられる。酸化鉄・酸化マンガン・酸化チタンも含まれ、少量の酸化鉛も検出される。

#### (4)まとめ

須恵器でみるとTK43～TK209型式の時期幅があり、ガラス玉の副葬も一時期ではない可能性が考えられるが、法量と色別に分類して材質特定を試みた結果、今回の分析により、以下のことが新しくわかった。

①アルカリ酸化物を主成分とするアルカリ石灰ガラスであること、融剤に酸化カリウムを主として用いるカリ石灰ガラスで占められると推測される。

②安定剤として入れられる、酸化カルシウム値が高いものが見られる。棺内副葬時の遺体に起因する付

着物としてのノイズを考慮しても、複数個体でみられる、融剤をはるかに上回る値を示す個体が少くないことは注目できよう。

③鋳型製が主体となるが、鋳型製の中でも、原料ガラスまたは石英砂が完全に溶融しておらず、砂粒や原料ガラスの色を残した破碎ガラス片が個体表面に観察されるものが青色不透明ガラスに含まれる。発泡気泡が著しく多いため不透明に見える。

④多くは透明～半透明の個体が多いが、緑・黄個体では不透明～半透明のもので酸化鉛を含むものが数個体入っている。

⑤色別にガラス玉の組成を見たとき、同時期の他の古墳同様、銅赤ガラスをわずかに含む組成であるが、銅赤ガラスに見られる、黒褐色の筋が、青色半透明・緑色半透明の個体にもみられた。引き伸ばし法で製作したガラス管の管切で製作されたことは明らかであるが、成分的に他とは異なる特徴を見出せなかつた。

⑥青～青緑色ガラスでは、対岸に位置する石山古墳（4世紀）出土ガラスにおいて、カリウム値が高いことが特徴であることを指摘されている<sup>1</sup>。時期的に大きな隔たりがあるものの、天童山古墳出土ガラスでも同様のデータを得ている。青色カリ石灰ガラスを伝統的に製作するところが周辺に存在すると考えられる一方で、高カリウム値の要因がガラス個体の特徴であろうか疑問もある。

分析の発端となったのは⑥にあげた指摘にかかる疑問によるが、分析例が飛躍的に増加した近年の研究成果からカリガラスの類例も多く知られるようになった。しかし、いずれも古墳時代前期の出土例であり、後期における類例は少ない。県内資料の分析を進め、動向を追究したい。また、今後の課題として、赤銅ガラス以外の個体に見られた黒褐色の筋が入る個体については、製作環境が酸化・還元環境に起因するものかどうか、分析事例を増やして検討したい。さらに、クロムの検出については、蛍光X線管球がクロムを使用していることから、ノイズを考慮し検出成分から排除した。酸化クロムも発色に影響を与える要因であることが指摘されるが、発色要因としての関与を明らかにできなかった。複数の分析方法でのクロスチェックにより化学組成を検討す

る必要があろう。

〈註〉

1 下記の山崎氏の論文により、石山古墳出土の青・青緑ガラスの特徴としてカリウム値が高いことが指摘される。

〈参考文献〉

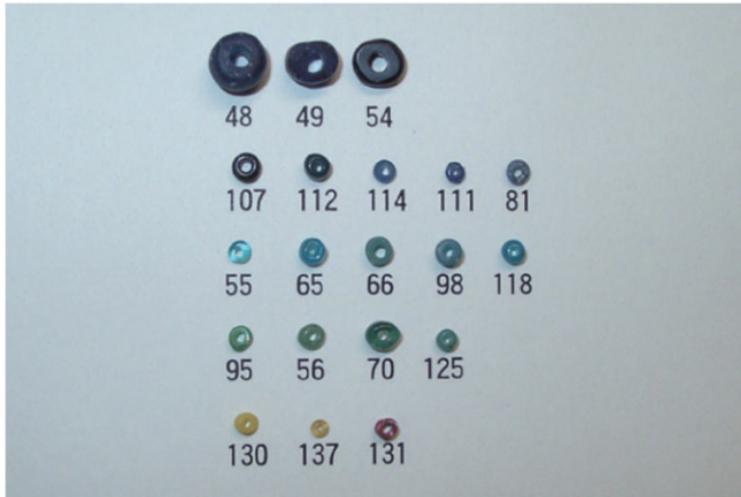
肥塚隆保「古代珪酸塩ガラスの研究—弥生～奈良時代のガラス材質の変遷」『文化財論叢Ⅱ』1995年 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会

山崎一雄「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』

1987年 株式会社思文閣出版

肥塚隆保「日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史的変遷」『遺物の保存と調査』2003年 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 波田正昭編

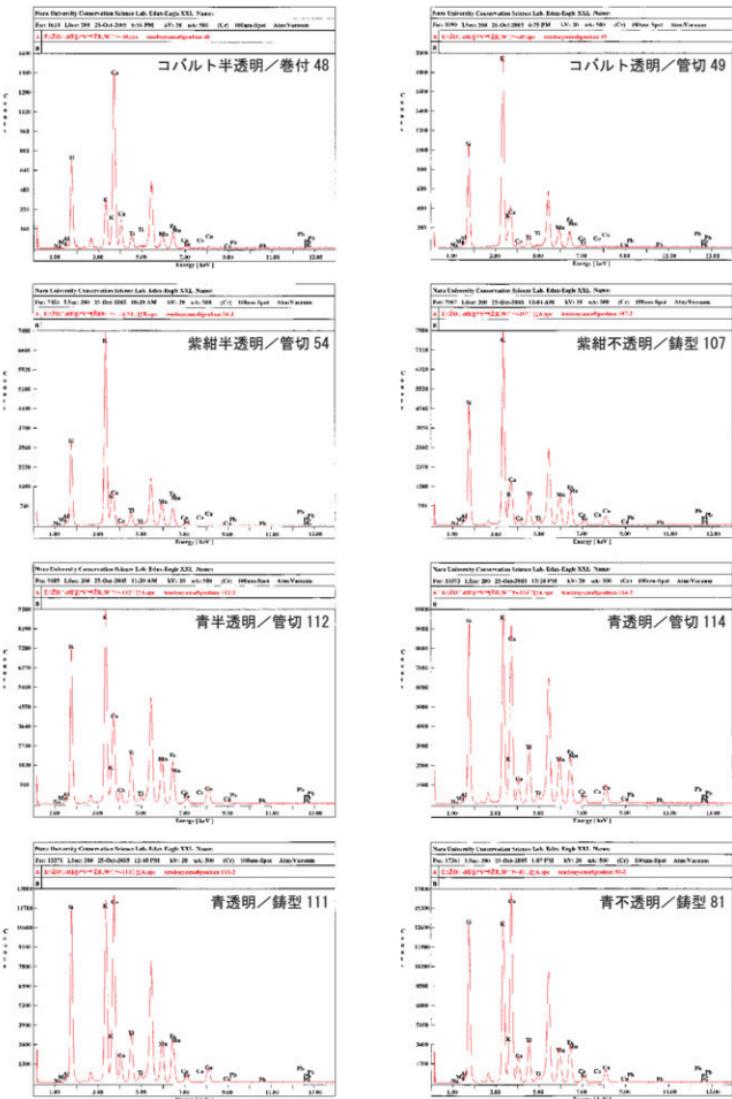
肥塚隆保「日本出土ガラスの考古学的研究—古代ガラス材質とその歴史的変遷」『考古学の総合的研究』研究成果報告書『平成10-14年度科学研究補助金特別推進研究COE (2) 研究課題番号OC-E2002』2003年 同率行政法院文化財研究所奈良文化財研究所理藏文化財センター 波田正昭



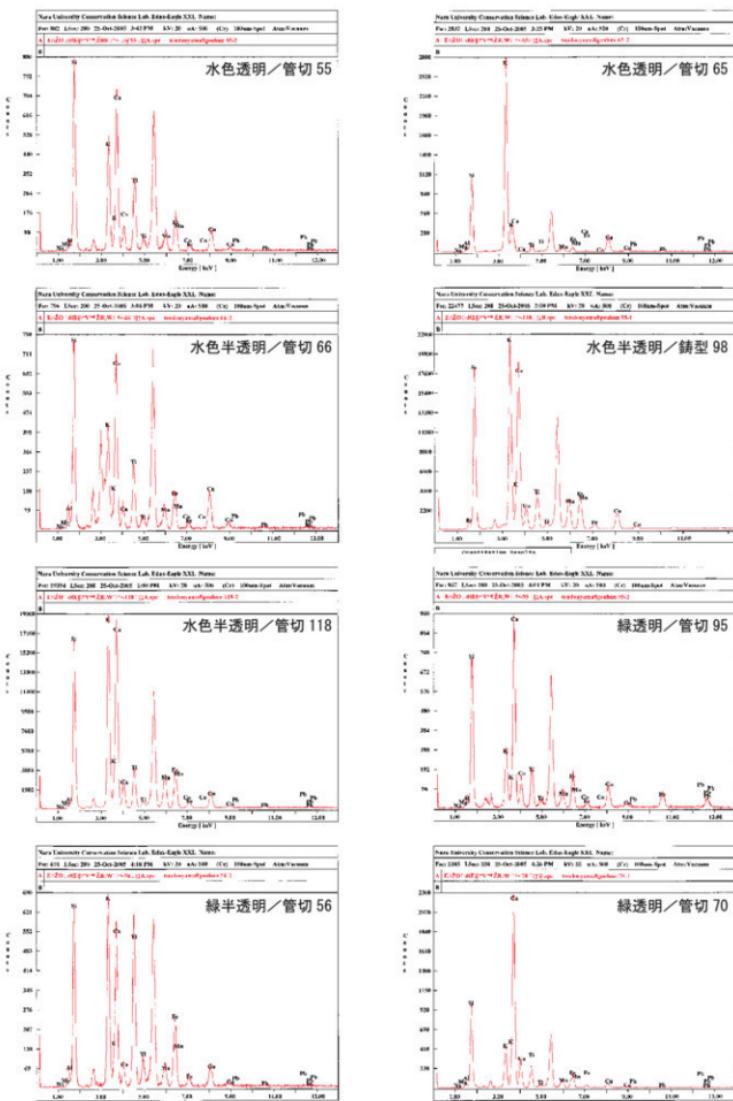
図版59 分析ガラス小玉

	コバルト・紫紺				青				水				緑				黄			
酸化化合物	48	49	54	107	112	114	111	81	55	65	66	98	118	95	56	70	125	130	137	131
SiO <sub>2</sub>	78.58	80.32	77.92	79.79	79.01	78.30	78.31	78.18	80.17	78.04	76.83	81.74	78.23	76.82	74.47	76.72	72.78	75.72	70.67	80.11
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	4.57	3.44	3.64	3.99	4.52	5.14	4.88	4.96	6.97	5.05	10.54	9.21	4.94	7.92	8.80	6.35	7.95	7.46	8.03	6.96
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.70	1.55	2.09	2.61	2.59	2.46	2.41	2.36	1.77	0.58	1.71	0.59	2.16	2.05	3.39	1.89	2.37	1.93	7.01	1.78
TiO <sub>2</sub>	0.50	0.48	0.64	1.00	1.21	1.16	1.08	1.01	1.33	0.34	1.04	0.54	0.93	0.93	2.92	1.07	1.23	1.12	1.26	1.30
CaO	8.86	1.95	1.65	1.72	2.63	4.26	4.90	5.36	3.57	0.97	3.53	1.36	5.07	5.16	3.26	10.31	3.98	4.78	7.02	3.48
MgO	1.02	0.48	0.40	0.28	0.17	0.28	0.32	0.38	0.47	0.34	1.18	0.87	0.41	0.54	0.00	0.00	0.66	0.12	0.32	0.58
Na <sub>2</sub> O	0.76	0.39	0.22	0.22	0.50	0.50	0.48	0.61	1.60	0.23	0.61	0.63	0.43	0.48	1.07	0.00	0.64	1.01	2.07	0.50
K <sub>2</sub> O	2.37	9.29	10.49	7.26	5.48	4.60	4.58	4.44	2.58	11.84	2.31	2.44	5.07	1.83	4.60	2.26	2.15	2.14	2.46	2.07
PbO	0.14	0.04	0.06	0.12	0.15	0.15	0.12	0.16	0.02	0.47	0.21	0.48	0.17	2.26	0.18	0.15	0.62	4.65	0.15	0.44
MnO	1.28	1.99	2.82	2.42	2.76	2.36	2.23	2.03	0.75	0.57	0.79	0.67	1.82	0.92	0.96	0.83	0.89	1.00	0.93	0.81
CuO	0.12	0.04	0.03	0.59	0.90	0.81	0.68	0.60	0.77	1.55	1.23	1.45	0.75	1.09	0.79	0.41	1.03	0.06	0.09	1.97
CoO	0.09	0.07	0.04	0.00	0.00	0.00	0.02	0.03	0.02	0.03	0.00	0.03	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

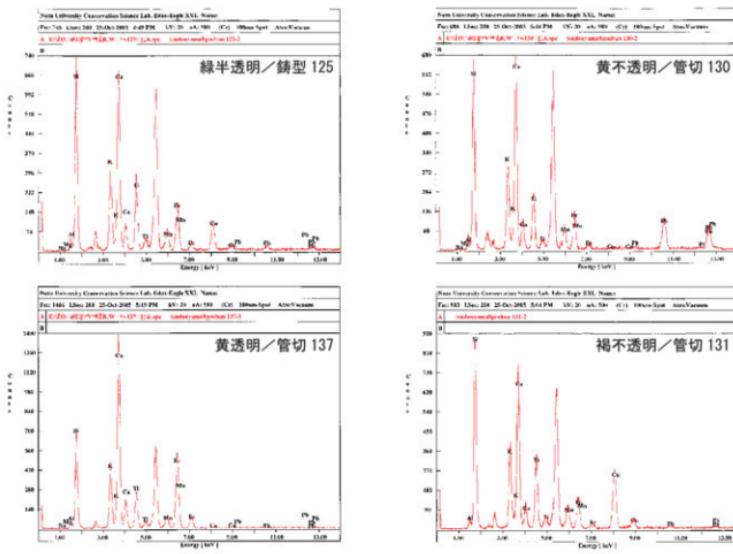
第19表 ガラス小玉蛍光X線定量分析表



第50図 ガラス小玉蛍光X線定性分析結果(1)



第51図 ガラス小玉蛍光X線分析結果[2]



第52図 ガラス小玉蛍光X線定性分析結果③

## VII まとめと検討

### 1 弥生時代後期の状況

今回の丘陵部の調査では、古墳の盛土内や古墳周辺から弥生後期（V様式）の土器が出土し、周辺に弥生の集落跡の存在が想定され、墳丘の掘削作業においても遺構の有無を留意しながら掘削したが、確認できなかった。また、13号墳西の平坦面にて堅穴住居を検出しているが、遺物はわずかな小片が出土したのみで弥生時代に相当する確証ではなく、時期は不明である。しかし、8号墳周辺での土器は完形品に近いものも含まれており、丘陵部に集落・もしくは墓域が展開している可能性は高い。

これと関連する遺跡とみられるのが木津川の対岸に存在する財良遺跡<sup>(1)</sup>である。過去の調査では大溝から同様の時期の土器が大量に出土しており、この大溝は環濠の可能性もある。住居址は未確認であるが、周辺に集落跡の存在が窺え、財良遺跡が集落とすれば、天童山の丘陵には非日常的な空間として機能していたという想定もできよう。

### 2 石室について

#### a 横穴式石室の系譜

天童山古墳群の位置する伊賀の中部については、古墳の調査例が少なく、まだ、充分に認識されていない古墳もあり、その様相に関しては明確ではない。ここでは、比較的、調査例の多い北伊賀・南伊賀の石室<sup>(2)</sup>との比較・検討をおこなう。なお、8・13号墳とも石室の上半部～天井部分に関しては欠損しておりその構造は不明であるため、石室の平面プランと規模から検討を加える。

石室の平面プランに関して、13号墳は両袖式で玄室は端正な長方形のプランをもつ。畿内系の範疇に含まれよう。特徴的な点としては羨道部の石材が玄室よりも高い位置にあることが挙げられる。

8号墳の堅穴系の小石室については、長方形のプランをもつ。周辺では奥城寺1号墳にて堅穴系横口式石室が確認され、伊賀南部などでも小石室の類例は多いが墳丘内に盛り込まれる例は初である。

8号墳の横穴式石室については両袖式の長方形プランの石室で、玄室の床は碌床で、玄室の入り口に樋石がみられるといった特徴がある。樋石をもつ例で近隣のものとしては大山田の下中島2号墳が挙げられるが、玄室と羨道部の段差がなく、下中島例のように羨道部が入り口に向かって広がらず、羨道幅は一定である点が異なるため、石室に関しては直接的な系譜関係を捉えることはできないが、樋石の存在や出土遺物の組成など、類似点もある。また、一埴丘に複数の石室をもつ例は伊勢中部の安濃地域で確認でき、主石室に小さな石室が同時に築かれるものに平田17号墳<sup>(3)</sup>が挙げられ、樋石をもつ点や小石室に平底の土器を含め多くの土器が副葬される点で似通った点があり、両地域間の交流が窺え注目できる要素である。

伊賀地域南部の名張地域では、上山9号墳や丸尾山古墳など右片袖式玄室幅に対する玄室長の比が1：2以上となる玄室幅の広い石室で、前壁をもついわゆる畿内型の石室が確認されるなど初現期を除き、畿内系の範疇にある石室が大半を占める。

伊賀北部の久米山1号墳では左片袖で、腰石をもつ。鳴塚古墳は羨道部天井石が階段状にせりあがるなど近江地域の影響が強いことが指摘されている。

天童山8号墳の横穴式石室については近畿色の強い伊賀南部地域と、近江や中勢の影響がみられる伊賀北部地域（特に大山田地域）の両者の要素が看取でき、地理的位置が示すように両地域の文化の流入状況や、首長間の交流を看取できる興味深い類例といえよう。

#### b 石室の平面規模について

第20・21表は伊賀地域における横穴式石室の規模を表したものである。大山田地域と名張地域は調査例も多いが、旧上野市に相当する地域については未調査墳が殆どで、現状で計測できる範囲のデータであるため単純に比較は出来ないが、首長墳クラスとされる赤井塚古墳で、玄室の規模は長さ5.7m、幅2.4mである。これと比較すると天童山8号墳は中規模クラス、13号墳の石室は一般的なクラスといえよう。

古墳名	所在地	墳形	墳丘規模 (m)	石室規模(m)			袖形式	主な遺物	備考
				全長	玄室長	玄室幅			
天童山8号墳	伊賀市上郷	円	18	6.62以上	4.4	2.2	両袖	耳環・鉢・鉄錠	
天童山13号墳	伊賀市上郷	円	13	6.3	3.1	1.5	両袖	鏡面・頭部器	
久米山1号墳	伊賀市南十九町立岡	円	19	—	3.5	2.5	左片袖		
久米山4号墳	伊賀市守田町南平尾	円	20	—	2.7	1.95	左片袖		
久米山34-A号墳	伊賀市守田町南平尾	円	12	—	3.4	1.55	右片袖		
久米山34-C号墳	伊賀市守田町南平尾	円	8	—	0.9	—	無袖		
久米山34-E号墳	伊賀市守田町南平尾	円	9	4	—	0.95	無袖		
久米山51号墳	伊賀市守田町南平尾	円	15	—	2.4	1.9	左片袖		
久米山44号墳	伊賀市守田町北平尾	円	23	—	5	2	両袖		
久米山45号墳	伊賀市守田町北平尾	円	13	3.5	—	1.4			
久米山49号墳	伊賀市守田町南平尾	円	9	—	—	0.95			
久米山51号墳	伊賀市守田町南平尾	円	11	—	3.3	1.9			
久米山52号墳	伊賀市守田町南平尾	円	11	—	—	—			
瀬山古墳	伊賀市守田町瀬山	円	13	—	2.35	1.35			
浅子谷古墳	伊賀市守田町浅子谷	円	14	—	4	2	右片袖		
空石打3号墳	伊賀市西条字石打	方	10.5	7.8	2.9	1.4			
空石打4号墳	伊賀市西条字石打	方	9.5	6.2	3.3	1.1			
空石打5号墳	伊賀市西条字石打	方	9.5	5	3	1.4			
空石打8号墳	伊賀市西条字石打	円	11	—	3.2	1			
空石打10号墳	伊賀市西条字石打	円	8.5	6.1	4.7	1			
空石打11号墳	伊賀市西条字石打	円	8	—	3.9	0.9			
空石打12号墳	伊賀市西条字石打	円	11	6	2.8	1.2			
空石打13号墳	伊賀市西条字石打	円	15	6.8	4.2	1.2			
空石打23号墳	伊賀市西条字石打	円	10	5.2	3	1.3			
空石打27号墳	伊賀市西条字石打	円	7.5	4	—	2.6			
空石打28号墳	伊賀市西条字石打	円	15	9.3	5.7	1.6			
空石打29号墳	伊賀市西条字石打	円	18	9.5	—	—			
空石打31号墳	伊賀市西条字石打	円	12	—	4	1.5			
空石打34号墳	伊賀市西条字石打	円	10.5	—	3.9	1.5			
空石打38号墳	伊賀市西条字石打	円	11	3.2	—	1			
空石打39号墳	伊賀市西条字石打	円	11.5	3.3	2.5	1.2			
空石打43号墳	伊賀市西条字石打	円	9~11	2.4	—	—			
勘定塚原古墳	伊賀市西条字築之森	—	—	—	4.6以上	3.6	—		
前原塚原木HBR35号墳	伊賀市守田字前原	中ノ瀬	円	12	6.7	4.2	1.9	片袖	
前原塚原木HBR37号墳	伊賀市守田字前原	中ノ瀬	円	16	8.3	4.5	2.05	片袖	
タラマ1号墳	伊賀市西木字ダラマ	円	12.5	4.95	3.7	2			
タラマ2号墳	伊賀市西木字ダラマ	円	13	5.3	4.3	2.1	右片袖		
中ノ瀬1号墳	伊賀市西木字中ノ瀬	円	20	7.55	4.2	2.25			
中ノ瀬2号墳	伊賀市西木字中ノ瀬	円	16	6.1	4.75	1.8			
亂池2号墳	伊賀市守田字愛田子池	円	10	5.4	4.9	1.68			
鳴塚古墳	伊賀市大田園風寺字守義	前方後円	37	9.2	4.45	1.6	右片袖		
下中島1号墳	伊賀市大田園風寺字下中島	円	10	4.1	2.7	2.7	右片袖	須恵器・土師器	
下中島2号墳	伊賀市大田園風寺字下中島	円	16	11.2	—	5.3	両袖		
下中島3号墳	伊賀市大田園風寺字下中島	不明	不明	4.3	—	—	右片袖		
崩山1号墳	伊賀市大田園風寺字崩山	円	12	—	—	1.7		馬具(杏葉)など	
野谷3号墳	伊賀市大田園風寺字小野谷	円	18	—	—	—		玉類・須恵器	
向山2号墳	伊賀市大田園風寺字向山	方	20	14.5	5.2	2.5	右片袖	金環・鉢	
向山6号墳	伊賀市大田園風寺字向山	円	16	11	4.8	1.6	左片袖		
法堂古墳	伊賀市大田園風寺字村字南瀬	円	20	9.8	5.2	1.9	両袖		
祓社2号墳	伊賀市大田園風寺字平田字祓社	円	20	8.3	5.7	2	右片袖	鏡面・須恵器	
陣原16号墳	伊賀市大田園風寺字陣原	円	17×18	9.64	4.64	2.12	右片袖		
神林9号墳	伊賀市大田園風寺地	円	10	6.3	—	2.06	無袖		
中山山11号墳	伊賀市大田園風寺字中山山	円	12	—	4.8	1.9	左片袖	須恵器	岡溝祭し跡
田中古墳	伊賀市大田園風寺地	—	—	—	4	1.65	右片袖		
鶴御前古墳	伊賀市守田字鶴御前	不明	不明	7.5	4.4	1.3	両袖		
波波敷削1号墳	伊賀市阿山町波波敷削字大沢	方	14×18	11.6	2.2	5.8~6.2	左片袖		外灘門石
龜井天4号墳	伊賀市守田町大字内丹波院字龜井天	円	15	7.4	4.5	1.7	右片袖	トンボ玉など	
柄ヶ谷15号墳	伊賀市阿保字西ノ沢	円	10	7.7	3.85	1.8	右片袖		網石あり
鷹地大塚1号墳	伊賀市鷹地	円	12	8.2	3.5	1.7	右片袖		
鷹地大塚2号墳	伊賀市鷹地	円	12.4	6.9	4	1.3	右片袖		
上山9号墳	名張市夏見字上山	円	15	7.2	3.4	2.3	右片袖		
上山7号墳	名張市夏見字上山	方?	12	6.7	3.1	1.7	両袖		
上山13号墳	名張市夏見字上山	円	12	5.4	2.7	1.5	両袖		
上山14号墳	名張市夏見字上山	円	12	7	3.2	1.6	両袖		

第20表 伊賀の横穴式石室一覧表

古墳名	所在地	墳形	墳丘規模(m)	石室規模(m)			袖形式	主な遺物	備考
				全長	玄室長	玄室幅			
上山8号墳	名張市夏見字上山	円	12	7	3.5	1.5	両袖		
ひなご屋敷3号墳	名張市夏見字上山	円	15	6.8	2.8	1.35	右片袖		
奥出11号墳	名張市夏見字上山	一	—	—	3.3	2.1	—		
尻灰1号墳	名張市赤目町すみが丘	円	—	9.1	4.5	2.1	両袖	ガラス小玉・耳環	
尻灰4号墳	名張市赤目町すみが丘	円	14	6.7	3.3	1.5	右片袖	鏡面・鉄鑓・刀子	
尻灰8号墳	名張市赤目町すみが丘	円	—	5.1	2.3	1.1	片袖	鉄刀・鉄鏃	
楕山1号墳	名張市赤目町柏原字宮城	円	9.7	5	3.2	1.3	片袖	—	
寺春日笠山1号墳後円部	名張市赤目町一ノ井字糸ノ木	前方後円	34	—	5.07	2.32	両袖	—	
寺春日笠山1号墳前方部	名張市赤目町一ノ井字糸ノ木	前方後円	34	8.4	4.5	1.77	両袖	—	
杉矢谷4号墳	名張市赤目町星川字杉矢谷	円	—	4.8	2.8	1.9	片袖		
台ヶ芝1号墳	名張市赤目町字木口	円	12	5.8	3.6	0.2	片袖		
圓谷古墳	名張市赤目町字楢川	円	12.5	8.9	3.7	2.2	片袖		外護列石?
延垣内1号墳	名張市赤目町柏原字下東野	方	15	8.2	3.15	2	両袖	須恵器・土師器	
延垣内5号墳	名張市赤目町柏原字下東野	方	14	9	—	1.6	片袖	須恵器・土師器	
桃山古墳	名張市赤目町大六字草荷谷	一	—	10.6	5.1	2.5	両袖		
木戸口古墳	名張市赤目町淹谷	円	—	1.6	3.5	1.6	片袖		
楕山17号墳	名張市赤目町櫛下楕山	一	—	4.1	4.1	1	無袖		
丸尾山1号墳	名張市赤目町星川字落シ谷	円	26	7.2	4	2.13	右片袖		
丸尾山2号墳	名張市赤目町星川字落シ谷	円	14	6.6?	3.9	1.8	右片袖		
丸尾山3号墳	名張市赤目町星川字落シ谷	円	10	5.88	3.36	1.24	右片袖		
右取塚1号墳	名張市赤目町星川右取谷	円	10	6.2	—	1.18	無袖		
小谷1号墳	名張市赤持町字小谷	円	9	7.2	2.9	1.2	両袖		
小谷2号墳	名張市赤持町字小谷	円	8	—	—	1.8	無袖		
小谷3号墳	名張市赤持町字小谷	円	14	7.2	3.37	1.76	両袖		
小谷4号墳	名張市赤持町字小谷	円	8	4.7	—	1	無袖		
賴治5号墳	名張市青蓮寺字北沢	円	12	—	1.2	0.9	片袖		
百々1号墳	名張市赤合ヶ西6番町	方	9	4.4	2.5	1.1	両袖	須恵器・土師器	
中村2号墳	名張市赤合ヶ西4番町	円	20	11.2	5.2	2.4	両袖	須恵器・土師器	
中村3号墳	名張市赤合ヶ西2番町	円	11.5	4.8	3.06	1.8	片袖	須恵器・土師器	
覗切1号墳	名張市赤蓮寺廻切	円	—	—	4.3	1.6	両袖		
立岩3号墳	名張市青蓮寺字骨冷	円	7.3	—	3.6	1.15	—		
立岩4号墳	名張市青蓮寺字骨冷	円	8.5	3.1	0.98	0.9	片袖		
赤井塚古墳	名張市赤井	円	22	11.8	5.7	2.4	両袖		

印は未調査の古墳で現状で確認できる規模である

第21表 伊賀の横穴式石室一覧表(2)

### c 壁穴式小石室について

8号墳からは、横穴式石室のほか、壁穴式の小石室を確認した。小石室については、横穴式石室といった中心施設の周辺に付随して築造されている場合が多く、規模も、非常に小さい例も存在することから、その被葬者像についても、中心施設に葬られた被葬者の類縁者・子供、ないしはそれに従属した者といった理解がなされている。しかし、本墳の場合のように墳丘にとりこまれた小石室の場合、一般的にみられる墳丘外に埋葬されたものとは区別する必要がある。

8号墳の場合、中心となる埋葬施設は横穴式石室と考えても相違ない、しかしながら、小石室が先行して築造されたという事情を考慮しても、横穴式石室は墳丘の中心には築造されず、小石室のある空間を意識し南寄りに計画的に造られている。このことは、小石室の被葬者像を考えるうえで示唆的である。

さらに、小石室の副葬品には、ミニチュアの土器

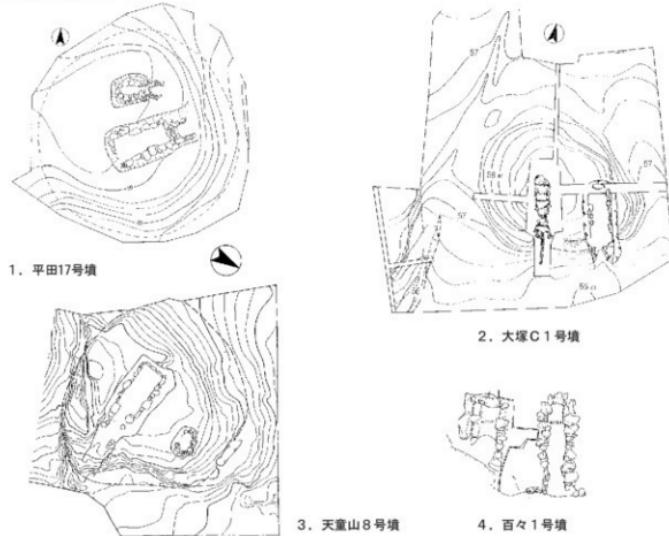
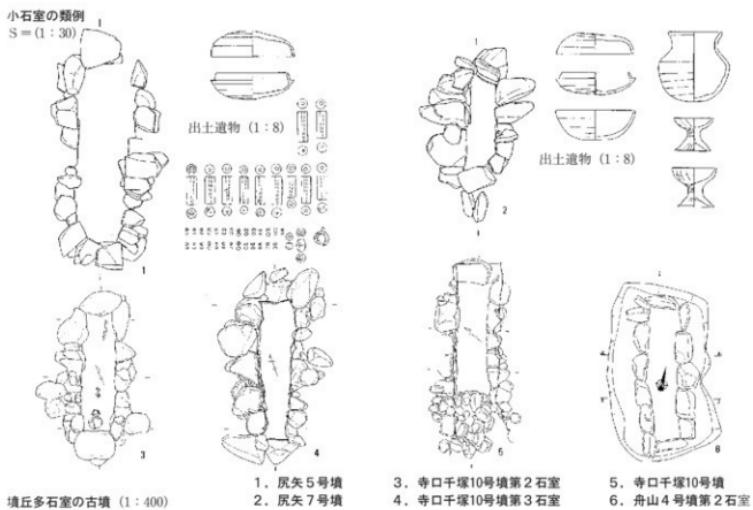
や德利壺があるものの、玉類が一切副葬されておらず、武器類や装身具が豊富に副葬された第1石室の内容と比較すると、内容が全く異なる。

では小石室の被葬者はどのような性格をもった人物が考えられるのであろうか。

白石太一郎氏は、このような墳丘にとりこまれた小石室について家長の死以前に死亡した類縁者の再葬墓であり、家長の死に際して合葬されたものであるとの見解を示されており注目される。

天童山の小石室は、規模も成人が副葬されるに足る大きさであり、副葬品にはミニチュアの土器や土製品、鉄鏃があり、小石室のなかでも比較的豊富である。主石室に埋葬されていないことから、家長クラスの人物とは考えがたいが、副葬品の多さと、石室の築造箇所から比較的上位の従属者の墓と考えたい。

同一古墳における被葬者間の血縁関係の有無については田中良之氏の研究が著名であり、6世紀前半



第53表 小石室と1墳丘多石室の類例

から中葉以降に夫婦とその子が合葬されるモデル（基本モデルⅢ）出現すると指摘されているが、当古墳内では8号墳の第1石室にて齒の小片がわずかながら確認できたに過ぎず、小石室を含めた被葬者間の諸関係を追求する材料は残念ながら得ることが出来なかった。また、一墳丘多石室の墳墓については伽耶地方の多桟墓でもみられており、このような半島との関連の有無など群集墳の被葬者像を考えるうえで重要な問題であり、今後検討すべき課題である。

#### d 墳丘構築過程について

天童山8号墳については、比較的墳丘が残存しており、古墳の構築過程を窺うことのできる要素を確認した。ここでは、調査で確認した事項を整理したうえで、古墳の構築過程と墳丘での祭祀について検討したい。

①まず、古墳の築造する場所を整地する。8号墳の場合、丘陵尾根のやや傾斜が緩くなる地点の地山を方形状に整形したとみられる。②そして、まず小石室の構築のため地山を掘り込む。その際、掘り込む位置は墳丘構築範囲の北寄りで、横穴式石室を構築するスペースは空けておく。③小石室を構築する。埋葬後、すぐに盛土を行ったのかについては明確ではないが、小石室の天井石と南の側壁が一部崩落していることや、石室内への土砂の流入などから、横穴式石室構築時まで盛土はなかった可能性も考えられる。④スペースをあけておいた箇所には横穴式石室の構築が開始される。地山を掘り込み、石材を組上げていく。石室は一気に構築せず、一旦2・3段まで積み上げて止める。盛土も石室の高さまでおこなう。⑤一旦、盛土を中断し、墳丘で須恵器・土師器を破碎し、祭祀と考える行為が執り行われる。⑥石室構築後、墳丘の盛土を再開し、墳丘を完成させる。⑦墳丘が完成した後かどうか不明であるが、周溝でも大甕などを用いた祭祀が執り行われた。<sup>19)</sup>

墳丘構築過程における祭祀については愛知・静岡・奈良県など周辺地域でも確認例が多いが、三重県内での良好な類例は少なく貴重な類例であろう。<sup>20) 21)</sup>

#### 3 遺物について

a 鉄鎌 天童山8号墳からは、鉄鋒・石突・鉄鎌など多くの武器が出土し、伊賀のこれまでの古墳時

代後期に属する横穴式石室をもつ古墳の調査例の中では格段に多い事例となる。中でも鉄鎌は破片も含め94点出土している。追葬などにより一括性には乏しいが、須恵器よりTK43～209型式段階の範囲におさまる資料であり、量的にまとまっていることもありこの地域の鉄鎌の傾向を知るうえで良好な資料である。これまで伊賀の鉄鎌についての検討はなされていないため、以下簡単に後期古墳の鉄鎌の傾向について簡単に触れておく。

MT15段階～TK10段階については南山之奥6号墳、奥小波田1号墳、奥城寺1号墳など木棺直葬墳の調査例で比較的まとまって確認されている。この段階では長頭鎌が組成の大半を占め、広根系については多くない。長頭鎌は三角・柳葉・腸抉三角形があり、頭部が短いものとやや短い(5.6～7.0cm)ものが含まれるのが特徴である。腸抉三角形鎌が各古墳で多くを占める。

MT85段階には天童山8号墳の第2石室(竪穴式小石室)の資料のみである。長頭鎌は確認されていないが、依然として、腸抉三角形鎌が主体である。棘闘が確認できる資料があり、この地域での棘闘の出現が若干遅ることが判明した。

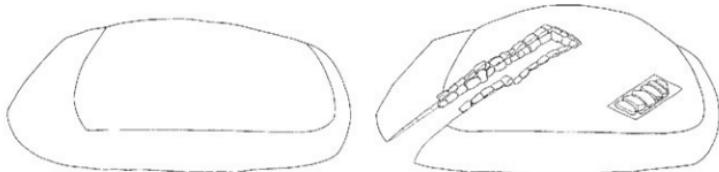
TK43段階については意外にも良好な資料が少なく、蘿池2号墳で確認できるのみである。長頭鎌については天童山古墳第1石室(横穴式石室)のものが参考となろう。広根鎌は、頭部が斜め闘のものが多く確認できる。

以上、大まかな傾向について触れたが、伊賀地域において現状では良好な資料が少なく、具体的に検討できる状態にはないが、今後、過去の資料の整理も含め資料の蓄積が必要である。

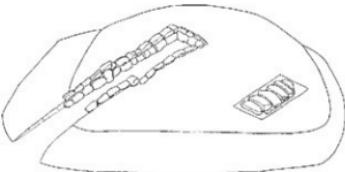
#### b 装身具(耳環・玉類)

8号墳からは耳環や多様な玉が出土した。装身具が量的にまとまって出土した例は少なく貴重な事例である。耳環は銅芯銀板貼のものが確認されている。銀環は、金環よりも製作行程は高度であるとされ、一概に金環を保持した階層より身分的に劣るとはいえないだろう。

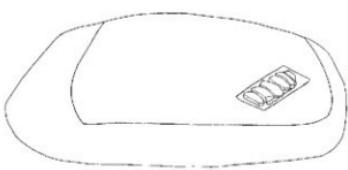
玉類は、碧玉製管玉・水晶製切子玉・琥珀製纈玉・瑪瑙製丸玉・ガラス玉など多様である。玉類のなかではガラス製丸玉、纈玉、空玉、トンボ玉について



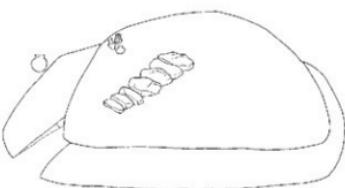
① 古墳の構造する場所を盛土する。(盛土前)



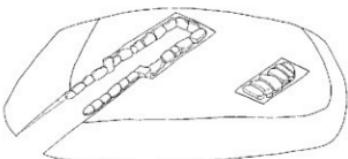
② 石室は一気に構築せず、一段2・3段まで積み上げて止める。盛土も石室の高さまでおこなう。



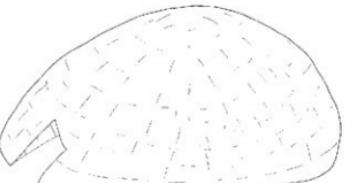
③ 小石室の構築のため山頂を掘り込み、小石室を構築する。その際、掘り込む位置は墳丘構築範囲の北寄りで、横穴式石室を構築するスペースは空けておく。



④ 一旦、盛土を中断し、墳丘で須恵器・土器等を破砕し、祭祀と考える行為が執り行われる。



⑤ スペースをあけておいた箇所には横穴式石室の構築が開始される。地山を掘り込み、石材を組み上げていく。



⑥ 石室構築後、墳丘の盛土を再漬し、墳丘を完成させる。

第54図 墳丘構築過程概念図

は出土する古墳が限定されており、嗜好品と捉える。経済力の格差の反映とみるか、威信財と捉えるかは評価の分かれどころであろうが、琥珀の東玉に関しては県内での出土例は多くなく、伊勢では首長墳クラスの井田川茶臼山古墳や、首長墳クラスではないが、大塚C1号墳、河田A4・6、B-3号墳、伊賀では名張の横山13号墳といった豊富な副葬品をもつ古墳で確認される傾向にある。また、ガラス小玉については、コバルトブルーのものが主体であるが、

黄色や褐色のものも含まれている。多様な色のガラス玉は首長墳クラスに顕著にみられるもので、8号墳の被葬者が階層的に上位に位置付けられると考えられる。

#### c 特徴的な須恵器について

伊賀の須恵器生産に関しては、窯跡が極めて少なく、現状で確認されている最古段階のものでもMT15型式段階の二ツ峰窯跡しか確認されておらず、この地での生産は低調であったと推測される。したがっ

て、伊賀地域の須恵器の変遷については、大和の隔国という地理的な状況が示す通り、その変遷や特徴は概ね陶邑編年と対応していると考えられているため、ここでは田辯昭三氏による陶邑編年を参考にする。

古墳からは多くの須恵器が出土しているが、特徴的なものとしては、口縁部端部にキザミをもつ須恵器・平底の徳利壺がある。キザミをもつ須恵器は、比土・阿保・名張地域で多く類例が確認され、大阪の日置荘遺跡でも出土していることが福田典明氏によって指摘<sup>[1]</sup>されている。この須恵器が伊賀の窯で生産されたものか日置荘遺跡といった畿内からの搬入品であるかは不明であるが、出土例が伊賀南部を中心に分布していることからみると、おそらく伊賀で生産されたと考えられる。今後、生産された窯跡の特定がまたれるが、当時の流通経路を考えるうえで興味深い資料である。

平底の徳利壺については百済の土器の系譜を引くものと理解され類例が増加している。これらの壺は陶邑に代表される大阪南部の須恵器窯からの出土例が確認されておらず、形態や調整が個体ごとに異なることから、消費側の要請に応じてその都度生産された特注品との見解がある。

また、平底で、徳利に類似しているものの、くびれ部のしまりが緩く、広口になる壺の類例も伊勢・伊賀では多く確認できる。この平底の土器について徳利壺の系譜になるのかは明確ではないが、徳利壺を意識して製作された可能性も考えられる。

#### d いわゆる「渡来系遺物」の評価について

天童山古墳群から出土した副葬品の中には、百済系の徳利壺や鉄釘が出土した。これらの遺物は渡来系の遺物として捉えられている。しかし、このような遺物が出土したことを根拠に当古墳の被葬者は渡来系の氏族の墓とは即断できない。なぜなら、天童山8・13号墳の石室は両袖の畿内系のもので、副葬品についても、鉄製武器や玉類を中心であり、とりわけ渡来系の要素が強いものは少ない。伊賀地域における渡来系の氏族の古墳群としては多様な埋葬施設をもち、ミニチュアの炊飯具などが出土している久米山古墳群がその候補として挙げられようが、

確実に渡来系氏族の墳墓といえる事例は確認できていない。

渡来人については「渡来人は移住者・定住者に限定せず、その字義に立ち返って移住者と広く捉え直し、その多様な様態や史的変遷・意義を広く検討すべき」と田中史生氏も指摘するように、定住することなくその間を行き來した人々も考慮にいれる必要があり、古墳に含まれるこうした遺物も、このよう人々を介して入手したと考えるのが妥当であろう。

従って、渡来人の生活の痕跡を認証するのは、非常に困難な作業であるが、徳利壺に関しては近江や伊勢中部に集中して出土している傾向から、各小首長間の交流によってもたらされたものと捉えたい。

#### 4 天童山古墳群の被葬者像

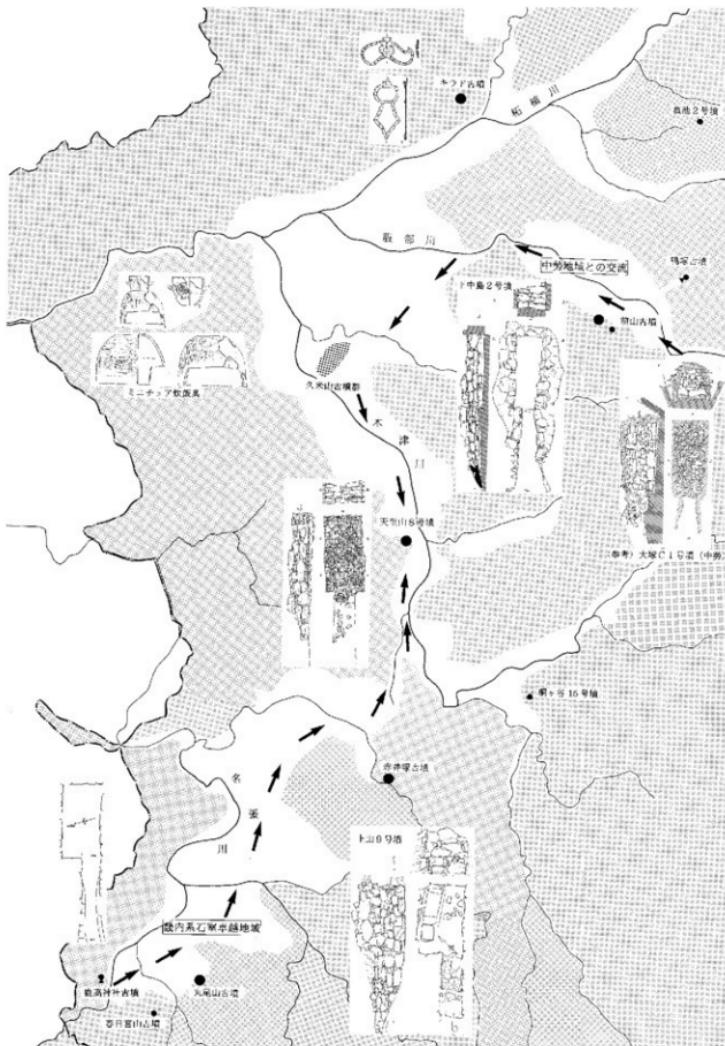
天童山古墳群からは、多くの遺物が出土し、当該期にこの地に有力な勢力が存在したことが窺えた。ここでは、これまでの考察を踏まえ、伊賀地域における本墳の位置付けについて検討する。

本地域には編文・弥生時代から近世に至るまで重要な遺跡が所在する。しかしながら、古墳時代には大型古墳や多くの群集墳が集中する伊賀の北・南部と比べ、古墳の築造はやや低調で、中期末葉に谷古墳群、後期と考えられる猪田神社古墳が挙げられるに過ぎない。また、付近の集落の展開も古墳時代に関しては不明である。

今回調査した天童山8・13号墳は古墳群の北支群にあたり丘陵斜面上に位置する。天童山8号墳からは、盗掘を受けていたとはいえ、比較的多くの副葬品が残存していた。これらの中には耳環や、金銅製の刀装具の一部である金箔片や、鉄鍔や鐵鎌、弓の飾り金具といった武器・鎗や鎌といった工具類のほか、切子玉・簾玉・管玉・丸玉・ガラス玉といった玉類も出土しており多彩な内容である。

後期古墳の中で琥珀製の簾玉をもつ、大塚・河田の各古墳では、簾玉と共に平底の徳利壺、またそれに類似したものが出土しており、これらの遺物が入手可能な身分は限られていることを示唆するものといえよう。

また、盗掘の影響も考慮せねばならないが、馬具類は含まれていなかったと考えられ、馬具を副葬す



第55表 天童山古墳群と伊賀の後期古墳

るキラ土古墳といった地域首長クラスの被葬者像は想定しがたい。しかし、立地的に丘陵の最高所の尾根上に位置する古墳群の中心である1～4号墳の中には石取りなどによって石室は残存していないが、石室の跡が窪みになっており、石室の痕跡が確認できる。窪みはかなり大きく、大型の石室が存在したことが想起され、周辺での古墳数が少ないといえ、伊賀地域でも有力な勢力であったと考えられる。

以上のことから天童山古墳群の被葬者は有力な身分にあったことが窺えるが、被葬者像を考えるうえで見逃せないのが白鳳期に木津川を挟んだ対岸に建立される財良寺である。この寺は天武天皇勅願により建立され、「上郡」の地名が示すように付近に郡衙が存在した可能性が指摘されている。今回、丘陵からは古墳のほかに7世紀前～中頃の土器を埋納した土坑が検出されており、この時期まで墓域・祭祀の空間として機能していたとみられる。また、丘陵下の三石代遺跡<sup>(2)</sup>では古代の掘立柱建物と円面鏡が、下郡遺跡では延暦年間の木簡が出土しており、古代にはこの付近一帯がこの地域の中枢部として繁栄したと想定される。この背景には壬申の乱の際に天武天皇に協力した伊賀北中部勢力の躍進と関連があるものと推定され、当古墳群の被葬者が直接系譜に結びつくのか否かは今後、資料の増加をまって検討すべき課題であるが、のちの「伊賀臣」の系譜に連なる有力家長層の墳墓の候補と捉えたい。(豊田)

## [註]

- (1) 貞田直純「IV 上野市才良・南部・才良跡跡・澤田跡跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990年) ほか
- (2) 竹内英昭「三重県の横穴式石室研究」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号(1995年)
- (3) 福田典明「奥城寺古墳出土の遺物について」『上野市埋蔵文化財調査年報』3 上野市教育委員会1997年)
- (4) 三重大学歴史研究会原始古代史部会『下中島古墳群』現地説明会資料(1986年)
- (5) 田中秀和・浅生悦生「平田17号墳」『安濃町史 資料編』安濃町史編纂委員会 1994年)
- (6) 門田了三『上山古墳群』(名張市遺跡調査会 1994年)
- (7) 門田了三『横山古墳群』(名張市遺跡調査会1999年)
- (8) 註2と同じ
- (9) 一覧表作成にあたっては下記の文献を参考にした。  
水口昌也『鴎ノ巣遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群』(名張市教育委員会1991年)  
福田典明「北伊賀の群集墳」(『Mie history 10』三重歴史文化研究会)  
伊賀市『上野市史 考古編』(伊賀市 2005年)
- (10) 坂清「小石室による多軸をめぐって」(『寺口千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第62号 奈良県教育委員会 1991年)
- (11) 白石太一郎ほか『葛城石光山古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31号 奈良県教育委員会 1976年)
- (12) 田中良之『古墳時代親族構造の研究』(柏書房1995年)
- (13) 上生田純之『古墳構築過程における儀礼－埴丘を中心として』(『古墳文化とその伝統』勉誠出版1995年)
- (14) 岩原剛『考察 墓前儀礼の諸相』(『鶴鳴山古墳群』豊橋埋蔵文化財調査報告第65号 豊橋市教育委員会2002年)
- (15) 鈴木一有『宇摩坂古墳群』(浜松市博物館 1998年)
- (16) 鈴木内では津市「田一走町」の宮ノ下1号墳で確認されている、伊勢野久好『宇ノ下古墳群』(一志町教育委員会1997年)
- (17) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店1981年)
- (18) 鉄灘については岩原剛『副葬品の変遷－東海地方における後期古墳の副葬品について』(『第8回東海考古学フォーラム 東海の後期古墳を考える』2001年)
- (19) 福田典明『キザミのある須恵器－伊賀地域の出土例を中心として』『考古にかくに』2003年)
- (20) 浅生卓司『特異な須恵器』『埴邱』三重県埋蔵文化財センター2005年)
- (21) 田中史生『古代史からみた波来人－令制前の波来人をめぐって』『ヤマト王權と波来人 日本書古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム2』サンライズ出版2005年)
- (22) 西村美幸『三石代遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)



古墳群遠景（東から）



8号墳調査前風景（北から）

図版 2



8号填填丘土層断面（南から）



8号填填丘土層断面（東から）



8号墳横穴式石室全景（東から）



8号墳調査後全景（北東から）

図版4



8号墳玄室内遺物出土状況（南から）



8号墳玄室内遺物出土状況（南から）



8号墳玄室内遺物出土状況（北から）



8号墳玄室内遺物出土状況（北から）

図版 6



8号墳玄室内遺物出土状況（西から）



8号墳玄室内遺物出土状況（東から）



8号墳玄室内遺物出土状況（南から）



8号墳玄室内遺物出土状況（北から）



8号墳玄室内遺物出土状況（南から）

図版 8



8号墳玄室内遺物出土状況（南から）



8号墳玄室内遺物出土状況（東から）



8号墳玄室内遺物出土状況（西から）



8号墳玄室内遺物出土状況（南から）

図版 10



8号墳玄室礎床下の土器出土状況（南から）



8号墳羨道部土器出土状況（南から）



8号墳盛土内須恵器出土状況（南から）



8号墳周溝遺物出土状況（北西から）

図版 12



8号墳盛土内土器出土状況（南から）



8号墳盛土内土器出土状況（東から）



8号填竖穴式小石室棟出状況（東から）

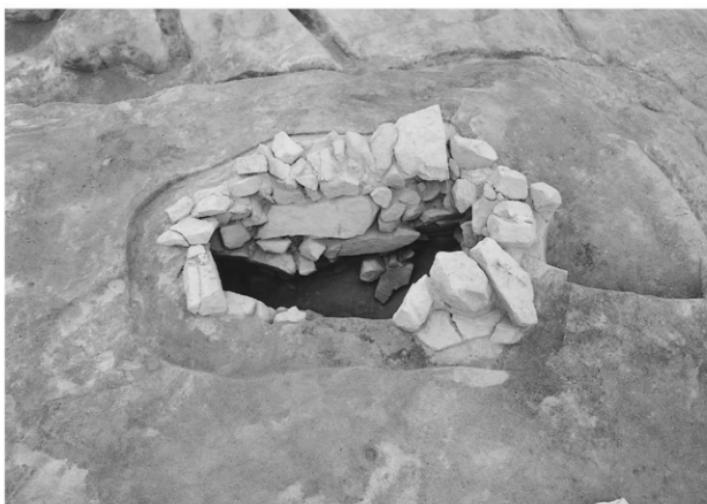


8号填竖穴式小石室棟出状況（西から）

図版 14



8号填堅穴式小石室全景（天井石除去後・東から）



8号填堅穴式小石室全景（天井石除去後・南から）



8号填縫穴式小石室内部遺物出土状況（西から）



8号填縫穴式小石室内部遺物出土状況（東から）



8号填縫穴式小石室遺物出土状況（北から）

図版 16



堅穴式小石室遺物出土状況（北から）



堅穴式小石室遺物出土状況（西から）



13号填模穴式石室全景（東から）



13号填模穴式石室全景（西から）

図版 18



13号墳玄室内遺物出土状況（東から）



13号墳玄室内遺物出土状況（北から）



13号墳玄室内遺物出土状況（西から）

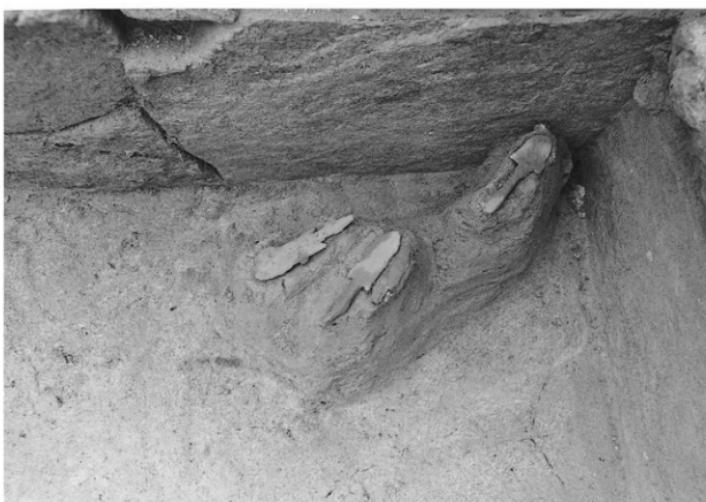


13号墳玄室内遺物出土状況（北から）

図版 20



13号墳玄室内遺物出土状況（西から）



13号墳玄室奥壁鉄撋出土状況（東から）



土地裏S-X 2全景(西から)



土地裏S-X 2全景(東から)

図版 22



弥生土器出土状況



SK 3・SZ 4 土器出土状況（東から）



7号墳想定地（東から）



丘陵調査後風景（東から・奥の下段に S X 2）

図版 24



工事後の現場状況（北から）

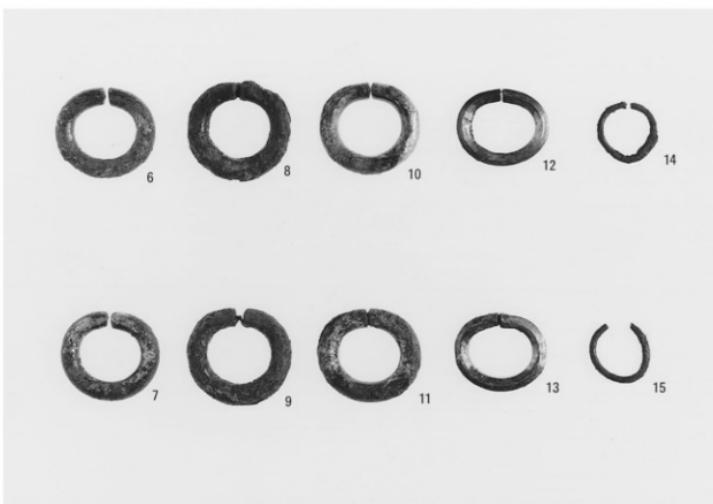


工事後の現場状況（南東から）

天童山 8 号墳横穴式石室出土遺物

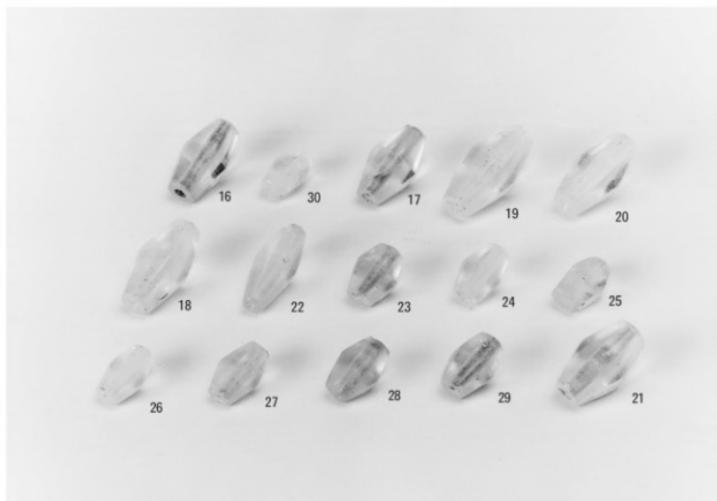


金製飾金具

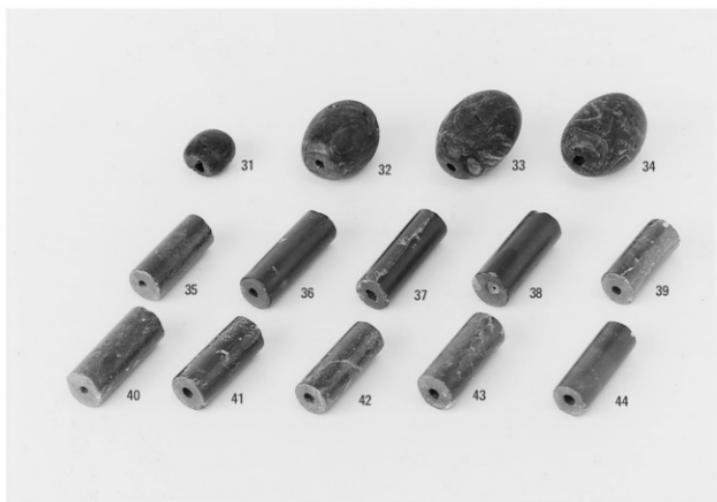


耳環

天童山 8 号墳横穴式石室出土遺物



切子玉



索玉·管玉

天童山 8 号墳橫穴式石室出土遺物・鐵製品



155

鉄鋒



156

石突



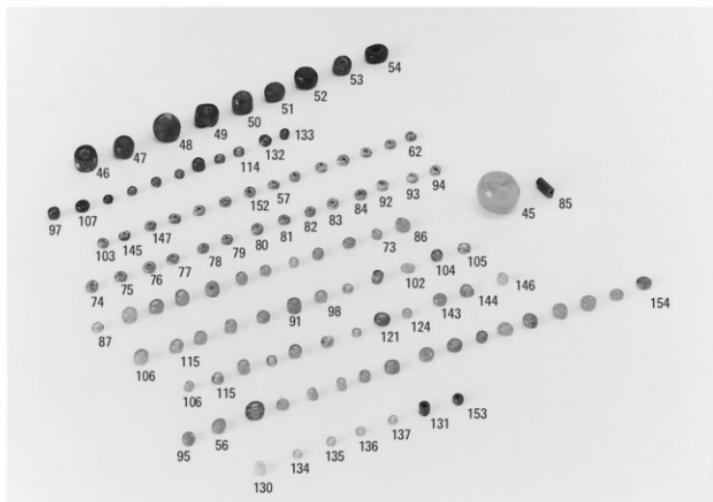
162

163

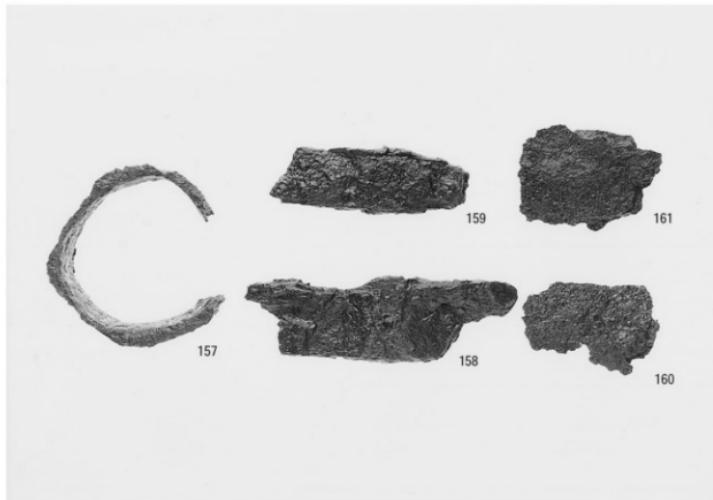
小太刀

図版 28

天童山 8号墳横穴式石室出土遺物

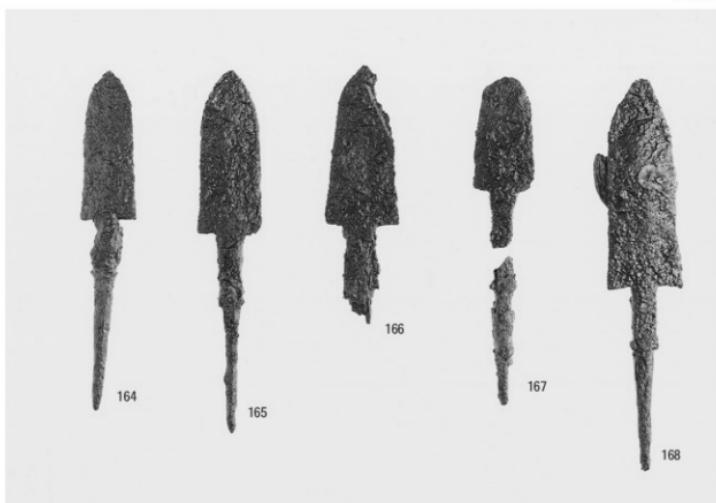


ガラス玉

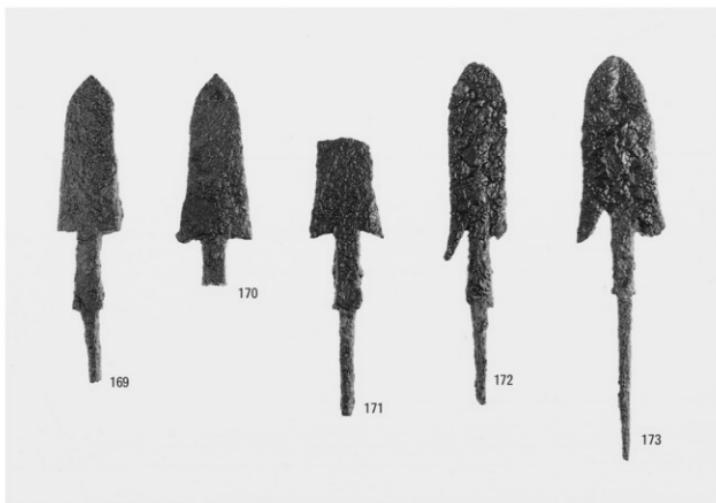


鉄製品（武器）

天童山 8 号墳横穴式石室出土遺物



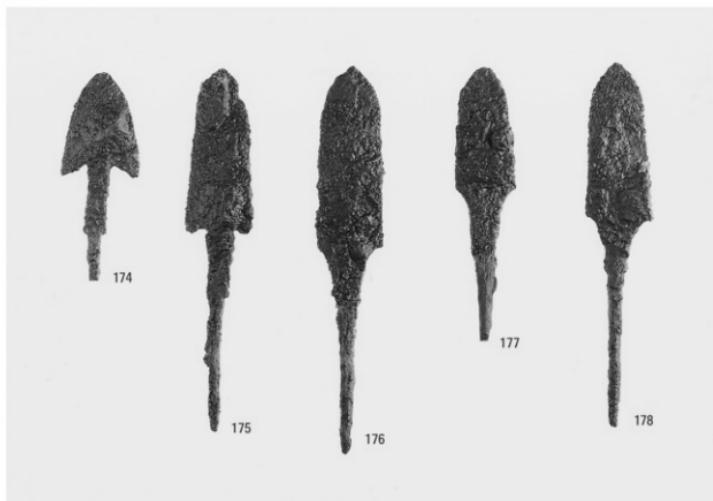
鐵鏟



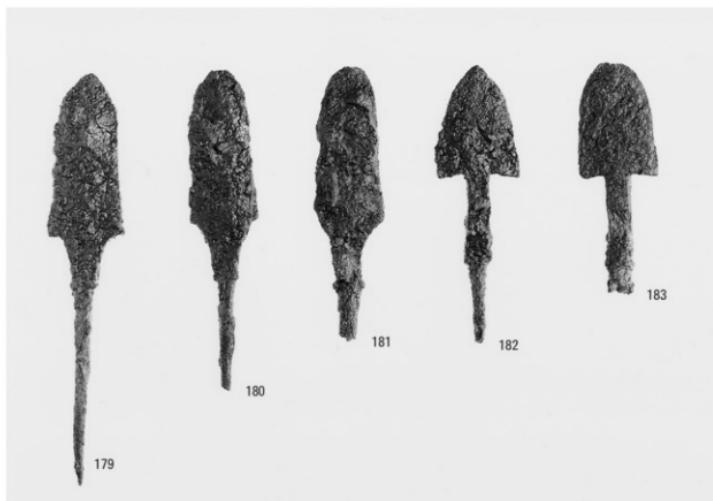
鐵鏟

圖版 30

天童山 8 號墳橫穴式石室出土遺物

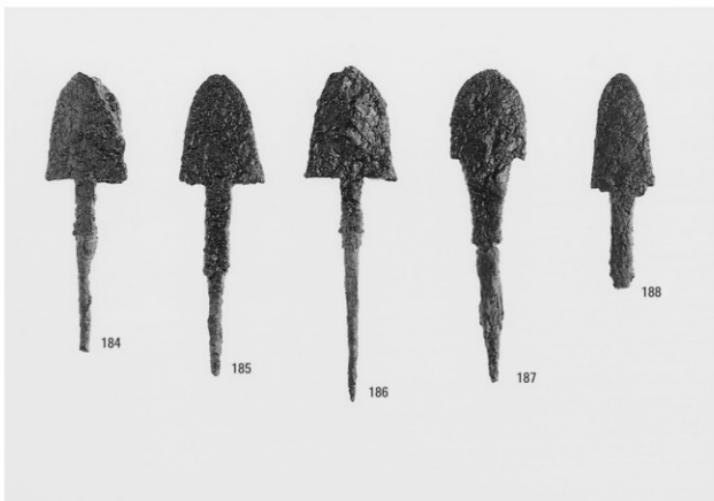


鉄鏃

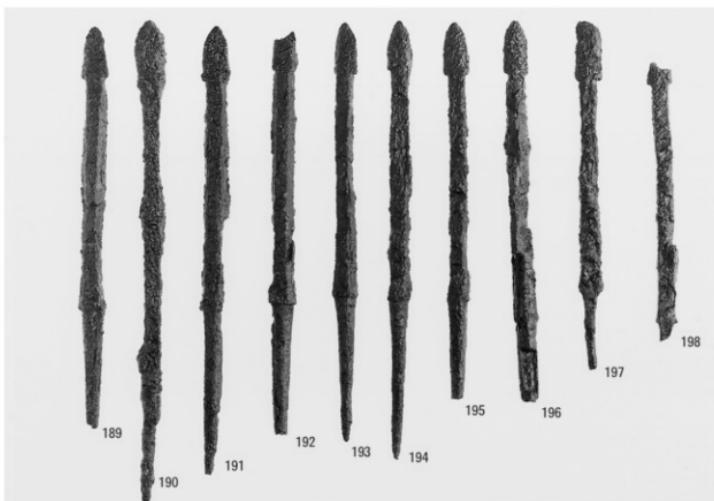


鉄鏃

天童山 8 号墳横穴式石室出土遺物



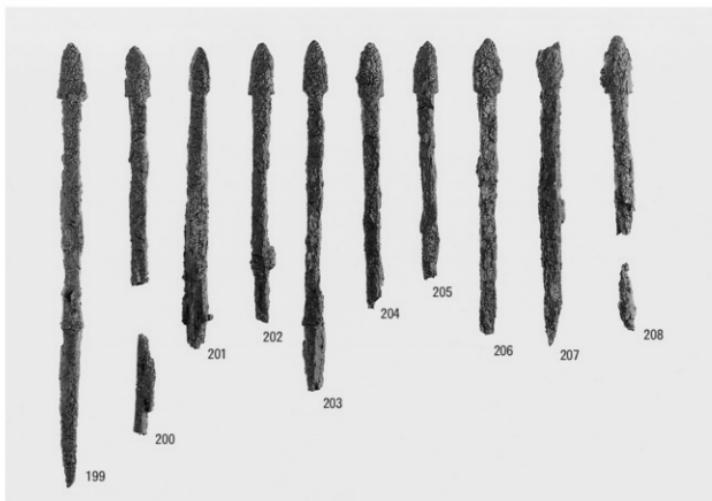
鉄鋤



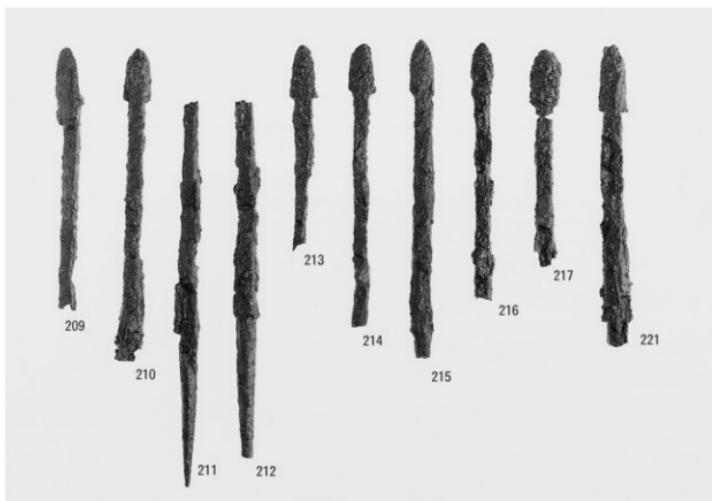
鉄鋤

圖版 32

天童山 8 號墳橫穴式石室出土遺物

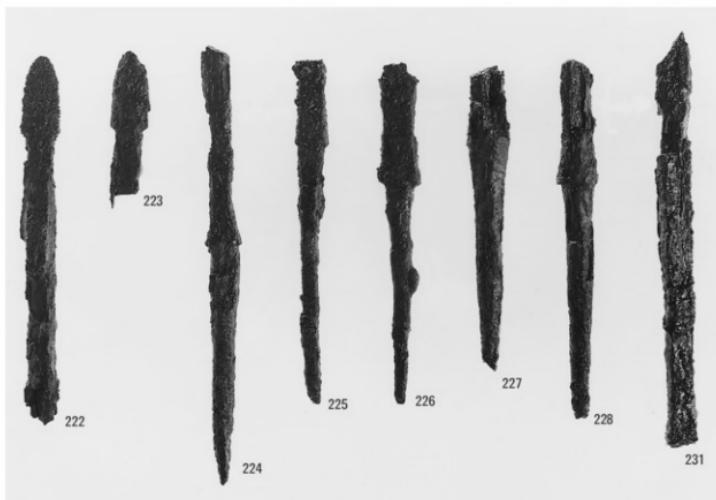


鐵鏃

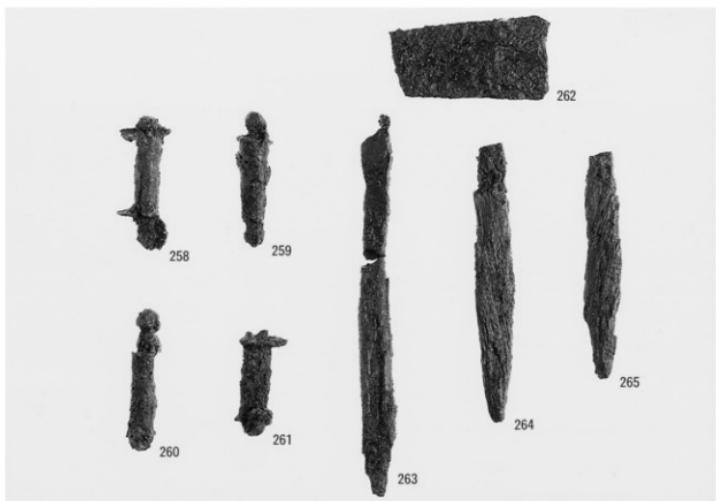


鐵鏃

天童山 8 号墳橫穴式石室出土遺物



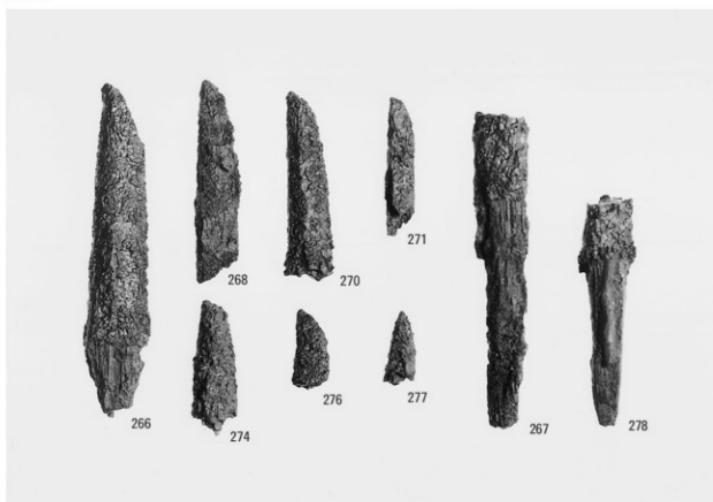
鐵劍



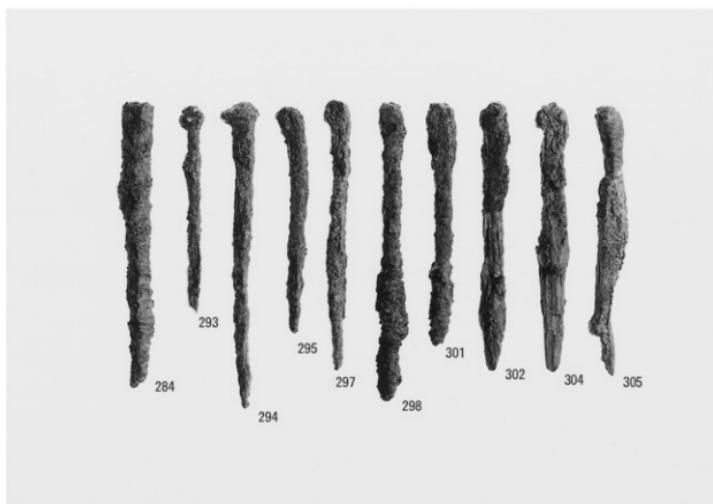
兩頭金具・鉛

图版 34

天童山 8 号墳横穴式石室出土遗物



刀子



铁钉

天童山 8 号墳横穴式石室出土遺物



307



326



308



327



311



330



320



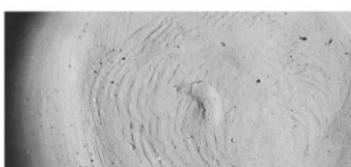
333



321



336



321 内面



311 内面

天童山 8 號墳橫穴式石室出土遺物



337



345



348



349



350



357



364



353



354

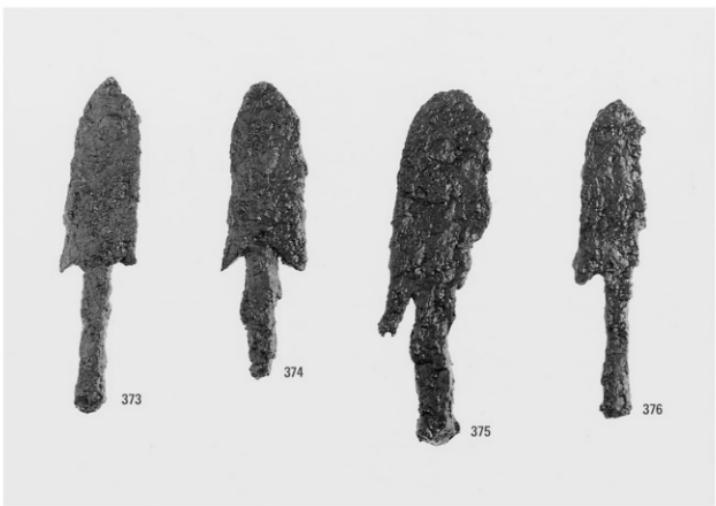


362

天童山 8 号墳小石室出土遺物



堅穴式小石室出土遺物



鐵器

图版 38

天童山 8 号墳小石室出土遺物



378



383



381



384



388



386



387



391

392



389

390

378



393

天童山 8 号墳周溝・墳丘出土遺物



396



403



402



405



410



411



420



412

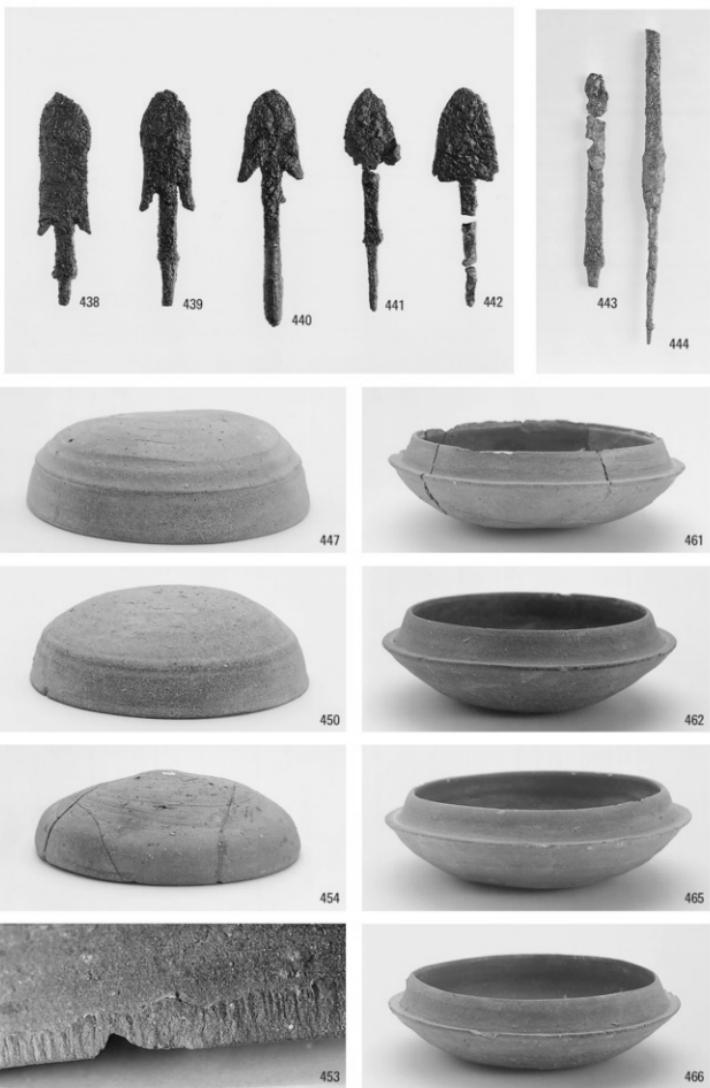
圖版 40

天童山 8 號墳周溝・墳丘・7 號墳出土遺物



圖版 41

天童山13号墳出土遺物



圖版 42

天童山13號墳出土遺物



土坑墓 SX2 出土土器・土坑 SK3・SZ4 出土土器



488



491



493



494



498



495



496



498



## 附編　近代古墳発掘調査報告

## 例　言

1. 本書は、昭和61年度に行われた近代古墳の発掘調査報告である。
2. 調査の原因は県営農業基盤整備事業である。
3. 調査体制は下記によった。  
　調査主体 三重県教育委員会  
　調査担当 三重県教育委員会文化課
4. 調査面積・期間・担当者は以下の通りである。  
　調査期間 昭和61年12月6日～昭和62年1月13日  
　面積 1,000m<sup>2</sup> 担当者 仁保晋作
5. 本書の執筆は調査研究I課（平成17年度当時）の豊田祥三が行った。図版の作成は豊田・仁保が行った。遺物写真は豊田が撮影した。
6. 本書の作成には、下記の方々から指導・ご協力を賜った。  
　伊藤雅文（石川県埋蔵文化財センター） 阪口英毅（京都大学） 鈴木一有（浜松市役所）  
　古谷毅（東京国立博物館）橋本達也（鹿児島大学総合博物館）和田晴吾（立命館大学）  
　西山要一（奈良大学）山岡奈美恵（元興寺文化財研究所）

## 凡 例

### (地図類)

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、伊賀市（旧上野市）都市計画図である。
2. 本書で示す方位は、真北を用いた。これらの地図類は本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第VI系を用いており、平成14年4月から施行されている世界測地系には対応していない。
3. 採図の方位はすべて座標北で示している。なお真北は座標北の西偏 $0^{\circ}16'$ 、磁北は座標北の西偏 $6^{\circ}40'$ である。

### (遺構類)

1. 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1967年初版) を用いた。

### (遺物類)

1. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺については、その都度指示している。
2. 遺物実測図は、通番である。
3. 遺物観察表は以下の要領で記載している。  
報告書番号…採図掲載番号である。  
実測番号…実測段階の登録番号である。  
器種…遺物の器種を示す。  
出土位置…遺物の出土した位置を記した。  
法量 (cm) …遺物の法量を示す。口径は口縁部径、底部は底部径、器高は遺物の高さを示す。  
なお、数値はそれぞれの部位の最大径である。  
調整・技法の特徴…おもな特徴を内面（内：）外面（外：）で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。  
胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。  
色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。  
残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示し、分子の数値のみ記した。6は約半分、全体が残っているものは完存と記した。

# I 前 言

## 1 調査に至る経緯

近代古墳は、伊賀市（旧上野市）上神戸字近代に所在した古墳である。調査前の段階で既に水田耕作などにより埴丘部分が削平され、後円部の一部が残るのみであった。昭和61年のは場整備の際に、堅穴式石室と考えられる埋葬施設が半壊した状態で出土したため、工事を中断し調査を行った。工事は進行中であり、緊急を有する事態であったため、必要最低限の記録作業を行うことしか出来なかつたという。

## 2 調査の記録と方法について

この発掘調査は人力掘削でおこなっている。また、古墳の土層断面の実測図については1／10もしくは1／20の手書きによる実測、平面図については平板測量による実測を行つた。

遺構写真は、緊急を要する調査であったため、35mmの白黒リバーサル・航空写真のみである。

## 3 整理作業とその方法

### a 遺物類の整理

発掘調査現地から三重県教育委員会文化課へ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

発掘調査を実施した昭和62年に、発掘調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、平成16年に実測作業を行い、未掲載遺物については、袋詰にし、整理箱に収納したあとに、専用収蔵庫へと収納した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつ専用のラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

### b 鉄製品の整理

甲冑をはじめとした鉄製品については、記録後、一括して取り上げた。保存処理は、刀剣類については（株）京都科学に依頼し、甲冑は奈良大学にそれぞれ依頼した。

### c 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、担当者によって報告

書作成のための図版作成を行つた。これらの遺物は報告書掲載順に収藏し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものは記録保存の一環で保存しているが、報告書用に作成した版下類やトレークス図版については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×9版（ブローニー）・4×5で撮影した。遺物写真の撮影は報告書掲載資料すべてではなく、掲載資料のうちの主だったものとした。

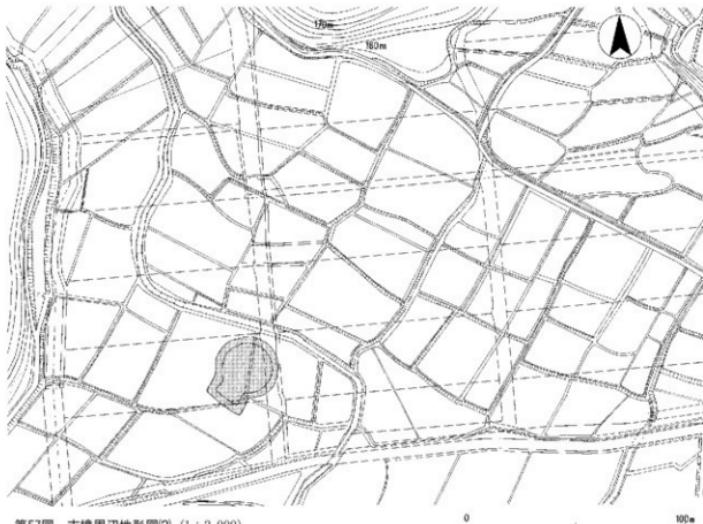
実測図の作成は、刀剣・土器類の一部は既に完成していたが、甲冑をはじめとする武具類が未実測であったため、平成16・17年に、実測作業を行い、遺物写真撮影と図版作成、および遺物の収蔵について平成17年度に実施した。

### d 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図、土層断面図など）、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで所蔵している。



第56図 古墳周辺地形図 (1 : 5,000)



第57図 古墳周辺地形図(2) (1 : 2,000)

## II 位置と環境

### 1 地形的環境

近代古墳の存在する伊賀市（旧上野市）上神戸は伊賀盆地の南端部に位置し、三方を山に囲まれ、その中央を木津川が南から北へと流れている。古墳は両側を丘陵によって囲まれた狭い谷合地形の中央部に位置する。

### 2 歴史的環境

歴史的環境については天童山古墳群の報告で述べているので詳しくは触れないが、古墳時代には、比土・古郡小盆地を望む南西側に所在する丘陵上に美旗古墳群が存在し、累代的に大型の前方後円墳が築造される。やや北東の比自岐盆地には石山古墳、南の比土盆地には湧水祭祀遺構が確認された城之越遺跡<sup>(1)</sup>、その南の阿保には豪族居跡が想定されている樅ヶ森遺跡<sup>(2)</sup>、沢代遺跡<sup>(3)</sup>など首長関連の遺跡が多く存在する。近代古墳は、美旗古墳群が盛行する段階に、

古墳群からやや場所を隔てた所に築造されており、美旗古墳群との関連が注目される。

また、古代には飛鳥から東国に至る主要道は、美旗古墳群の脇を通り、近代古墳周辺を通って木津川沿いに北上するルートが想定されており、この古墳を考えるうえで極めて重要な事項である。

〔註〕

- (1) 福永正三「市場の分布」『秘蔵の国 伊賀路の歴史地理』地人書房 1972年
- (2) 京都大学文学部博物館『紫金山古墳と石山古墳』(1993年)
- (3) 筒井正明(編)『石山古墳』第2回埋蔵文化財展示図録 (三重県埋蔵文化財センター 京都大学総合博物館2005年)
- (4) 稲積裕昌ほか『城之越遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)
- (5) 城宏『七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群・樅ヶ森遺跡調査報告書』青山町教育委員会 青山町遺跡調査会1995年)
- (6) 城宏・福田正明『沢代遺跡(2次)発掘調査報告』(伊賀市教育委員会 2006年)
- (7) 山田猛「伊賀」『新修国分寺の研究 第二巻 藤内と東海道』吉川弘文館 1991年)



第58図 近代古墳位置図 (1 : 25,000)

### III 墳丘

#### 1 墳形と規模（第59図）

古墳は調査前の段階すでに墳丘の大半が消滅しており、後円部の墳丘の一部が残存するのみであった。墳丘規模の確認のため周辺にトレッジを入れたところ、周溝を確認したため、調査範囲を墳丘全面に拡げた。その結果、全長30m、後円部径24m、前方部長6.0mの帆立貝形の古墳であることが判明した。

#### 2 墳丘施設（第63図）

墳丘の一部しか残存していないため、墳丘の構築過程の詳細については明らかにできないが、土層断面図によれば、水平の五層になっており、旧表土である黒褐色土に黄褐色・暗黄色土を水平に盛って構築されたと考えられる。

また、くびれ部の北側からは土師器の鉢（21）がもう一つの鉢（20）の中に入れられて出土した。

一方、南側のくびれ部からは高杯が出土したとされ、くびれ部で土器を用いた祭祀が行われたものと考えられる。

墳丘は大半が削平されていたため、葺石の有無は不明である。また、周溝から埴輪は出土しているが、量的には少なく、墳丘からは出土していないため、樹立形態も不明である。

#### 3 埋葬施設（第61・62図）

埋葬施設は大半が破壊されていたが、一部が残存していた。埋葬施設は、礫を積み上げており、長軸は4.0m以上、幅は約1mの堅穴式石室であった。石室の主軸は、N約7°Eで、ほぼ東西方向である。

石室内の埋土からは須恵器片が採集されている。

石室内の底には粘土が貼られており、木棺を固定するために敷かれたものとみられる。土層断面から、埋葬施設の構築過程を復元すれば、「墓壙を掘る→第62図の5層によって石室壁の基底部の石を安定させると同時に、木棺安置のためU字状の窪みをつくる→床に粘土を貼る→両側に木棺を安定させる石を置きながら薄く粘土を敷いて最終の粘土床をつくる」

といった構築順が考えられる。

石室内からは短甲をはじめとした武器・武具が元位置を保った状態で出土した。

石室の西端からは、甲冑が出土している。出土した武具は短甲の中に衝角付冑を逆転させ、冑前方を短甲の右側に向けて収められている。板縁は下方に落ち込んだ状態で出土している。短甲の後脇の押付板から地板の第1段が、内側に折れこみ、衝角付冑上に被さり、その上に右肩甲が接着していた。さらに破片の一部は短甲内外に散在していた。左の肩甲は短甲の左側に折りたたまれたような状況で出土している。また、頭甲と考えられる破片が短甲の現況上部にあった。

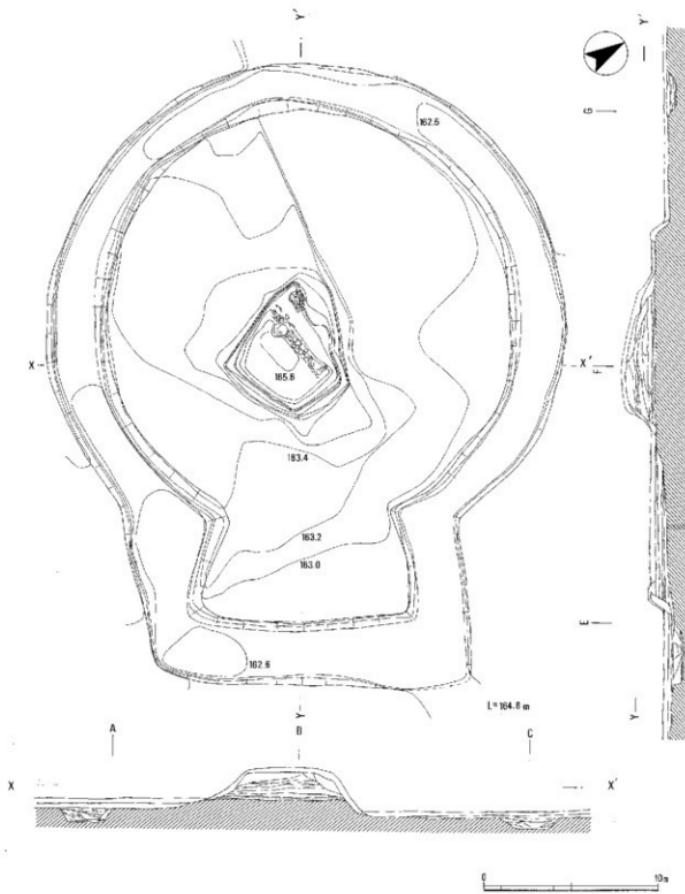
以上の出土状況から短甲の埋納形態は立位埋納で、短甲上に頭甲・肩甲を装着状態で配置していたものと考えられる。

短甲の後脇側には鉄刀（6）が切先を北東方向に向けて添えられている。

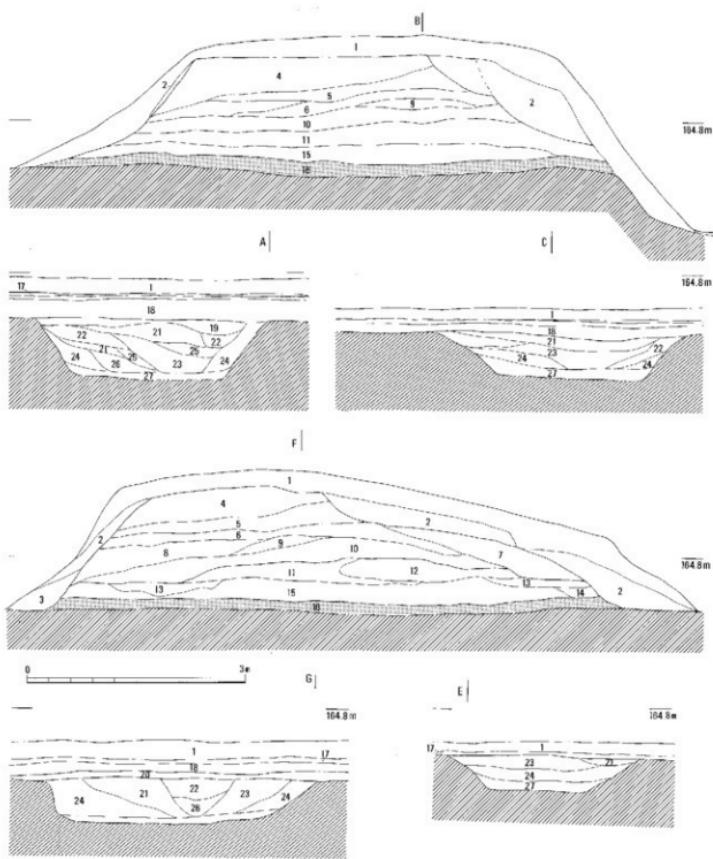
石室内からは他にも鉄刀・鉄鎌が出土しているが、粘土床上にて出土しており、棺内のものではなく棺外に供獻されたものとみられる。石室の南側には鉄鎌（10・11）と鉄劍（8）・槍（9）が並んで出土している。そして北側には鉄刀（7）が単独で置かれて出土している。いずれも切先を南側に向けて出土している。

#### 4 周溝（第60図）

周溝は、幅約3mで、深さは0.9m、断面は逆台形である。埋土は、青灰・灰色の粘質土で、底からは板状の木製品や埴輪が出土している。木製品については現存していないため、詳細は不明であるが、残された写真で見る限り、板状の加工木である可能性は高い。しかし、具体的な形態は不明であり、墳丘の大半が削平されていることもあって、墳丘に樹立されたという確証はなく、樹立された痕跡も確認されていない。従って、現状では一概に木製埴輪が存在したとは断定できない。

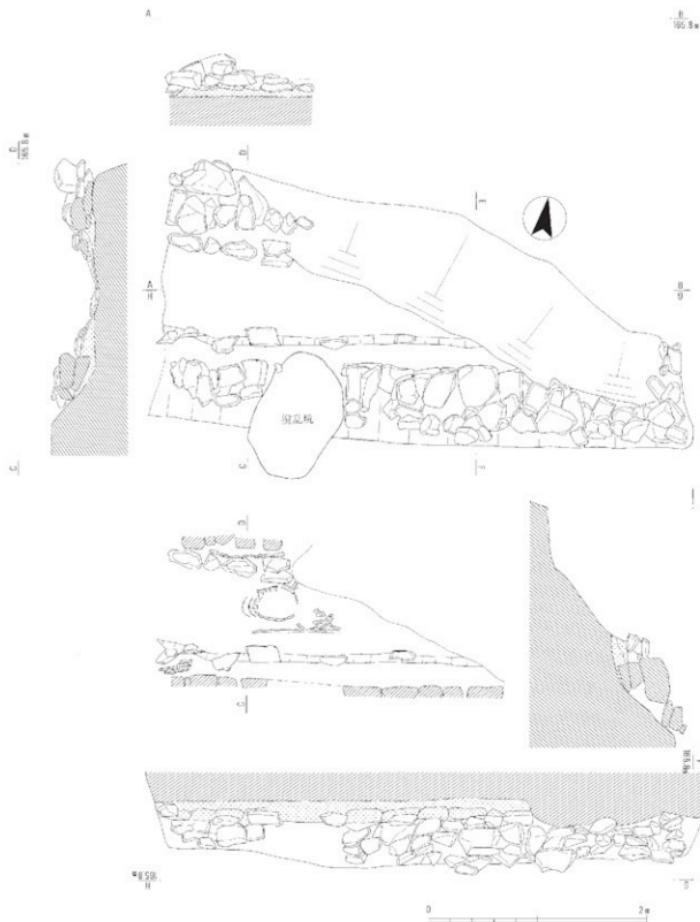


第59圖 近代古墳平面測量圖 (1 : 250)

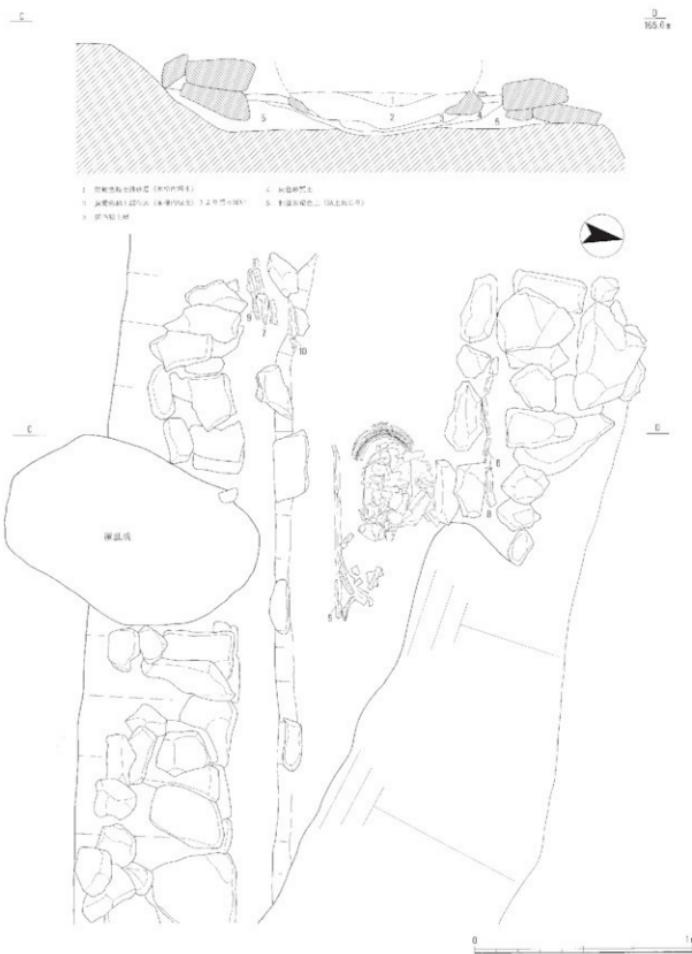


- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 土上               | 16 砂質黃褐色土 (砂利含む)   |
| 2 軽質黄褐色土 (斑上詰及び塊乱) | 17 黄褐色土            |
| 3 棕褐色耕育土 (質一)      | 18 不明              |
| 4 粘質褐色土 (砂利含む)     | 19 砂質粘土質黃褐色土       |
| 5 粘質羽衣褐色土 (砂利含む)   | 20 天然砂質土           |
| 6 硅質羽衣褐色土 (砂利含む)   | 21 砂質粘土質黃褐色土       |
| 7 不明               | 22 砂質灰褐色土          |
| 8 不明               | 23 疏砂點上斑状褐色土       |
| 9 不明               | 24 砂質灰褐色土 (砂利含む)   |
|                    | 25 砂質灰褐色土          |
|                    | 26 砂質灰褐色土          |
|                    | 27 砂質青灰褐色土 (木製品含む) |

第60図 填土層・周溝土層断面図 (1:60)

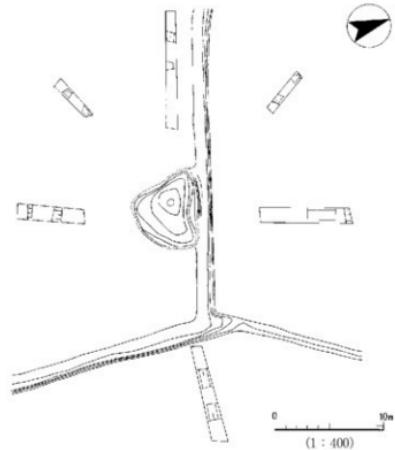
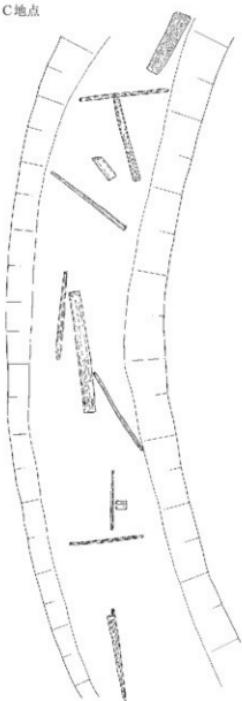


第61図 積穴式石室平面・立面・断面図 (1:40)

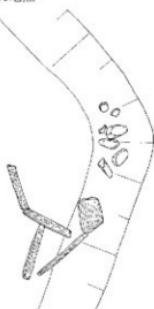


第62圖 石室内遺物出土狀況圖 (1 : 20)

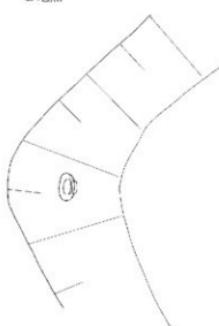
C地点



A地点



B地点

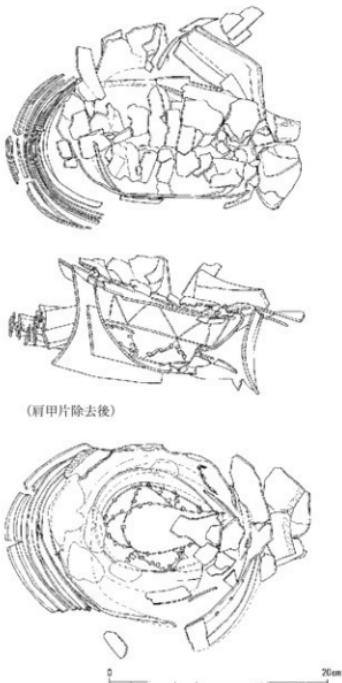


第63図 周溝トレンチ・木製品出土状況・くびれ部土器出土状況 (1:20)

## IV 遺物

### 1 武具

甲冑については出土後、現地にて土ごと取り上げ、保存処理の可能な機関に処理を依頼した。しかしながら、短甲には、接合・複元に不充分な箇所もあり、肩甲・頭甲についても接合が不充分である。今後、再処理の必要があるものの、ここでは現状で確認できる事項を報告する。



第64図 甲冑出土状況図 (1:40)

武具類は冑・短甲・頭甲・肩甲がセットで出土している<sup>(1)</sup>。

#### 三角板革綴衝角付冑 (1) (第65～66図)

伏板・地板第1段・胴巻板・地板第2段・腰巻板からなる三角板革綴衝角付冑 (1) である。部分的に欠損するが、構成する鉄板はすべて揃っている。

着装状態で前後幅27.4cm、左右幅21.6cm、全高19.4cmを測る。遺存状態は一部欠損し、内面の泥・錆が残っている箇所があるものの、おおむね良好である。

地板は衝角部に近いほど上重ねに連結され、伏板・胴巻板に下重ねされる。

伏板は前後29.5cm、頂部で最大幅9.1cm、先端部で5.0cmを測る。衝角部の先端で端部を折り込む。

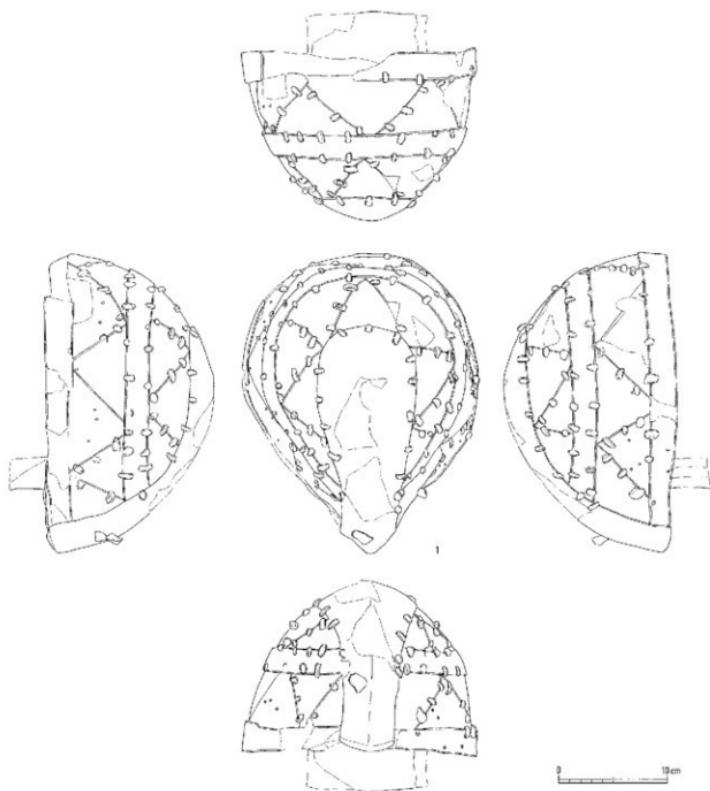
頂部については一部が欠損していることもあり、三尾鉄取り付けのための穿孔の有無は確認できない。また、破片についても現状では確認されていない。

地板第1段は左右4枚ずつ、後頭部に1枚の計9枚の地板で構成される。長さ6.0～8.8cm、高さ4.8～5.2cmほどの三角板と逆三角形の地板を交互に配する。後頭部には両側辺と上縁が弧状をなす逆三角形状の地板を1枚配する。

胴巻板は、細長い1枚の鉄板で、幅2.4cmを測る。

地板第2段は左5枚、右6枚後頭部1枚の計12枚の地板で構成され、左側の方が1枚多く用いる。地板は、長さ10～12cm、高さ6.0～6.5cmほどの三角板を交互に配する。衝角部側の伏板と接する地板は他よりも小さめの地板を用いている。後頭部には三角形の地板を配する。また、左の伏板から2枚目の地板には、X線写真によれば縦位の2つの小孔と1つの小孔が認められる。右側の伏板から3枚目にも、2孔と1孔確認でき、5枚目にも横位に2孔確認できる。

腰巻板は、幅2.6cmで、左の伏板側縁から7・9.3cmの位置には、2つの小孔が認められる。衝角部付近で内側に折り曲げ、衝角底板に連結する。一部欠損しているが、おそらく野上氏の分類の「上接式」と

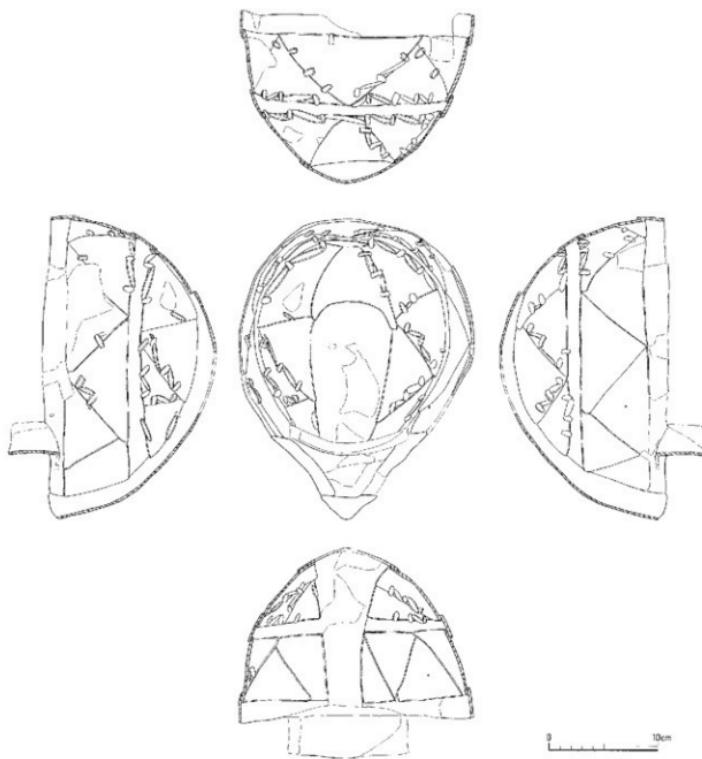


第65図 三角板革縫衝角付冑実測図（外面）（1：4）

考えられる。衝角底板・堅眉庇は一枚の鉄板である。

**綴（2）（第67図）** 衝角付冑に伴う幅10cm、残存長約61cmの鉄板を馬蹄状に曲げて製作された板綴で、一部欠損するが、ほぼ完形で、いわゆる「一枚板綴」である。<sup>(2)</sup> 現況で、前後約24cm、左右約22cmである。

覆輪は一部に目視で確認できるものの、X線でみても綴孔は確認しづらい。冑から垂下するための孔は水平方向に2孔1組で、2箇所確認できる。



第66図 三角板革継衝角付背甲測図 (内面) (1:4)

**三角板鉄留短甲** (3) (第68~71図) 前胴、後胴とも堅上3段、長側4段の計7段で構成される胴一連の三角板鉄留短甲である。後胴の押付板の右側から脇部、左前胴の押付板の上部、裾板の下部など欠損している。鉄板の重ね合せは、後胴中央の鉄板に上重ねして連結される。

**前胴** 前胴は、左右ともほぼ同じ鉄板構成である。前胴高は33cm、後胴高は現況39cm、押付板左右幅は右側で11.2cmである。引合板は左右各1枚で、上端は角

がとれ丸みをもつ。幅はほぼ一定で3.4cmである。

右前胴の引合板の上端部から押付板にかけて、木質が付着している。また、左側の引合板には繊維痕が残存している。

前胴堅上第1段の押付板は引合板と連結する部分で幅6.2cm。押付板上縁には革組覆輪が施されている。

前胴堅上第2段の地板は左右とも各1枚で、押付板と連結する地板は押付板の形状にあわせて斜めに裁断している。地板は上辺6.0cm、下辺7.6cmの台形で、



第67図 板縫実測図 (1:4)

右側の引合板の側縁から2.0・3.7cmほどの位置にはワタガミ受緒孔が横に2孔認められる。

前胴堅上第3段の帯金は左右各1枚で構成される。幅は3.8cmである。

前胴の長側第1段の地板は左右各2枚で構成され、引合板側の地板は上下幅6.5cmの台形であるが、脇部側の押付板との連結部分には押付板の形状に合わせて裁断された地板を用いており脇部まで続く。

長側第2段の帯金は左右各1枚からなる。幅は3.8～4.0cmである。

長側第3段の地板は後胴と一連のものを含めて各2枚で構成される。

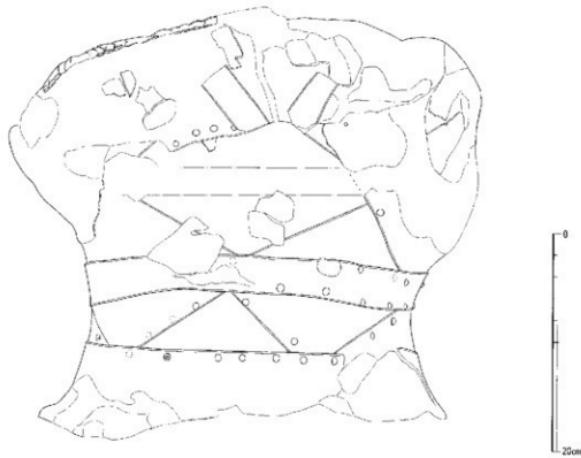
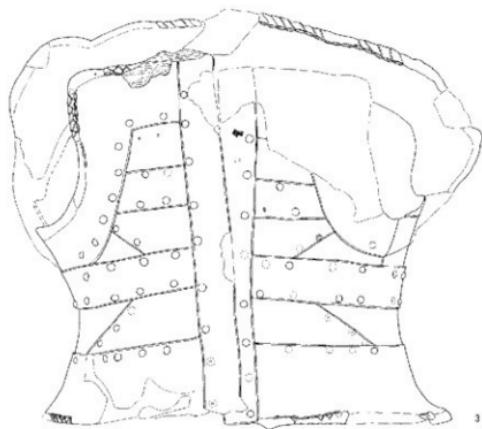
長側第4段の板縫は左右1枚からなる。幅は6.5～7.3cmで、左側の板縫下縁には覆輪が残るが、右側については欠損している部分が多く不明瞭である。

**後胴** 後胴は、押付板の右側と堅上第3段の帯金部分を中心に欠損しているが、全体的に鉄板構成が推定出来る。

後胴堅上第1段の押付板は、上縁がややふくらみをなし、1枚の鉄板を彎曲させて形成される。押付板の幅は左右43.6cm（復元幅）、上下12.2cmである。肩甲の破片が付着しており、下縁も欠損しているため詳細については確認できない。

後胴堅上第2段の地板は、3枚で構成される。底辺22.9cm、高さ8.7cmの二等辺三角形の地板を中心配し、その左右に逆台形を呈した地板を連結する。右側の逆台形の地板には懸緒孔とみられる小孔が横に2孔確認できるが、左側は不明である。

後胴堅上第3段の帯金は1枚の鉄板で、幅は約4cmである。



第68図 三角板新留短甲実測図(外面) (1:4)



第69図 三角板鉢留短甲実測図（側面）

後胴長側第1段は3枚の鉄板で構成されており、中央部に底辺27cm前後、高さ7.3cm逆三角形の地板を配し、その左右に台形状の地板を連結する配置をとつていたと思われる。そのため、長側第1段の地板は合計7枚となり、本短甲の大きな特徴となる。

後胴長側第2段の帶金は、中央1枚で、前胴の左右各1枚を含めると3枚からなる。幅は後胴中央部で3.5cmを測る。幅は左3.9cm、右3.8cmである。

長側第3段の地板は、合計9枚で構成され、中央に底辺16cm前後、高さ7.5cmの二等辺三角形の地板を配し、逆三角の地板と三角の地板を交互に連結している。引合板寄りの地板は脇部側を斜辺とした逆台形を呈する。

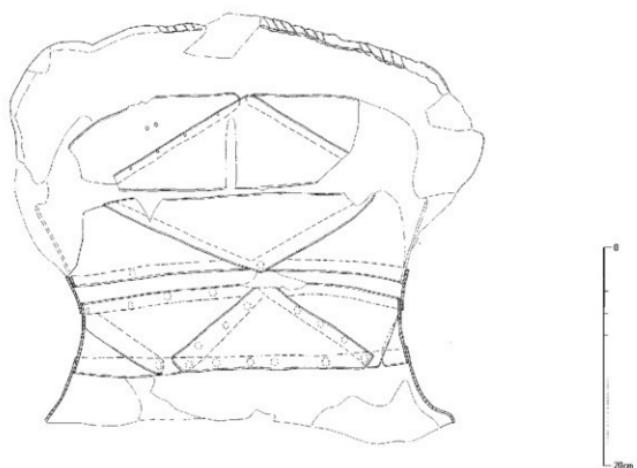
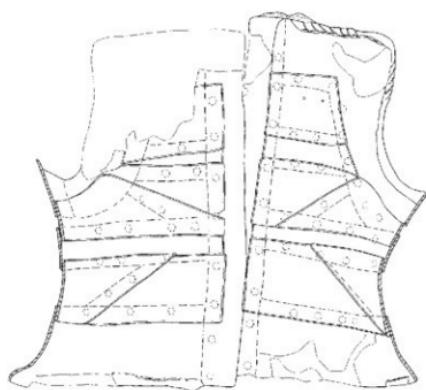
長側第4段の板は、前胴部も含め、3枚の鉄板で構成され、幅約8.5cmを測る。中央1枚、左右各1枚で構成される。板下線にも革組履蓋が施される。部材構成 地板の配置は左右ともほぼ対象である。前胴の地板配置は小林謙一氏によるA型、鈴木一有氏による鼓形系統に相当する。

新留の技法 新頭径は5mmほどで、滝沢誠氏の属性分類<sup>(6)</sup>（以下滝沢分類と称する）の「大型鉢」に相当する。

鉄板の連結数については後胴堅上第3段における連結数を編年の指標とされている。近代古墳の短甲は後堅上第3段が欠損しており、連結数は不明である。帶金と引合板などの縦板との連結位置は縦板の2箇所で帶金を連結しており、3枚留めを避ける。連結位置は滝沢分類の「C類」に相当する。

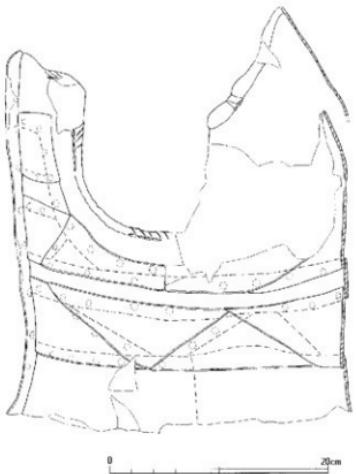
なお新留のピッチは3~4cmで、縫じしろは1.4~1.7cmが基本である。

**頭甲（4）**（第73図） 左側の一部が残存するが他にも小破片があり、接合の可否の検討が必要である。正面立面形は逆台形で、一部に鉢が残存することから、新留のものと考えられる。襟部は削り込み部の縁を折り返すことによりつくられている。下縁部は斜めになる。藤田和尊氏の分類のⅢ類に相当する。側縁にはX線写真でみると肩甲と連結するための4孔1組の威孔が3箇所確認できる。また、前側の引合板寄りには引き合わせのための小孔が縦位に2孔認められる。



第70図 三角板鎧留短甲実測図（内面）（1：4）

## 2 武器



第71図 三角板鉄留短甲実測図（脇部内面）

**肩甲（5）**（写真図版53） 破片が多く接合が不充分のため図示するに至らなかった。左肩の10段まで確認できるが詳細は不明である。概部には鉄板端を「」状に折り曲げていて、それぞれの下縁近くにはX線写真では4孔1組の威孔が3箇所確認できる。

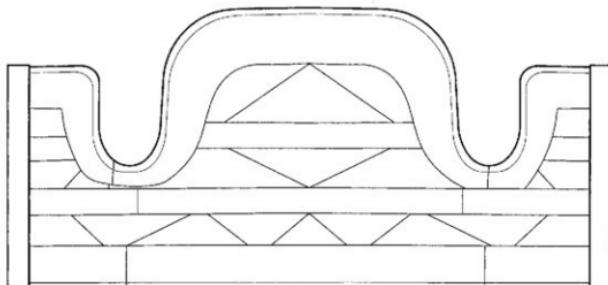
鉄刀・鉄槍・鉄鋸が出土している。（第73図）

**鉄刀（6・7）** 6・7は直刀である。6の全長は84.0cm、刀部は幅2.9~3.0cm、両平造である。圓部は欠損しており、形状は不明である。茎部には2箇所、目釘穴が確認できる。茎尻は隅抉尻である。7は刃先と刃部の中央部が欠損する。残存長は70cmである。茎部には木質が残存するため、形状は不明であるが、X線写真によれば、茎尻は十文字尻である。圓部はやや欠損しているため不明な部分があるが、おそらく片圓で、茎は圓から撫角に切り込み、圓から茎尻方向約5cmまでは浅い抉り込みがある。なお目釘孔は肉眼で観察できないが、X線写真では2箇所確認できる。刃身・茎とともに鞘・柄の木質が遺存している。

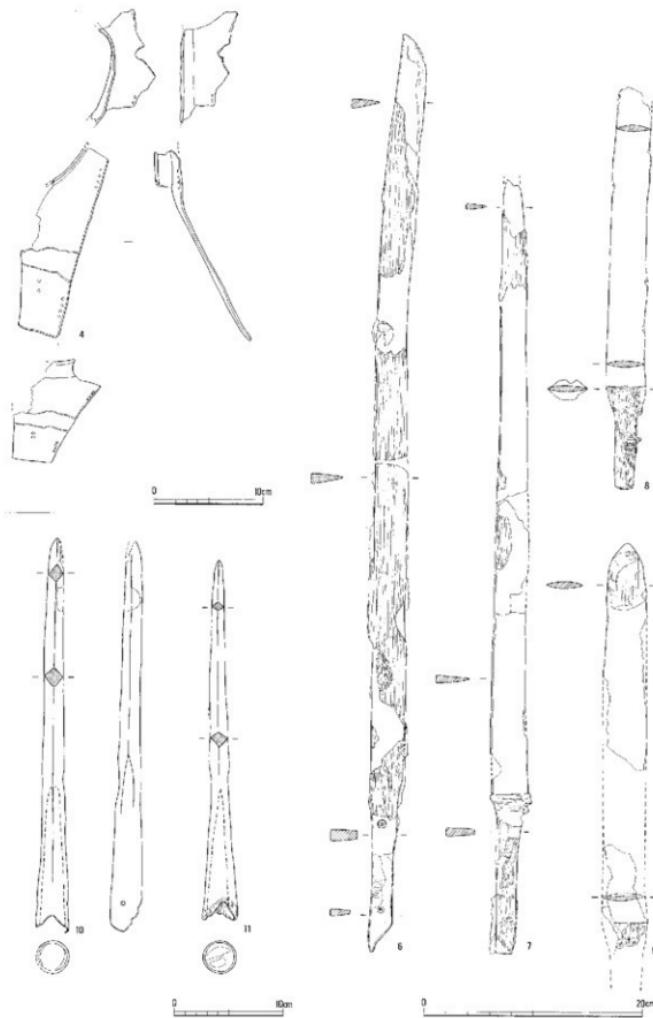
**鉄槍（9）** 槍は1点確認されている。8は残存長37.0cm、刃部の中央幅3.5cmである。茎部には木質が残存しており鞘に入れられて副葬されたと考えられる。9は残存長20.8cm、刃部の中央幅3.5cmである。刃先部には木質の痕跡が遺存している。

**鉄鋸（10・11）** 10は全長36.2cm、刃部長19.5cm、袋部直径3.0cm、刃部の断面は菱形で、明瞭な鎬が確認できる。目釘は遺存している。袋部には山形の抉りが入れられ、外・内面には木質が遺存する。

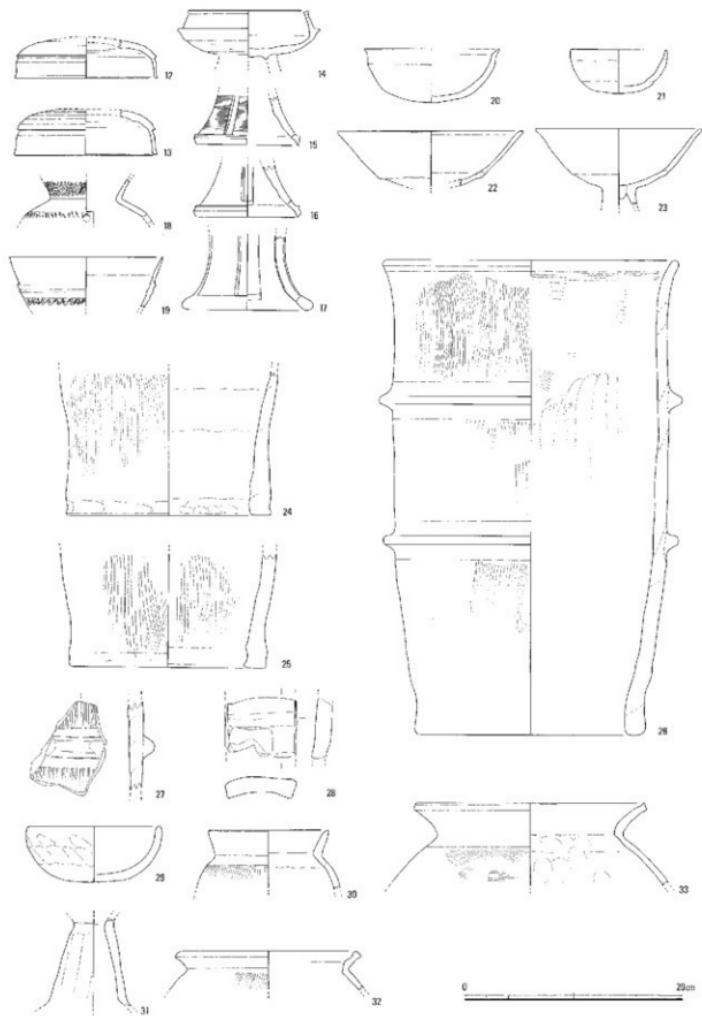
11は刃先をやや欠損しているが、全長33.0cm、刃部長20.0cm、袋部直径3.2cm、刃部の断面は菱形で、明瞭な鎬が確認できる。目釘は遺存しない。袋部に



第72図 短甲展開模式図



第73図 類甲・鉄製品武器実測図 (1:4)



第74図 近代古墳出土遺物実測図 (1:4)

番号	実測番号	縦・横	器種など	出土位置・層等名	法量(gm)	調査・技術的特徴	地土	色調	保存度	特記事項
12	4-6	須恵器	蓋杯	埴丘頭部	(13)13.2 (高)13.4	外:回転ナット・回転ヘラケズリ・ナチ 内:回転ナット・回転ヘラケズリ・ナチ	良	灰褐色	3/12	
13	4-5	須恵器	蓋杯	埴丘頭部	(13)13.2 (高)13.4	外:回転ナット・回転ヘラケズリ・ナチ 内:回転ナット・回転ヘラケズリ・ナチ	良	灰褐色	4/12	
14	2-2	須恵器	高杯	埴丘頭部	(13)11.0 (高)11.5	外:回転ナット・回転ヘラケズリ・継脚貼り付け 内:回転ナット	良	灰	3/12	
15	4-9	須恵器	高杯(脚部)	埴丘頭部	(13)10.4 (脚附)9.4	外:ナチ・透かし穿孔 内:回転ナット・キメ・透かし穿孔	良	暗青灰	6/12	3方向の透かし
16	4-10	須恵器	高杯(脚部)	埴丘頭部	(13)9.4 (脚附)5.0	外:ナチ・透かし穿孔 内:回転ナット	良	暗青灰	2/12	
17	5-1	須恵器	高杯(脚部)	埴丘頭部	(13)8.0 (脚附)12.0	外:ナチ・透かし穿孔 内:回転ナット	良	灰	4/12	焼き跡れあり
18	4-8	須恵器	鉢	埴丘頭部	(13)6.3 (高)6.6	外:ナチ・波状文・列点文・穿孔 内:ナチ・波状文	良	灰白色	3/12	
19	4-7	須恵器	直口壺	埴丘	(13)6.8 (高)6.8	外:ナチ・波状文 内:ナチ	良	黑褐色	小片	
20	4-4	土師器	鉢	くびれ部(側)	(13)12.4 (高)12.4	外:ナチ・U字縫隙施くヨコナナ 内:ナチ	良	褐色	21とセットで出土	
21	4-2	土師器	鉢	くびれ部(裏)	(13)9.9 (高)9.9	外:ナチ 内:ナチ	良	褐色	定形	20とセットで出土
22	3-1	土師器	高杯	くびれ部(西かわ)	(13)11.0 (高)12.0	外:ナチ・U字縫隙ヨコナナ 内:ナチ	善	褐色	細部欠損 3/12	
23	4-1	土師器	高杯	くびれ部(西)	(13)11.2 (高)6.9	外:ナチ・U字縫隙ヨコナナ 内:ナチ	良	赤褐色	細部欠損	
24	1-1	埴輪	円筒埴輪	周溝埋土	(直径)18.7 (高)18.7	外:タテハケ・周溝部ヨコナナ 内:ナチ	中や粗	灰黄	3/12	
25	1-2	埴輪	円筒埴輪	周溝埋土	(直径)18.0 (高)18.0	外:タテハケ・周溝部ヨコナナ 内:ナチ	中や粗	灰白	2/12	
26	6-1	埴輪	円筒埴輪	周溝埋土	(直径)22.0 (高)22.0	外:タテハケ・ヨコナナ 内:ナチ	粗	灰黄	4/12	赤色斜面付着
27	1-3	埴輪	円筒埴輪	周溝埋土	(直径)21.0 (高)~	外:タテハケ・突起貼り付け 内:ナチ	中や粗	黄黒	小片	
28	2-1	埴輪	象鼻埴輪	周溝埋土	(直径)16.5 (高)16.5	外:ナチ 内:ナチ	中や粗	灰黄	小片	赤色斜面付着
29	3-2	土師器	鉢	周溝埋土	(13)12.0 (高)12.0	外:ナチ 内:ナチ	中や粗	灰黄	1/12	
30	3-3	土師器	高杯	周溝埋土	(13)13.6 (高)13.6	外:ナチ 内:ナチ	中や粗	灰黄	細部欠損 3/12	
31	2-4	土師器	小形壺	周溝埋土	(13)11.0 (高)11.5	外:タテ方向のハケ・ヨコナナ 内:ナチ	中や粗	灰白・黒	3/12	
32	4-3	土師器	台付壺	埴土内	(13)17.0 (高)17.0	外:タテ方向のハケ・ヨコナナ 内:ナチ	中や粗	黄褐	1/12	S字状口縁台付壺
33	2-3	土師器	鉢	周溝埋土	(13)21.2 (高)17.3	外:タテ方向のハケ・ヨコナナ 内:ナチ	中や粗	灰黄	4/12	

第22表 近代古墳土器・埴輪観察表

は山形の挿りが入れられ、外面には目釘孔が遺存する。

### 3 土器・埴輪

**須恵器** (第74図) 蓋杯(12・13)・高杯(14~17)

(18)・直口壺(19)が出土している。12・13は蓋杯で、口径はともに13cmである。天井部には丁寧にヘラケズリされ、口縁部との境も明瞭である。端部は平坦な面をもつ。14は高杯の杯部である。脚部は欠損している。

15~17は高杯の脚部の破片である。脚裾は、断面三角形の突帯状を呈し、端部を下方に突出させているものと、玉縁状に丸くおさめるものがある。透かしはいずれも長方形であり、15の外面にはカキメが施される。

18は蓋の頭部の破片である。体部には列点文の後、透かしが穿孔され、頭部には波状文が施される。19は、直行縫で、口縁部のみの小片である。口縁は外上方へ直線的に伸び、2段の断面三角形の段を巡らし、その下には波状文が施されている。

**土師器** くびれ部から鉢(20~21)、高杯(20~21)、

周溝埋土から鉢(29)と高杯(30)、壺(31~33)が出土している。鉢(20)は口径12.2cmで、口縁部を強くヨコナナデし、端部内部も内傾する面をもつ。20・21は高杯で、共に脚部は欠損する。口径は15cmで、口縁部は緩く屈曲した後大きく外方へ開く。32は埴丘の盛土内から出土したもので、S字状口縁付壺の口縁部の破片である。

**埴輪** (図74) 前方部側の周溝内から埴輪が出土している。(26)は2条3段の円筒埴輪で、一部しか残存していないため透かし孔については不明である。

復元径は27cmで高さは43.5cmである。焼成は土師質である。外面の調整は粗いタテハケで、内面はナチ調整である。外面には赤色顔料が残り、赤彩されていたことがわかる。(24・25)も円筒埴輪の基底部の破片であり、外面には粗いタテハケが確認できる。24の基底部にはナチ・25に基底部にはヘラ状の工具による面取りが行われていることが確認できる。自重によってはみだした粘土をかき消したものとみられる。

28は板状の破片で、形象埴輪の破片と考えられるが種類は不明である。

〔註〕

- (1) 甲冑に関しては鈴木一有氏、阪口英毅氏、橋本達也、古谷毅氏の諸氏に教示頂いた。また、甲冑に関しては以下の文献を参照した。  
(2) 野上太助「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上」『考古学研究』21-4 1975年  
(3) 古谷毅「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑—いわゆる“一枚鐵”の提起する問題」(『MUSEUM』第445号)
- (4) 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」『考古学研究』21-4 1975年  
(5) 鈴木一有「千人塚古墳の研究（2）－三角版短甲について－」『浜松市博物館館報VII』浜松市博物館 1995年  
(6) 滝沢誠「鉢留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号  
(7) 藤田和尊「頭甲編年とその意義」『關西大学考古学研究紀要』4 1984年

## V 結語

近代古墳の調査成果をまとめ、総括とする。

**墳形** 近代古墳は全長30mの前方部の短い帆立貝形の墳形であるが、周溝を含めると36mの規模となる。伊賀地域において同様の墳形のものとしては近代古墳から木津川沿いに北上した市部に所在するぬか塚古墳が知られ、周溝から出土した須恵器から、近代古墳と同時期かやや下る築造時期が想定されている。

伊賀では中期後葉段階に、圧倒的な規模を誇る美旗古墳群との古墳と比べると、規模は小さいが、帆立貝形の古墳が築造される。これらは、いずれも前代に有力な古墳の存在していない地域に出現することは注目でき、伊賀南部の美旗古墳群、北部の御墓山古墳などが所在する外山・鷺棚地域周辺の首長とのような結びつきを有していたのかを考えるうえで示唆的である。

**埋葬施設** 墳丘は、大部分が発見時に既に破壊されており、埋葬施設に關しても、石室の下部しか残存していないかったが、堅穴式石室と考えられる。県内での堅穴式石室を埋葬施設にもつ古墳の調査事例は現状ではなく、中期後葉の段階においても伝統的な埋葬施設を採用している点は注目できる。

**出土遺物と築造時期** 近代古墳から出土した甲冑のセット関係は、衝角付冑と組が革綴で、頭甲・短甲が鉢留の組み合わせからなる。冑と短甲で新古の差があり、セット関係に乱れがみられる。埴輪は円筒埴輪が確認され、須恵質を呈していないことと、出土している須恵器（田辯昭三氏による陶邑編年）の特徴からも中期後葉に比定される。これは副葬品の特徴と合わせてみても整合性をもつ。

**被葬者像** 埋葬施設は、旧来からの埋葬施設である堅穴式石室を採用することから、被葬者は伝統的な

在地の勢力であることが看取でき、古墳の立地やその内容からは美旗古墳群の一族の傍系集団、もしくは首長に仕えた者の墳墓である可能性が高い。また、古墳の南側で調査された高賀遺跡では、流路から近代古墳の築造時期と同時期の可能性がある遺物が確認され、刀形や鞘口の木製品が出土しており、周辺に被葬者の居住区の存在が窺われ、古墳の被葬者と関連する遺跡と考えられる。また、古墳の立地する土神戸は北伊賀へと向かう分岐路に近く、交通の要所であることから、交通路の確保において重要な役割を担った人物の墳墓であろう。

**まとめ** 近代古墳は、この地域の地域首長クラスの墳墓と想定され、甲冑をはじめとした優秀な副葬品を保有していた一方で、堅穴式石室の採用や在地色の強い埴輪などといった要素をもつ。一般的に甲冑をセットで副葬する古墳は、畿内からの直接的な影響を強く受けたと捉えることが通例であるが、甲冑以外の要素は必ずしも畿内色は強くなく、在地的な要素が顯著にみられることも少なくない。この段階において、既に中小規模の首長層にまで、王権による直接的な影響が及んだのか否か、美旗古墳群に代表される地域首長との結びつきのあり方についての問題は今後検討していかなくてはならない課題である。近代古墳の調査は伊賀地域のみならず、古墳時代中期後葉における小地域の首長クラスに相当する古墳の調査例として貴重である。（豊田祥三）

〔註〕

なお近代古墳の遺物についての考察は下記の文献に掲載した。  
豊田祥三「近代古墳の研究」『研究紀要 第15号』三重県埋蔵文化財センター 2006年)

近代古墳



近代古墳遠景



古墳墳丘残存状況



近代古墳調査後全景（東から）



後円部全景（北から）

近代古墳堅穴式石室



堅穴式石室出土状況（西から）



石室内短甲出土状況（東から）

圖版 47

近代古墳堅穴式石室



石室内短甲出土状況（東から）



棺外遺物出土状況



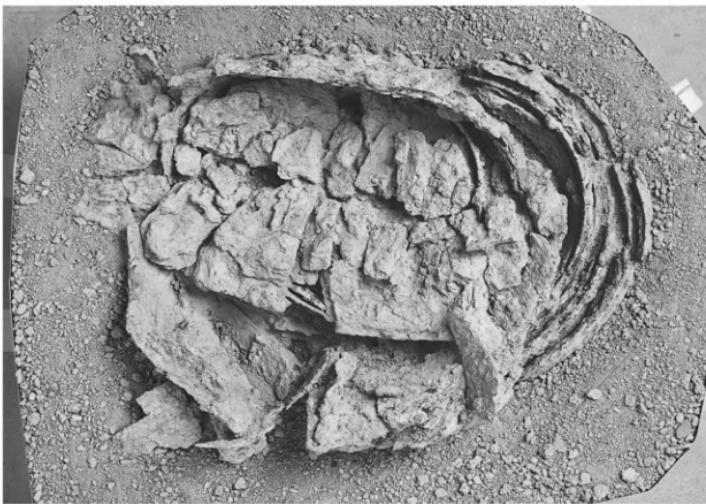
周溝木製品出土状況（北から）



周溝土層断面



くびれ部土器出土状況（B地点）



甲冑出土状況（取り上げ後）



甲冑出土状況（肩甲除去後）



甲冑出土状況（裏から）

圖版 51

近代古墳  
三角板革綴衝角付胄



1

三角板革綴衝角付胄



侧面（右側）



侧面（左側）



前面



後頭部側



頸甲（上から）



頸甲（斜めより）



2

綴



肩甲

近代古墳  
三角板銅留短甲



前胸



後胸

圖版 55

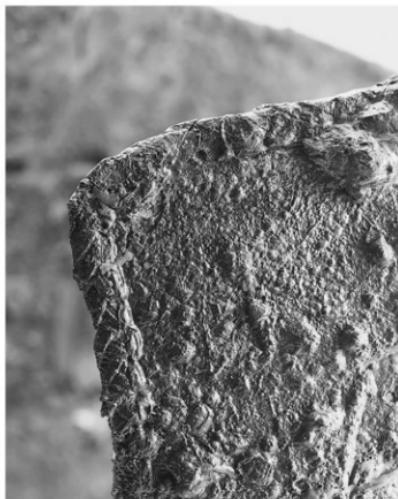
近代古墳  
三角板銛留短甲



右侧面



左侧面



前胸覆輪



後胸覆輪



鐵刀



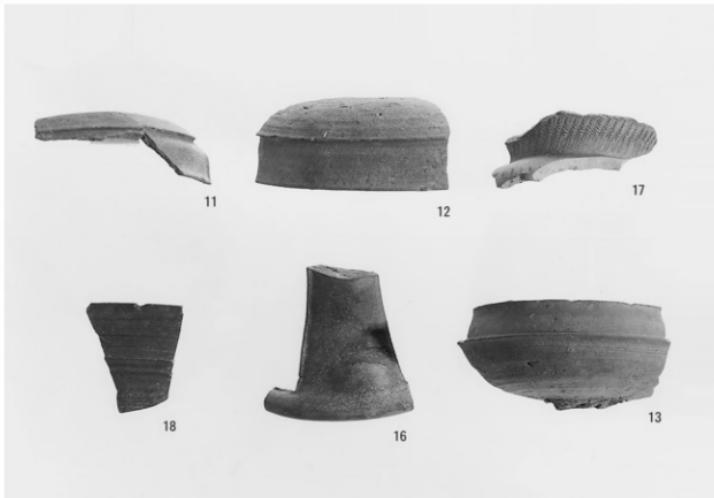
鐵劍・鎌



鐵鉗

図版 57

近代古墳出土遺物



須恵器



くびれ部（B地点）出土土器



土師器



円筒埴輪

## 報告書抄録

ふりがな	てんどうやまこふんぐん はっくつちょうさほうこく ふへん きんだいこふんはっくつちょうさほうこく							
書名	天童山古墳群発掘調査報告 附編 近代古墳発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	275							
編著者名	豊田祥三 船越重伸 大川操 植田直見 山岡奈美恵 川本耕三							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 電 0596(52)1732							
発行年月日	2006年12月25日							
ふりがな所収遺跡名	ふりがな所 在地	コ一ド 市町村: 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
天童山古墳群	伊賀市上郡	206 : 181	34度42分10秒	136度9分3秒	20030511 ~ 20030605	1,389m <sup>2</sup>	県道	
近代古墳	伊賀市上神戸	206 : 8083	34度40分10秒	136度8分53秒	19861206 ~ 19870113	1,000m <sup>2</sup>	は場整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
天童山古墳群	古墳	古墳時代	8号墳 (横穴式石室)  8号墳 (堅穴式小石室)  13号墳 (横穴式石室)	鉄鉗・石突・鐵鑓 刀子・切子玉・環玉・管 玉・鐵釘 須恵器(台付壺・高杯・ 堤瓶・蓋杯・身杯など) 土師器(長頸壺・榠)				
近代古墳	古墳	古墳時代	堅穴式石室	甲冑(胄・新留短甲) 鉄 刀・鉄鉗 埴輪・須恵器				
要約	県道建設にともなう天童山8・13号墳の発掘調査報告。8号墳は6世紀後半の両袖の横穴式石室と小石室を確認。一つの墳丘に2つの石室が構築される貴重な事例となった。石室からは鉄鉗や鐵鑓などの武器類のほか鏡泊製の環玉や水晶の切子玉といった玉類、多くの土器が出土した。13号墳は両袖の横穴式石室をもち、多くの須恵器が出土した。また、8号墳では埴丘築造段階の祭祀の痕跡が確認され、墳丘にとり込まれた小石室とともに貴重な事例を提示することになった。伊賀の群集墳については調査事例が少なく、とりわけ不明な点が多い盆地中央地域の調査例として貴重である。							
	また、天童山古墳群の所在する上郡の南に所在した上神戸の近代古墳は、昭和62年には場整備に伴い調査がおこなわれ、全長30mの帆立貝形の古墳で、埋葬施設である堅穴式石室から甲冑のセットと鉄鉗・鐵刀など良好な鉄製武器・武器の一括資料が出土した。天童山古墳より先行して築造された中期古墳であり、伊賀における数少ない副葬品の判明している中期古墳として重要な古墳であるため、併せて掲載した。							



---

三重県埋蔵文化財調査報告書275

天童山古墳群発掘調査報告  
—附編 近代古墳発掘調査報告—

2006年12月発行

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 光出版印刷株式会社

---

